



天然紀念物調查報告

植物之部第十五輯

文
部
省

始



天然紀念物調查報告

植物之部第十五輯

文
部
省

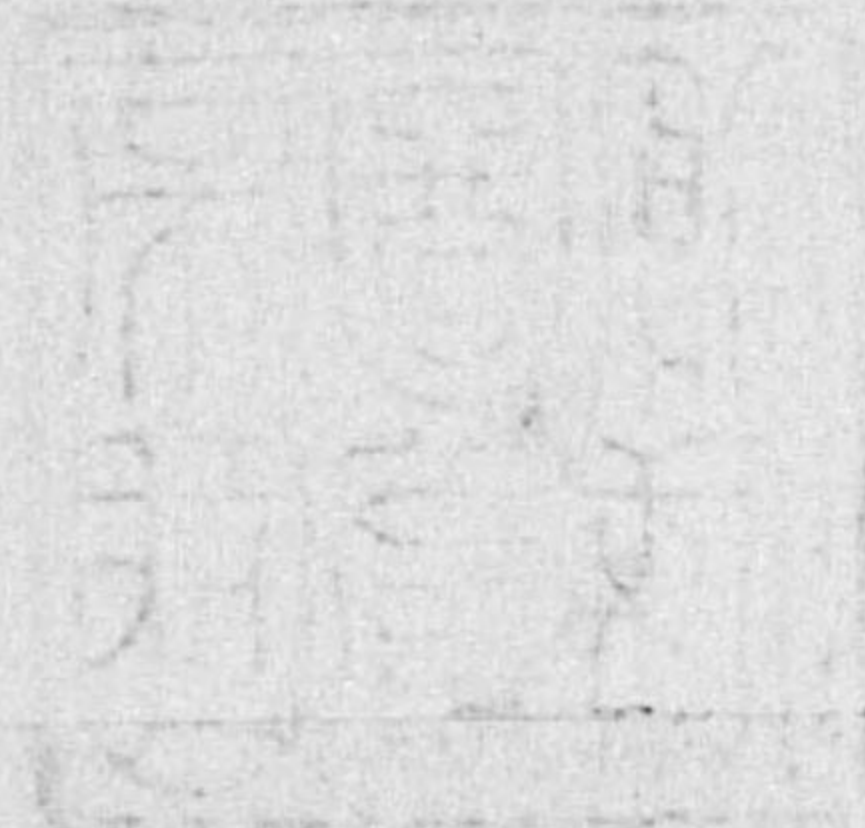


天然紀念物調查報告

植物之部第十五輯



文部省
教育局
寄贈



六八	四一	四〇	(頁)	正
二	五	一三	(行)	課表
	上大崎長者丸	細きもマ	(誤)	
		細きもの	(正)	
		芝區白金臺町		



14.5-401

熊本縣

目次

大野下の大蘇鐵	一
笛鹿のイチヒガシ	三
高田蜜柑の老樹	四
萩原土手の黒松並木	一〇
麻生原の金木犀	一一
竹の熊の大樺	一三
黒淵の阿彌陀杉	一四
下ノ城の公孫樹	一八
島根縣		
三隅大平櫻	一九

山口縣

目次

(名勝) 徳佐の(櫻)……………二
 東吉部の大山櫻……………三
 春日の大ヤマモモ……………四
 河原の大樫……………六

京都府

天橋立の松樹枯死に関する調査……………七
 瑠璃溪の森林に就て……………三

福岡縣

太宰府神社のヒロハチシヤノキ……………三
 隱家森……………四
 鎮西村の桂……………五
 生の松原……………七

長崎縣

池の原ミヤマキリシマ群落……………八

原生沼沼野植物群落……………九

山梨縣

美森の大ヤマツツジ……………四〇

岩手縣

花輪堤花菖蒲群落……………四
 金矢花菖蒲群落……………四

群馬縣

前橋城趾の枝寄松……………四

福岡縣

猪苗代湖の毬蘚産地……………四
 猪苗代湖のミヅスギゴケ群落……………五

福井縣

専福寺の大樺……………四
 杉森神社の御葉附銀杏……………五
 敦賀及東浦村海岸のオモト自生地……………五

東京府

白山旗櫻……………六
 三寶寺池の沼澤植物群落……………六
 舊松平大學頭藩邸のモクコク……………七
 海軍大學校正門前の椎……………七

補記

埼玉縣

越谷の藤……………充

圖版目次

第一圖版	大野下の大蘇鐵……………二—三
第二圖版	笛鹿のイチヒガン……………同
第三圖版	高田蜜柑の老樹……………同—五
第四圖版	麻生原の金木犀……………同
第五圖版	竹の熊の大樺……………一—三
第六圖版	黒淵の阿彌陀杉……………同
第七圖版	下ノ城の公孫樹……………一八—一九
第八圖版	三隅大平櫻……………同
第九圖版	徳佐の(櫻)(一)……………二—三
第十圖版	同上(二)……………同
第十一圖版	東吉部の大山櫻……………同
第十二圖版	春日の大ヤマモモ……………同
第十三圖版	河原の大榿……………二六—二七
第十四圖版	天橋立の松樹叢……………同

圖版目次

第十五圖版	瑠璃溪の山林景觀(一).....	三二—三三
第十六圖版	同上(二).....	同
第十七圖版	太宰府神社のヒロハチシヤノキ.....	同
第十八圖版	隱家森.....	同
第十九圖版	鎮西村の桂.....	三六—三七
第二十圖版	美森の大ヤマツツジ.....	同
第二十一圖版	花輪堤花菖蒲群落.....	四四—四五
第二十二圖版	金矢花菖蒲群落.....	同
第二十三圖版	前橋城趾の枝寄松(一).....	四八—四九
第二十四圖版	同上(二).....	同
第二十五圖版	猪苗代湖ミヅスギゴケ群落所在地附近.....	五六—五七
第二十六圖版	専福寺の大櫨.....	同
第二十七圖版	杉森神社の御葉附銀杏第一號樹.....	同
第二十八圖版	同上 第二號樹.....	同
第二十九圖版	白山旗櫻.....	六〇—六一
第三十圖版	白山旗櫻の碑.....	同
第三十一圖版	三寶寺池.....	六四—六五

第三十二圖版	舊松平大學頭藩邸内のモクコク.....	同
第三十三圖版	海軍大學校正門前の椎(其一).....	六八—六九
第三十四圖版	同上(其二).....	同

圖版目次



天然紀念物調査報告

植物之部第十五輯

熊本縣・島根縣・山口縣・京都府・福岡縣・長崎縣・山梨縣・岩手縣・群馬縣・福島縣・福井縣・東京府・埼玉縣下の植物に關するもの

(昭和八年十月より昭和九年十二月までに調査したるもの)

Manabu Miyoshi, Botanical Natural Monuments of Kumamoto and Other Prefectures

文部省囑託 理學博士 三好學



熊本縣

大野下の大蘇鐵

所在 熊本縣玉名郡大野下村字大野下蘇鐵萬次氏宅地内

鹿兒島本線大野下驛より東南約十町にして大蘇鐵所在地に達す。大蘇鐵は家屋の南側に接近して廣場に立ち、正面は東に向へり。樹圍に方形の竹垣を繞し、根元には盛土を施せり。樹下に小石祠を安置す。

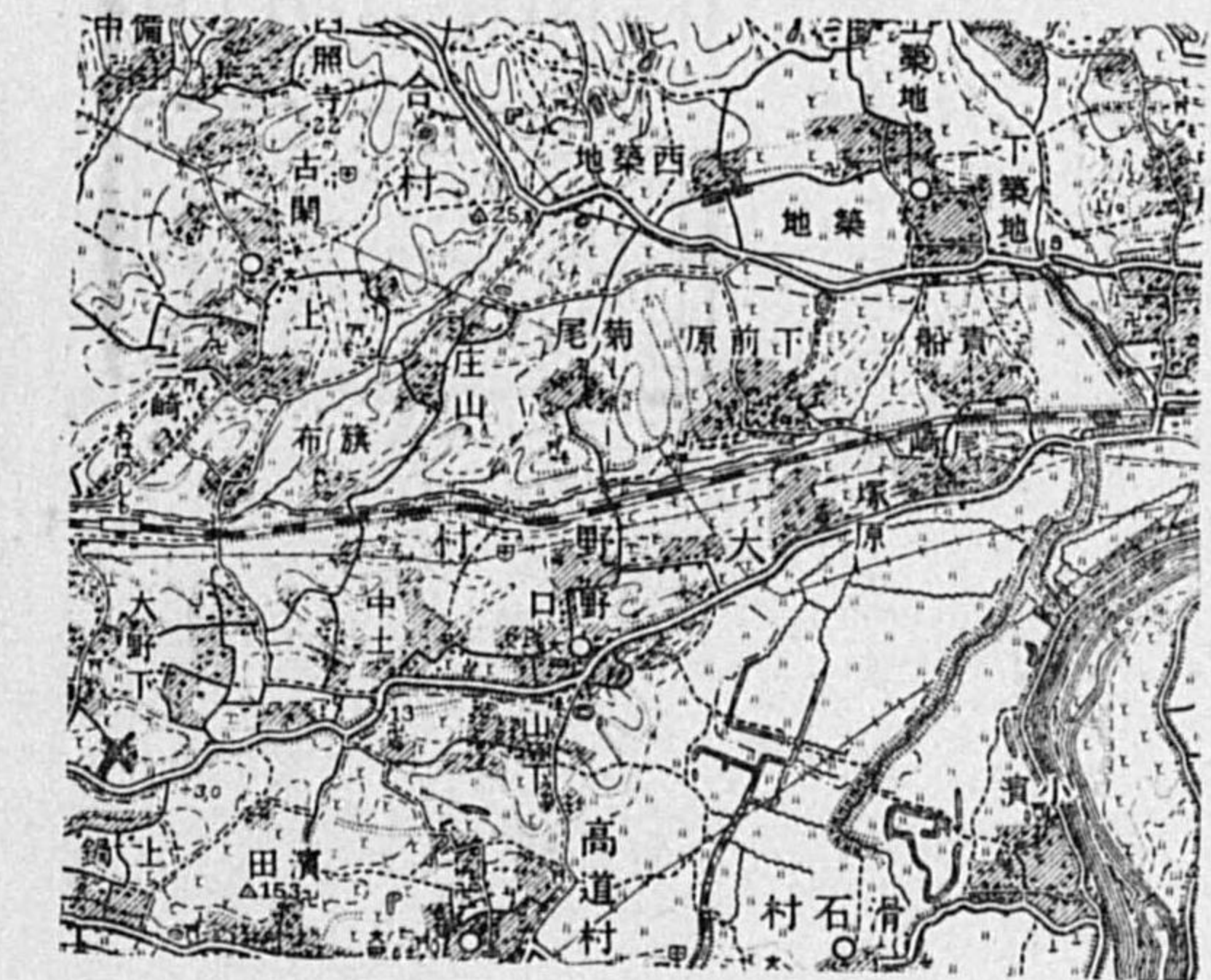
熊本縣 大野下の大蘇鐵

熊本縣 大野下の大蘇鐵

根廻り(根元より多數の支幹に分れ輪廓出入甚しきも、今其外圍を測れり。)

二

支幹の數 約一・一〇〇〇
 最大支幹の根元の周圍 約一六〇〇
 枝張(根元より) 約二・二〇〇



大野下の大蘇鐵在所地圖
 (陸地測量部五萬分一地圖に據る)

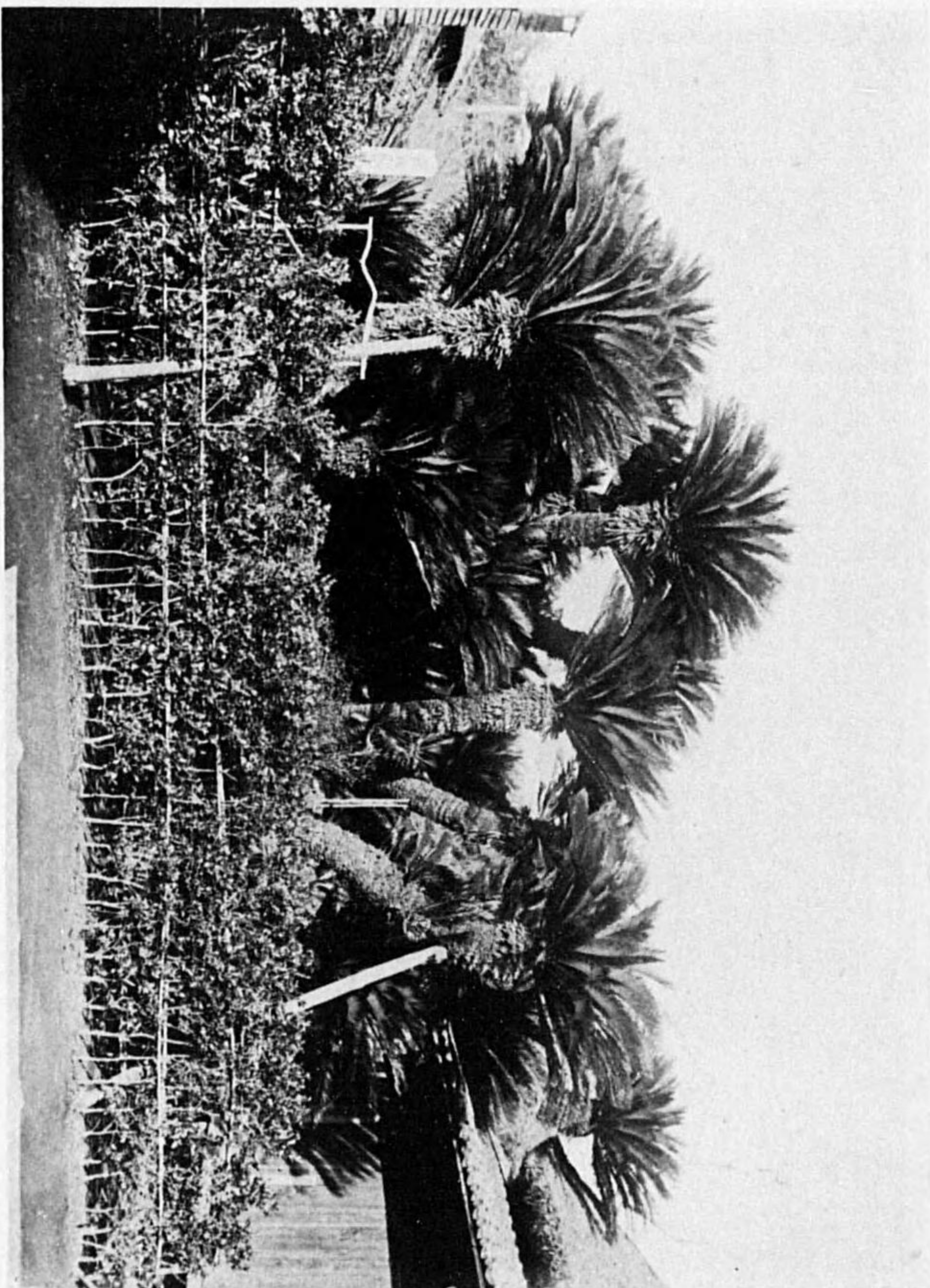
東方 約五・六〇
 西方 約四・〇〇
 南方 約四・六〇
 北方 約六・三〇
 樹高 約四・五〇

南方の一支幹は上方より垂下して地に着き、屈曲して斜に上昇せり。北方の一支幹は高く伸び芽茸屋根に觸れたり。全體の樹勢は東方に傾けり。是れ該方面に障礙物なく打開けるによるならん。支幹には多數の芽生あり又オ

ホイタバピシラマゴケ等着生せり。

竹垣の幅は東側七・五米、西側八・三米、南側八・三米、北側八・七米なり。
 本樹は雌株なり。樹勢強壯、毎年五月葉を伐採すると云ふ。

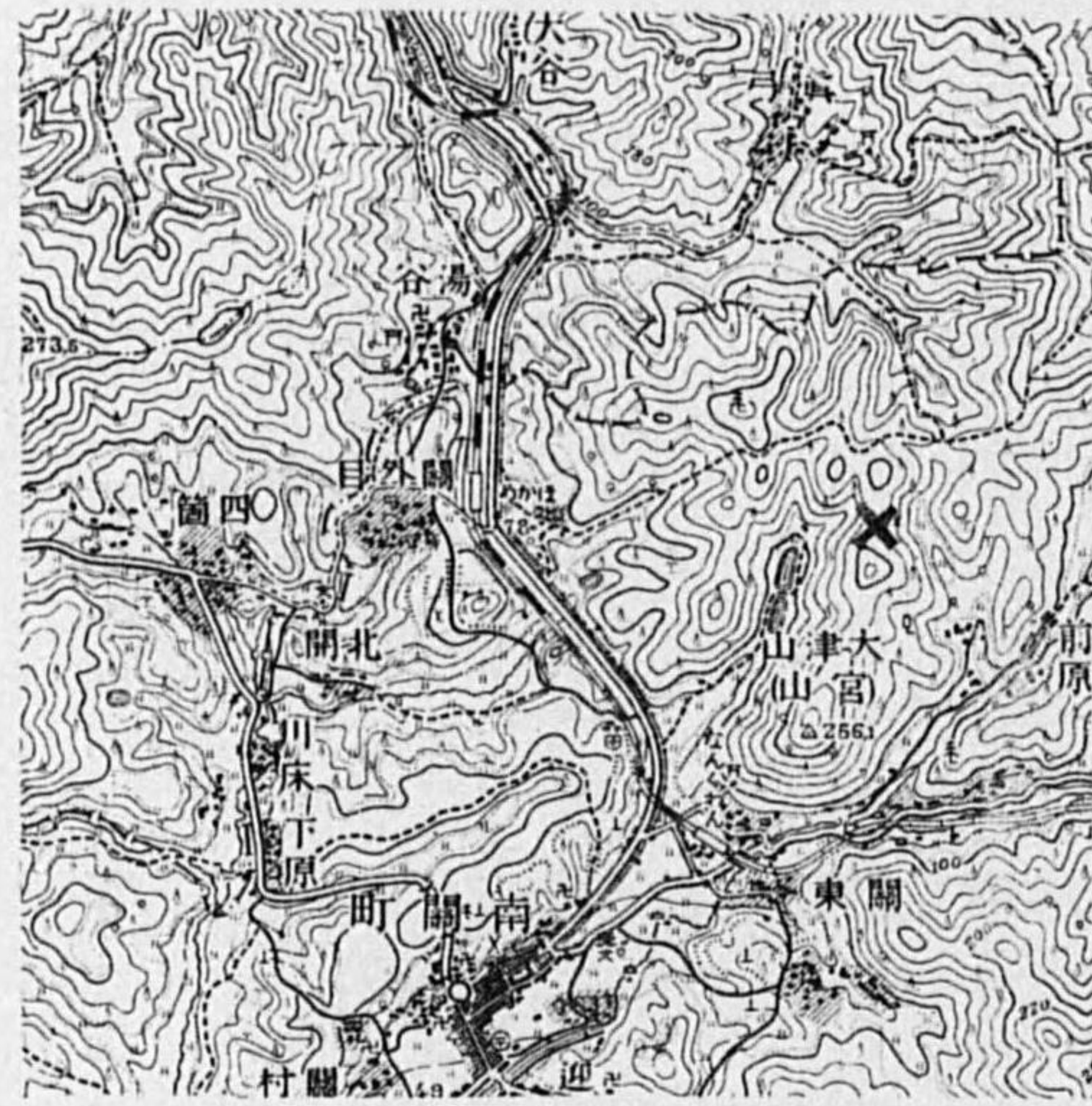
第一圖 版



大野下の大蘇鐵
 A giant *Cycas revoluta* Thunb. at Onoshibino.

との高さの差約三米なり。

熊本縣 笛鹿のイチヒガシ



地在所シガヒチイの鹿笛×
(る據に圖地一分萬五部量測軍陸)

本樹の由來は詳ならざるも、樹形の大なること並に所有者が蘇鐵を姓とすることより見るも、該樹の年代の古さを知るべし。

後記 大野下の大蘇鐵は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

(昭和八年十月三十日調査)

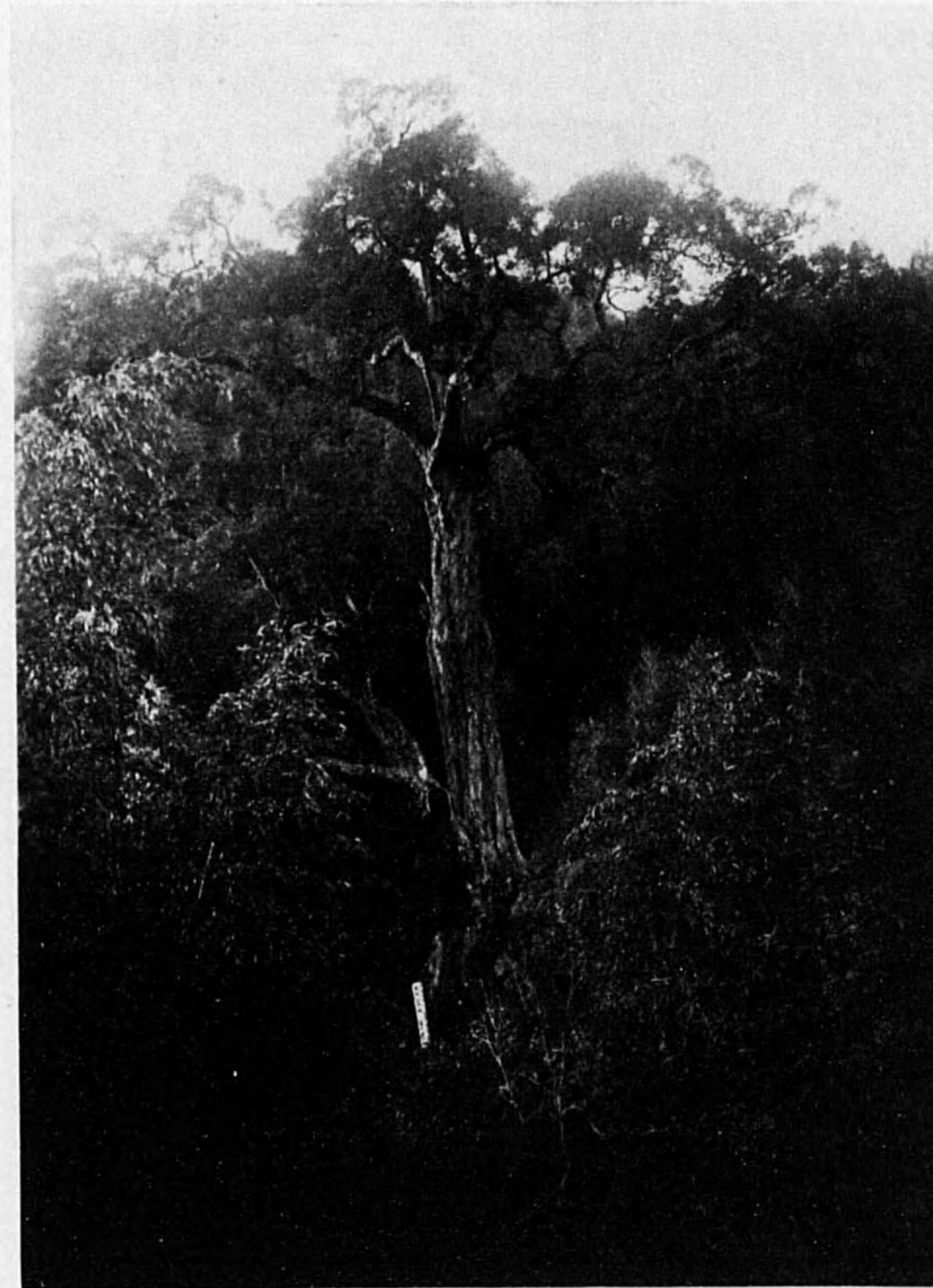
笛鹿のイチヒガシ

所在 熊本縣玉名郡南關町大字關東字笛

鹿

鹿兒島本線高瀬驛より北方約五里南關町役場に達す。それより縣道を行き更に俚道に入り約半里にして小山の溪間の山路を登ること町許、北向の山腹に一大樹の立つを見る。是れ即ち笛鹿のイチヒガシにして元個人有なりしが、南關町の有志者樹下一反歩の地所と共に同樹を買収して保存を圖れり。根元の南側は高地面にして北側の低地面

版圖二



シガヒチイの鹿笛
A giant *Quercus gilva* Bl. at Hei-roku.

熊本縣 高田蜜柑の老樹

高地面を基點とせる根元の周圍

約 一五・五^{*}〇

四

高地面より一・五米上の幹圍

約 九・三〇

樹の根元の東側の中央より約三九米の高さに於て幹は兩分し、一は主幹の位置を占め、一は支幹となり斜に北方に向ふ。幹の北側には一大枝の折口残れり。

又根元より東北方及西北方に著しき板狀根出でたり。

幹の南側には腐朽せる部分あり、サルノコシカケ類寄生せり。

本樹はイチヒガシの巨樹として有數のものなり。

(昭和八年十月三十日調査)

後記 笛鹿のイチヒガシは昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

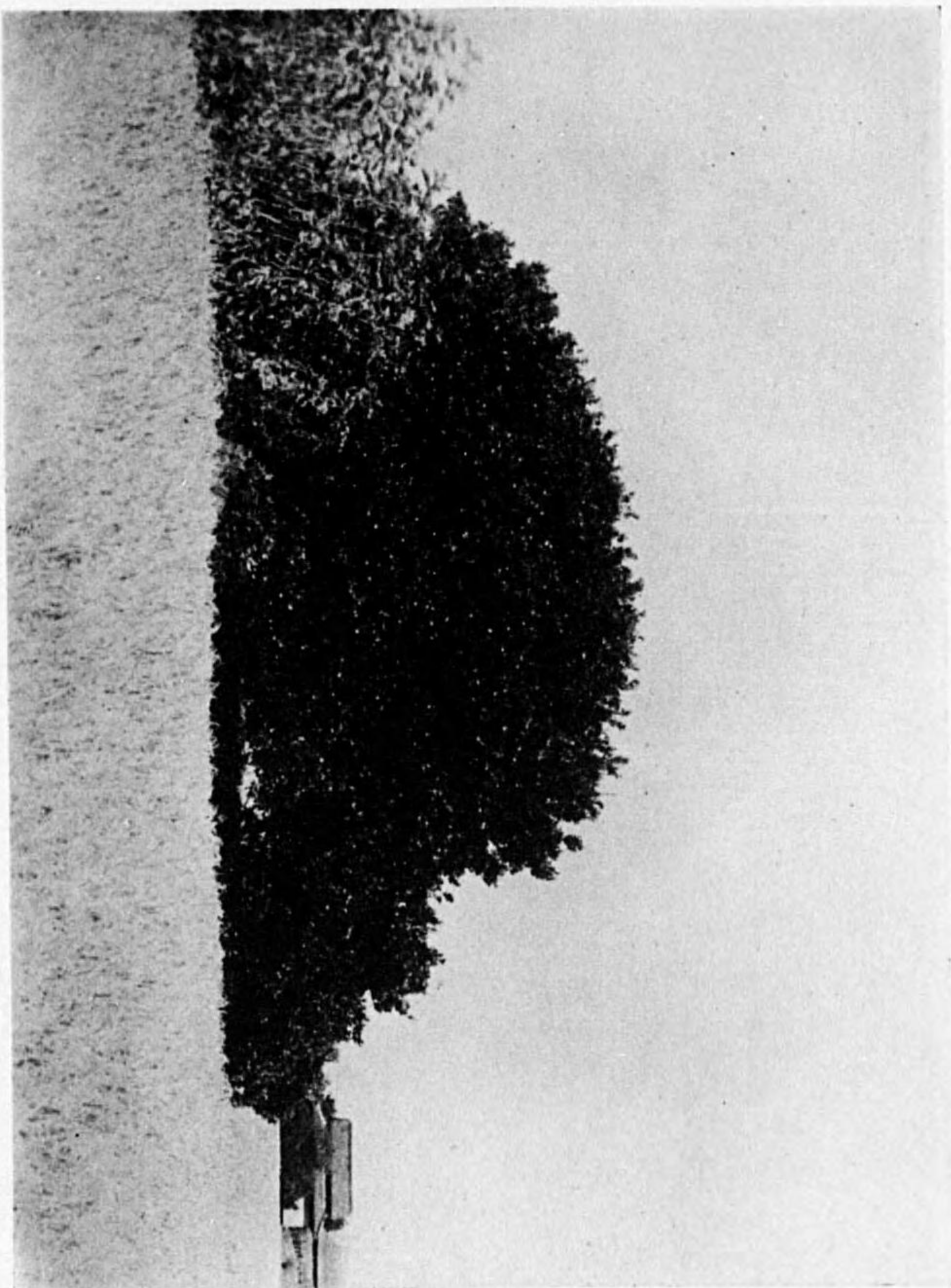
高田蜜柑の老樹

所在 熊本縣八代郡高田村大字豊原個人有

八代驛より國道を進むこと西方約半里にして南折し、東方の俚道に入り、約二町にして高田蜜柑の老樹所在地に達す。同地は舊八代藩主男爵松井敏之氏所有に屬す。

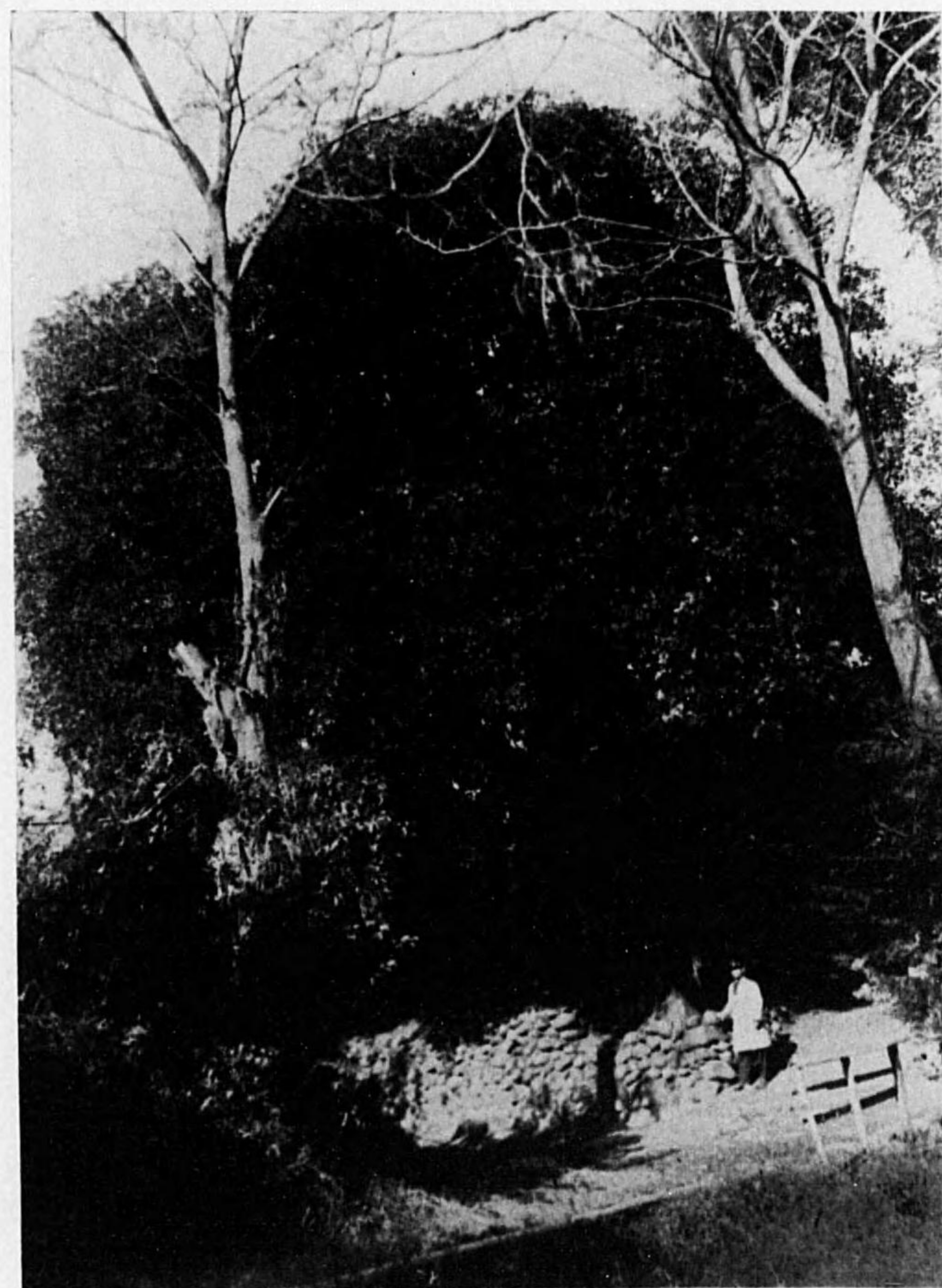
該老樹所在地は三筆に分れ、畑地の間に介在し、外圍に垣を繞せり。老樹は數株あり、何れも主幹と認むべきもの存在せず。根元より數本の支幹に分れ、或るものは直立し、或るものは斜に出で、頗る複雑なる樹形を呈す。故に正確に株數を定めがたきも、今現存樹を四株と認め左の如く記載す。

版圖三第



樹巨の柑蜜田高
A big tree of the Koda Orange.

版圖四第



犀木金の原生麻
A giant *Osmunthus fragrans* Lour. var. *aurantiacus* Mak. at Asobaru.

右四株の内第一號樹と第二號樹は各一筆の地内にあるも、第三第四の兩株は共に一筆内にあり。是等の地所内には根元に何れも盛土を施せり。

(第一號樹)

地番

二六九五

地歩

一一四



× 高田蜜柑在所
+ 秋原土手黒松並木在所
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

三米、南方のもの約〇・九五米、中央のもの二本の一は約〇・九六米、一は約〇・七米なり。根元總周圍約四米、樹高約四五米、枝張東方約四米、西方約一米、南方約五米、北方約五・二米なり。

熊本縣 高田蜜柑の老樹

(第三號樹)

地番

二七〇〇

地歩

一四

前者の西方にあり。大約五支幹より成る。各支幹の根元の周囲は約〇・五米内外なり。根元の總周圍約一〇・五米。

(第四號樹)

地番

第三號樹と同じ

地歩

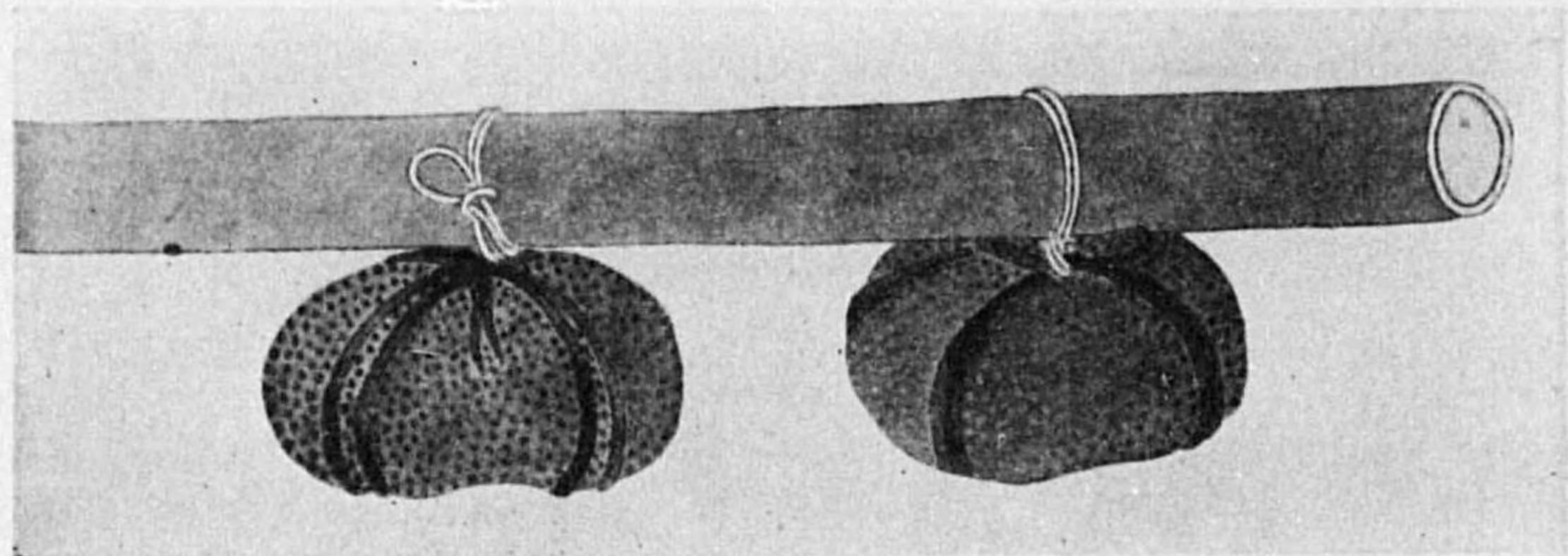
一八

第三號樹の西方に隣り、西北の株と東南の株とに分つべし。根元の周圍前者は約〇・八米後者は約〇・五米、樹高は約四米なり。枝張東方約四・三米、西方約三・二米、南方約六・二米、北方は枝張殆ど無し。(以上地番並地歩は高田村役場の報知による)。

調査當時果實は枝に滿ちたるも果皮は未柑色を呈せず。成熟期は十二月上旬頃なり。前記の第一號樹の果實は十俵に達し、五十貫目を下らず、一俵は五貫目入にして、一貫目の價三十錢なれば一俵代金一圓五十錢なりと云ふ。

果實は黄柑色にして皮薄し。高約三仙米、幅約四仙米、約十胞より成る。種子殆どなし。香氣強く、適度の甘酸味を有す。静岡縣木負の蜜柑と共に小蜜柑に屬すれども、後者よりも果實小なり。

高田蜜柑は八代蜜柑として廣く知られたるものにして、古來の柑橘譜に記載せられたり。例へば「桂園橘譜」岡村尙謙著寫本二冊、嘉永元年田澤仲舒の序ありには「八代蜜柑は肥後國八代の産にして形小なりといへども味甘美なり」本朝食鑑、和漢三才圖會これを漢名沙橘といふ錄橘其皮尋常の蜜柑に比するに稍薄くして核少なし内瓣略皮を隔て、數ふべきものあり細川侯毎歲十一月これを奉るそのもの一顆を以てこれを家内にかけては災難を避け火災を免るゝよし古くいひ傳へたりさるによ



第一圖 桂園橘譜に載せたる八代蜜柑

りて邸人甚だ之を貴びて靈符に比すとあり。同書に八代蜜柑を青絲にて十字に縛り横に並べて竹に吊したる圖を載せたり(第一圖)。

八代蜜柑の來歴に關しては上妻博之氏より熊本藩の古文書及「肥後國誌」其他の文獻を示されたり。今左に其二三を抜抄す。

御奉行奉書抄出 八自寛永二至承應卯

寛永十四年正月四日

一、八代みかん前かどより在之名木のみかんは向後各別に仕可指上旨可申付候若木のみかんも大木のみかんも一ツに仕上候ては名物のかいも無之候間彌向後其分可申付旨 奉内膳尚石川茂房氏より八代蜜柑の古實に就て左記の「肥後國誌」の抜萃を送られたれば茲に轉載す。

高田蜜柑「肥後國誌」下卷

高田在四十九ヶ所に蜜柑樹あり國君より年々江都大樹公へ獻上也當國第一の土産にして他邦の品に味ひ甚勝れたり。里俗の説上古神功皇后三韓を征し歸航し給ふ時常世國の橘を獻する者あり即ち持しめて歸朝し此所に植させ給ふ今江河端と云所也と云因茲年々國司より朝廷に獻せしも數百年來退轉す。天正十五年秀吉公下向宮地村悟真寺宿陣の時

去年の蜜柑を埋蓄持たる彌三兵衛と云者鉢に盛て進獻す。秀吉所以を問給ふに皇后以來の事を言す。御機嫌太だ宜く夫より當地の蜜柑は往昔に返り加藤侯以來國君より年々東都に獻ぜられ大樹公より亦 禁裡に獻ぜられ朝廷年首の式に備はると云不知其實。駿府政事録云、慶長十九年十二月十七日國主加藤忠廣侯より大阪御陣中には八代蜜柑五箱獻上すとあり「陳迹誌」云蜜柑は高田八村に木數百株あり河南は同と雖も河北に至ては味大に劣れり河南も別て奈良木、豊原を上品とす。(下略)

尙藩政時代に於ける高田蜜柑及現況に關し石川氏の報知せられたるもの左の如し。

藩政時代に於ては高田村八ヶ村即ち上奈良木、下奈良木、上豊原、下豊原、高下、西高下、本野、栗野及大福寺、植柳の各村に總數二百五十本植付約四町歩は蜜柑床と稱へ藩有地に屬し高田手永會所の所管となし總庄屋統轄し蜜柑支配役を置き専ら植栽培の事を司らしめしにより樹勢大に繁茂し果實三千個入一本十三籠に達するに至れり。

蜜柑採收には高田會所より蜜柑ちぎりと稱へ手永中高持百姓の子弟十五歳以上の男子を公役に課し之をして採收せしむ。其の公役に當る者は大に名譽とし徵集に應ず。採集の當日は總庄屋及支配役は申すに及ばず横目小頭小別當及御制度方等出役し樹上に在りて採收する者は黙するを禁じ左の掛聲をなさしむ。(中略)

かく叫ばしめ盜食を防ぎ若し一箇にても盜食者ある時は之を縛し終日入牢せしむ。

蜜柑支配人は何時時代に置しや不明なり延寶三年三月總庄屋松岡藏人と稱する者の孫平山と云所に分家せる松岡喜右衛門長行と云へる者に御蜜柑支配役を命じ地士に召出され知行五石と高

五反を豊原村に於宛行はれたり。

松岡先祖覺書

爾來慶應三年迄繼承して八世に至り松岡喜三藩政奉還に依り解役となる。

高田會所に於て總庄屋及諸役蜜柑支配役立會二百五十本より採收したる蜜柑を嚴撰し之を四十八籠に納め其の上長方形の箱に容れ舊曆十一月の始高田手永高持百姓の子弟を公役に課し其の選に當る者は光榮とし出夫し會所より發送の當日は新鮮なる葉にて菰を編み其箱を包み一箱に付人夫八人何れも菰を負ひ二人して箱を擔ひ六人は交代として各其の箱に付添ひ青竹を持って肩を替ゆる時は背に負ひたる菰を敷一應卸して肩を替へ尤鄭重に交替し而して郡境に至れば小川町橋上に荷受人は跪坐して一禮の上之を受繼を例とし若し無禮の所爲あれば之を荷繼人に渡さず又途中に於ては士席の者と雖も道を横切り若くは無禮の者ある時は警固の御制度方は之を取締り頗る嚴重なり故に心ある者は士民共に同日道を避けて行逢はざる様に注意せり。

蜜柑樹は高田村植柳村等に二百五十株ありし由なるも寶曆年間球磨川大洪水の爲大半流失し維新以後蜜柑床は官有地拂下となり悉く民有地となり且つ舊藩時代に於て取締嚴重にして蜜柑の生育に支障ある時は周圍の土地を沒收したる反動に依り維新後は柑橘樹を非常に厄介視し隙を見て障害を加へたるに依り漸次樹勢衰へ今は二百五十本の内に此地に存する數株のみとなれり。

前記の文書によれば高田蜜柑の栽培は已に熊本藩の初期に於て行はれ八代蜜柑として世に知られたるや明なり。其培養は高田地方一帯に亘り老樹となれるもの所在に多かりしが維新以後

其栽培廢せられ次第に樹數を減じ今日にては僅に上記の數株のみ存在するに過ぎず。是れ畢竟藩政時代に於ける如き特別の保護なきと、亦一方温州蜜柑の如き優等なる品種の爲に壓倒されるに由るなり。

上記の高田蜜柑の四株の老樹は産業上の歴史的意義ある外、蜜柑の品種上天然紀念物として保存すべきものと思考す。

(昭和八年十月三十一日調査)

萩原土手の黒松並木

所在 熊本縣八代郡宮地村大字古麓フルツキト

八代町の南方玖磨川堤防の右岸に沿ふて東北より西南へ五、六町に互れる黒松並木あり。黒松の間にハゼの老樹を交ふ。此堤防は人吉の舊街道にして昔八代築城の時同城主加藤馬之丞正方(加藤清正の重臣)の造れるものにして、黒松も當時植ゑたるものなるが、寶歴年間に至り洪水の爲堤防の大部分は破壊せり。依て同八年に至り稻津彌左衛門(細川家の奉行)堤防を改修し、之に黒松とハゼとを植ゑたり。今日に存せる前記の並木は清正時代の最初の植栽と寶歴年間の補植として、現時の玖磨橋に近き數町間の並木は正に後者に屬せり。

堤防道路は幅約四米なり。並木は堤防の中腹に立ち、遙に路面よりも低し。黒松の幹圍の大きなものを測れるに左の如し。

玖磨橋に近き方	地上一米の幹圍	約二・五〇*
稍、南方(上流)にあるもの	同	同二・七〇
同	同	同三・三五
並木の中央にあるもの	同	同三・五〇

黒松の枝の堤防外に延び出てたるものは維新の頃作障サツヅリとして伐られたり。故に樹形の美なるもの少し。

上記の黒松の並木は玖磨川沿岸の風致を添ふは勿論並木間にハゼの老樹を交ふるにより地方的天然紀念物にして保存すべきものなるべし。

(昭和八年十月三十一日調査)

麻生原の金木屋

所在 熊本縣上益城郡乙女村大字麻生原宇居屋敷觀音堂(國有地)

金木屋所在地の緑川對岸の白旗村まで熊本市より東南方約五里乗合自動車の便あり。又は熊延鐵道下早川驛にて下車し、津志田の渡により緑川を越へ、其左岸に沿ひ南方約半里にして丘上に登ること約一町觀音堂に達す。金木屋は堂の南に接して立ち、枝は堂の屋根を蓋へり。

根元の東側は西側よりも約〇・四米低し。高地面より測れる根元の周圍

約 六・四〇*



標大の熊の竹
A giant *Zelkova serrata* Mak. at Takenokuma.

熊本縣 麻生原の金木犀
二二
高地面と低地面の中間地點より地上1.5米の幹圍 同 二・七五
地上三五米の高さに於て三支幹に分る。其中北方に出でたるもの最太く、南と北との支幹は殆ど同大なり。



地在所犀木金の原生麻×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

枝張	東方	西方	南方	北方
	約	同	同	同
	八・三〇	七・〇〇	七・二〇	一・〇〇〇

根の上部は露出せり。

花期は秋の彼岸頃にして第一回の花開き、散りたる後更に第二回の花開き、十月初旬に至りて散る。花色は淡黄色、香氣強し。

本樹は雄株なり。

樹前(東方)に猿田彦命大神の碑あり。

本樹は根元より一本の巨幹を抽出し、枝張廣く、樹勢壯なる點に於て著し。

後記 麻生原の金木犀は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

(昭和八年十月三十一日調査)



杉陀彌阿の淵黒
The Amidasugi, a giant *Cryptomeria japonica* Don. at Kurobuchi.

竹の熊の大櫨

所在 熊本縣阿蘇郡南小國村大字赤馬場字竹の熊無格社天満宮境内



×竹の熊の大櫨所在地
(陸地測量部五萬分一地圖に據る)

蓋し舊時枝の折れたる痕より腐朽の起れるものなるべし。

熊本縣 竹の熊の大櫨

南小國村役場所在地市の原は豊肥本線内牧驛より北方四里半、自動車の便あり。それより縣道を南行すると約十町にして俚道に入れば、西方の小高き地點に大櫨の立つを見る。樹の根元の西側の東側よりも約〇・六米高し。

根元の周圍(高地面に沿ふて測れり)

約 一五・五〇

高地面より一五米上の幹圍

同 一〇・四〇

樹の北側には地上三米の高さに一大孔穴を開き、内部は空洞となれり。

空洞の長さ約三米、幅約一・四米、奥行約

一・七米下方への深さ約三三五米なり。空洞には根の垂下せるものあり。樹の南側に於て地上約三五米の高さより一大枝斜に南方に出づ。該枝の上方に一小枝直立せるも先端にて折れたり。主幹は此小枝の北側に聳え高處に至りて分岐せり。本樹は普通樺の巨樹に見る如き瘤起なく幹の表面は平滑なり。幹は東西兩側面に於て廣く、南北兩側面に於て狭し。各方面の幅左の如し。

東側	約 三・三〇
西側	約 三・三〇
南側	約 二・七〇
北側	約 二・七〇

幹にはテイカカヅラ卷着き、赤色紐状の果實を着けたり。樹の北西方約三米を隔て一祠あり、又北方約九五米先に茅葺の籠堂あり。西側の高地には杉林を見る。

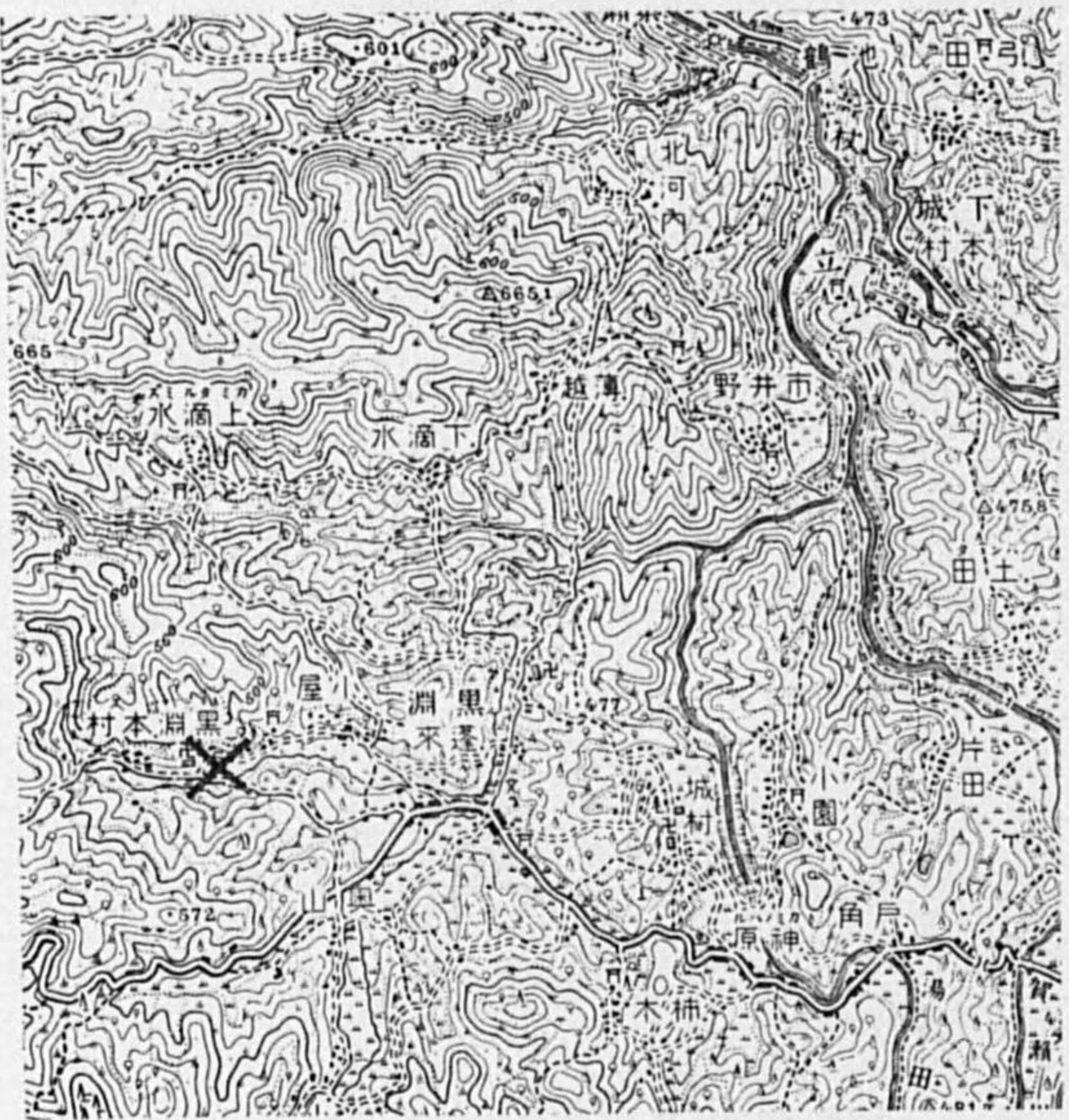
(昭和八年十一月一日調査)

黒淵の阿彌陀杉

所在 熊本縣阿蘇郡北小國村大字黒淵字本村

南小國村役場所在地市の原より縣道を北進すること一里にして北小國村役場所在地宮の原に

達す。それより縣道黒木線を行くこと西方一里、俚道に入れば約十町にして前面に一大杉樹の立つを見るべし、是れ即ち阿彌陀杉なり。



黒淵の阿彌陀杉の所在地
(を據に圖地一分萬五部量測地陸)

阿彌陀杉の立てる地點は南に向へる緩傾斜地にして根元に盛土を施して平地となし、低地面に臨める南側には石垣を築けり。石垣の高さ一九米なり。盛土の地面の外縁には六角形の木柵を繞せり。柵の高さ〇・八米、幅東側四・七米、東北側四・三米、東南側四・五米、南側四・三米、西北側四・四米、西南側四・四米なり。

土際幹圍	約 一四・五五
地上約一・五米の幹圍	約 一〇・六五
地上約三・六米の高處より西方に一大横枝を出せり。此横枝の發出部	約 四・四〇
	約 一三・二〇

の周圍
該横枝發出部の幹圍

熊本縣 黒淵の阿彌陀杉

枝張(根元より)

東方	約	一四・二〇
西方	約	一四・一〇
南方	約	一七・〇〇
北方	約	一二・九〇
樹下外縁全周囲	約	一一・〇〇
樹高	約	三八・〇〇

幹の東側には一本の太き枯枝と其上に二本の枯枝とあり。南方には一本の半折枝ありて、其基部にて隣接せる枝に懸り、先端は下垂し殆ど地に接せり。此枝は今より六年前に斯く折れたるも尙生存す。

是等の横枝の外に主幹の上方より出でたる多数の枝あり。其太きもの二十本に達し、其中直立の位置を占めたるもの約六本あり。

本樹の東側は一大横枝の折れたる爲幹の下方の部分露出し、稍樹形を損ぜるが如きも、他の側面に於ては幹は下方まで全く葉によりて被はれ、枝張の大なるに加へて樹高も亦大なる爲遠望一大卵形を呈し、普通の杉樹の所謂杉形と異なり。今若し西方町餘の距離に立ちて眺望すれば、暗黒の樹形は青空に分明なる輪廓を印し、樹頂の峻高なる、樹幅の偉大なる何人も嘆賞せざるはなし。

聞く所によれば本樹は現時の黒淵區長室原知徳氏の舊所有にして、明治三十五年賣却され、將さ

に伐られんとせる時北小國村及南小國村の財産組合に於て本樹と土地とを買収して保存を講ぜり。當時の買収費は左の如し(北小國村助役山野萬平氏の報知による)。

阿彌陀杉買収價格	金	二五〇 ^円
土地(田畑墓地)買収價格	同	四〇
家屋立退料	同	五〇
計	同	三四〇

樹下反別二五〇坪の内七五坪は公有地(道路)なり。

購入後樹の根元に盛土を爲し、石垣を築き外圍に木柵を繞し、以て本樹の保存に努めたり。

此の如く阿彌陀杉は一旦伐倒の危険に瀕せるも、幸地元の上記組合の盡力によりて救はれ、永遠に保存されたり。該公共團體の行動は郷土の天然紀念物保存上の美舉として顯揚すべきものと云ふべし。

前述の如く阿彌陀杉は從來天然紀念物として指定されたる杉の最大巨樹に對し、其樹容の雄大魁偉なる點に於て一大異彩を放つものなり。

(昭和八年十一月一日調査)

後記 黒淵の阿彌陀杉は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

下ノ城の公孫樹

所在 熊本縣阿蘇郡北小國村大字下ノ城
北小國村役場所在地宮ノ原を距ること北方一里餘、日出へ通ずる縣道の東側の小高き所にあり。

此地點は昔時城主上總之介經賢の墓の所在にして、現に公孫樹下に城主の母妙榮の墓標存在す。

樹の根元の東側は西側より地面約一米低し。高地面に沿ふて測れる根元の周圍

約 一二・〇〇

高地面より一・五米上の幹圍

約 九・六〇

枝張(根元より)

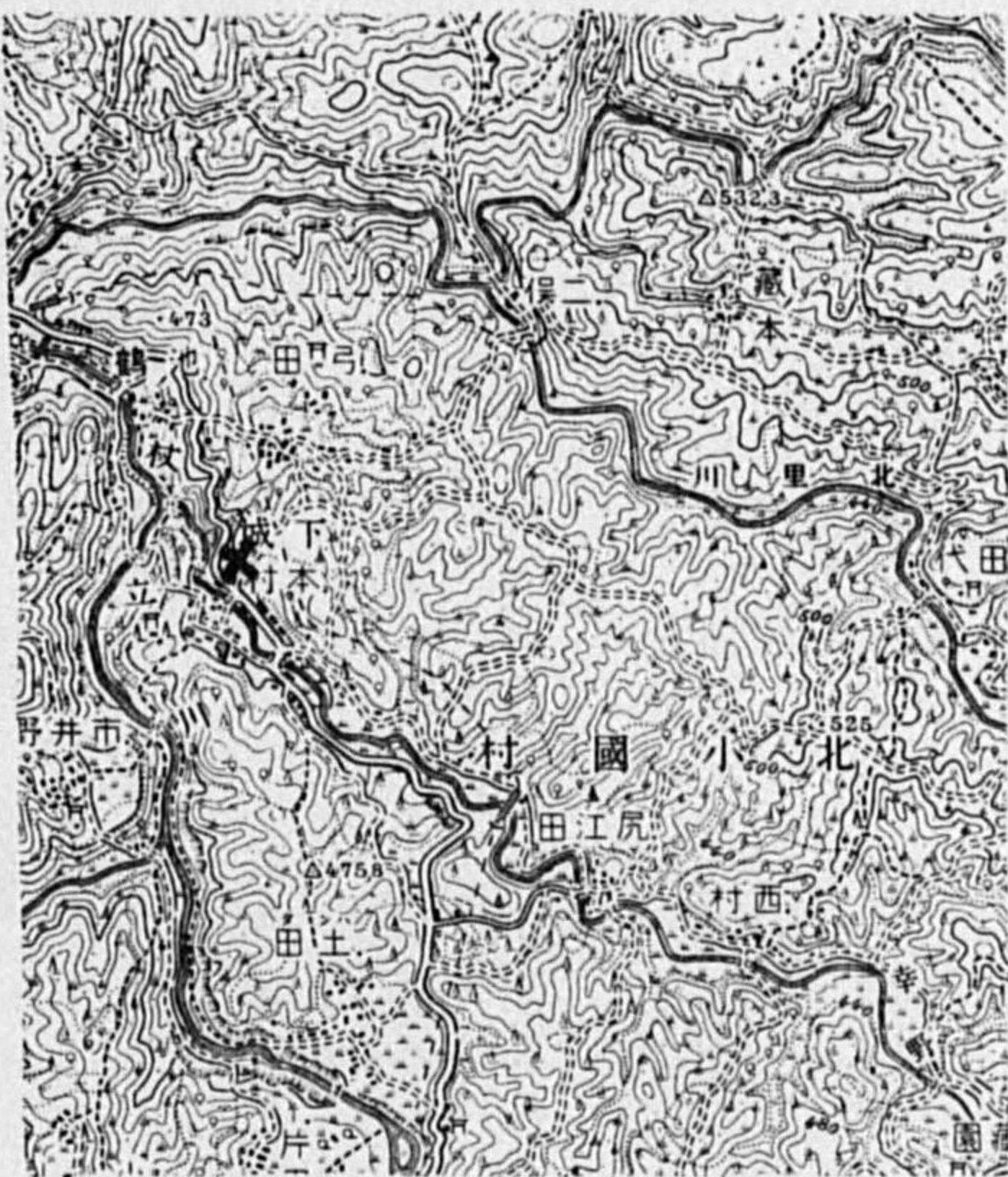
約 一九・〇〇

東方

約 二五・〇〇

約 一九・五〇

西方
南方

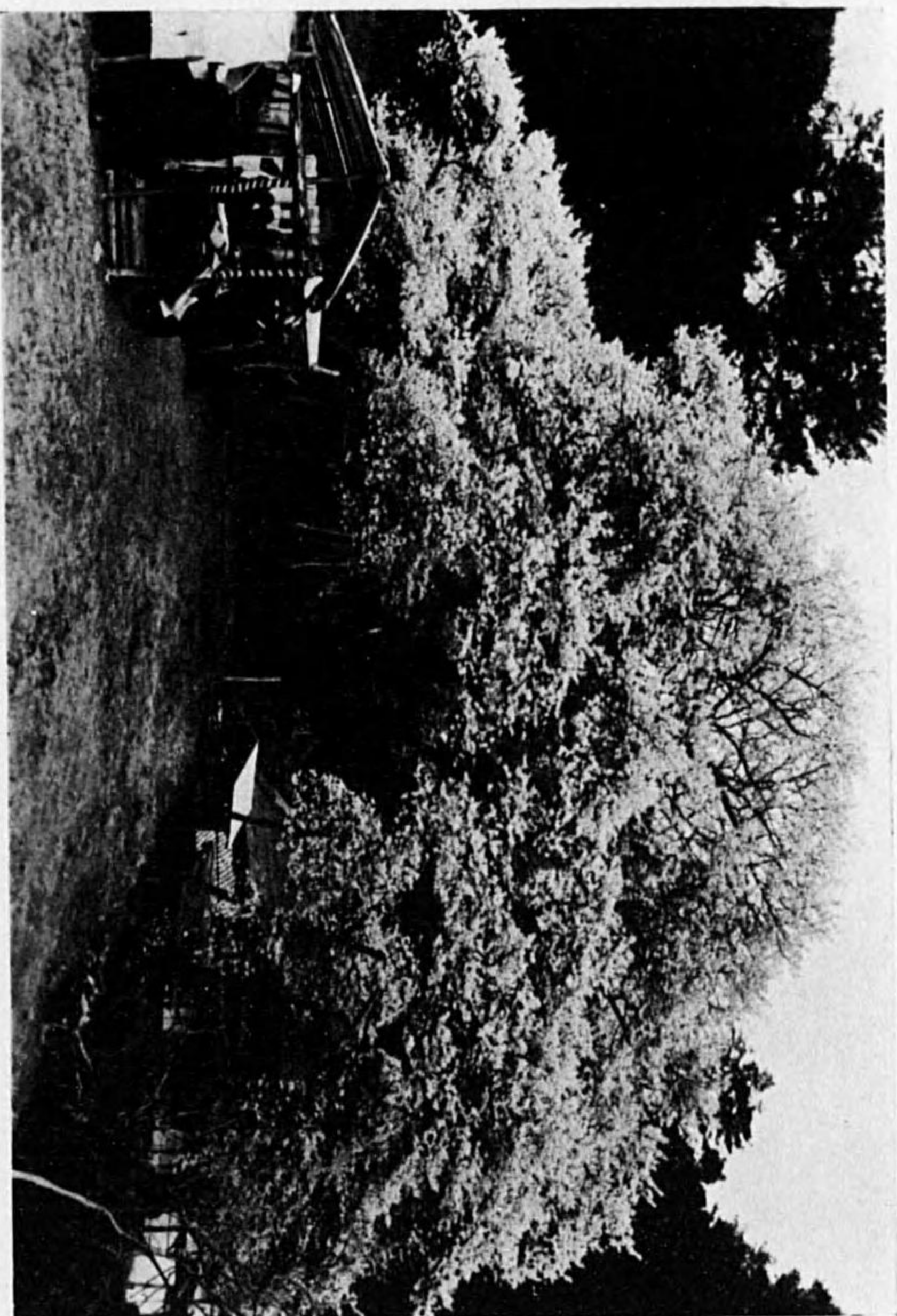


地在所樹孫公の城ノ下×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

版圖七第



樹孫公大の城ノ下
A giant *Ginkgo biloba* L. at Shimonojo.



櫻 平 大 隅 三
The Misumi-Ohirazakura, a giant *Prunus shiratanii* Miyos. in full flower.

北方

約 一五五〇

幹の基部の周囲より多数の蘂を生ぜり。其中幹の東側にあるものは最大にして、地上二米の高さに於ける周囲約一九米なり。尙南側にも一本の大なる蘂あるも、主幹と癒着せり。乳柱は殆どなし。

本樹は雌株なり。

本樹は高さ大ならざるも、枝張甚大なり、熊本縣内公孫樹中最大なるものと云ふ。

(昭和八年十一月一日調査)

後記 下ノ城の公孫樹は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

島 根 縣

三隅大平櫻

所在 島根縣那賀郡三隅町大字矢原

山陰線三保三隅驛より國道を南行すること二十餘町三隅町役場所在地に到り、それより左折して縣道に入り鹿子谷^{シココダニ}を経て大字矢原に達す。更に行くこと約十町にして縣道より右折し、急坂を上ること一町餘山上の馬背形の臺地に到る。臺地の東々南方に立つ一大櫻樹は即ち三隅大平櫻なり。三保三隅驛より山下の縣道分岐點まで一里餘なり。調査當時全樹花を着け盛觀を呈せり。

島根縣 三隅大平櫻

櫻樹は斷崖に近く立ち、根元の東側は西側よりも稍、低し。

根元幹圍

約 五・四

根元より二米の高さに於て主幹は六大枝に分れ、更に細分す。稍、太き枝の總數十一本なり。

圖

六大枝分出部直下の幹

約 五・四

枝張(根元より)

地在所櫻平大隅三×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

東方	約 一五・五
西方	約 一一・九
南方	約 一五・七
北方	約 一三・七

三隅大平櫻 (*Prunus olivacea* Miyo. (帝國學士院記事第一〇卷第七號第四二



四頁昭和九年)は外觀稍、彼岸櫻に似たるも、形態は之と別にして所謂偽彼岸に屬す(三好學、日本の櫻に關する研究「一、植物學雜誌第三四卷第一六七頁、大正九年參照。主なる特徴は左の記し。

巨樹幹に縱溝あり。若葉は黄色を帯び花と同時に出づ。成葉長さ約六仙米、葉先約一仙米、幅約

四仙米、葉柄約一仙米半、微毛あり。葉脚の一部に小蜜腺を着く。繖形花序を着け、總長約二・五—三仙米、四—五花を着く。花梗一・三—一・五仙米、微毛あり。萼筒下部膨大ならず、長さ約六密米、幅約三密米、平滑、萼齒長さ約五密米、幅約二密米、花徑三仙米、花瓣倒卵形、先端二淺裂、長さ約一〇—一四密米、幅約八—一二密米、雄蕊約二七—三〇、雌蕊基部微毛あり。

本櫻樹は形態蒲櫻 (*Prunus media* Miyo. 「日本の櫻に關する研究」第一六頁) に似たるも、花序の眞の繖形なると幼葉の黄色を帯びたると、又雄蕊の數の少きとによりて之と區別せられ、又一方勝手櫻 (*Prunus sacra* Miyo. 「日本の櫻に關する研究」第一六八頁) に類するも、幹の縱溝を有すると、幼葉の前記の色觀と萼筒の無毛なるとによりて後者と分つべし。加ふるに本種は萼筒の基部の膨大ならざるにより右の兩種と同じからず。

三隅大平櫻は前記の如く珍稀なる櫻の巨樹として天然紀念物に該當するものと思考す。

(昭和九年四月十四日調査)

山口縣

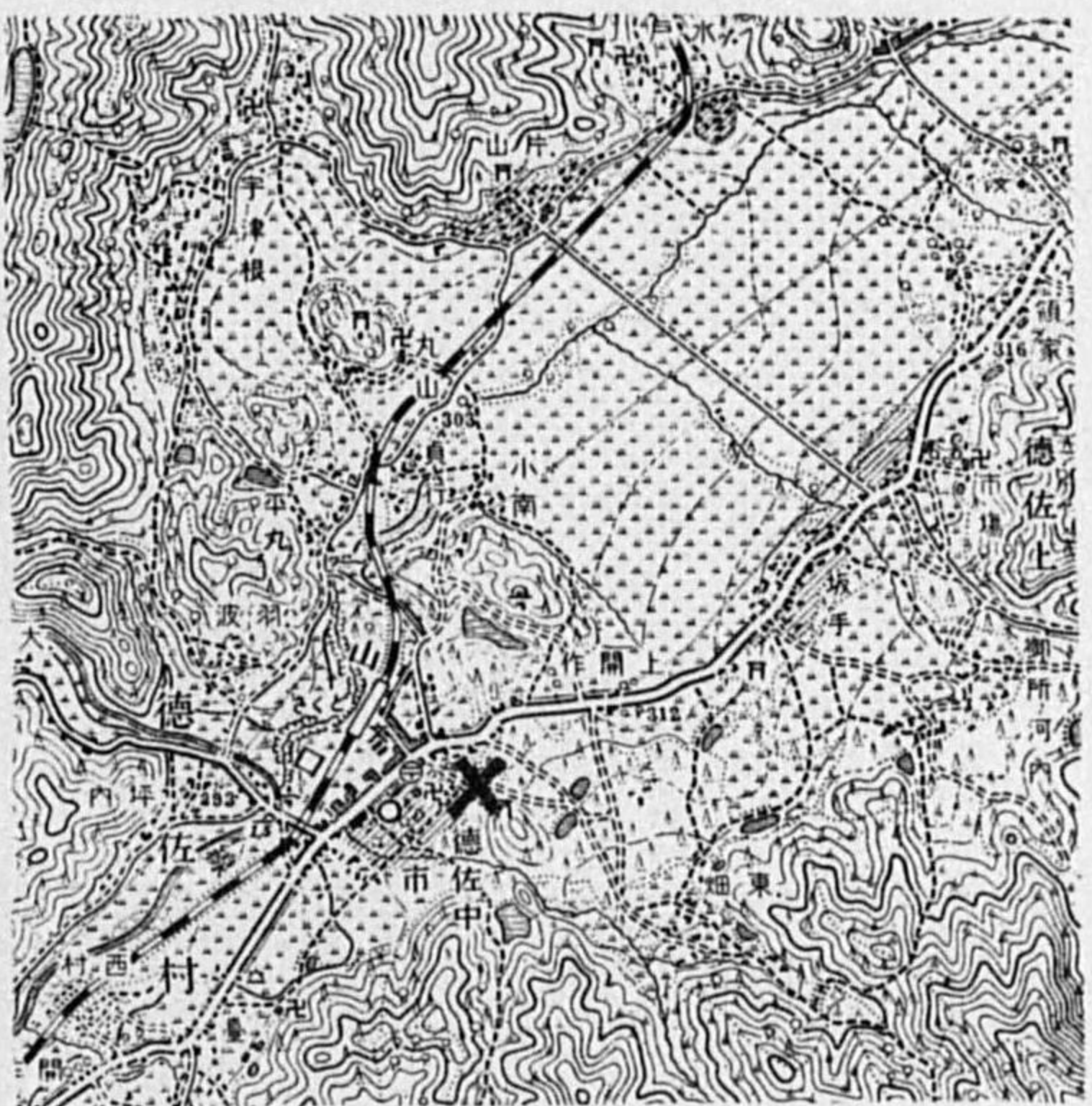
(名勝) 德佐の櫻

所在 山口縣阿武郡德佐村大字德佐中字上市郷社八幡宮馬場

山口線德佐驛にて下車し、東南約三町にして郷社八幡宮の馬場(參道)に達す。櫻は約二町に亘れ

山口縣 (名勝) 德佐の櫻

る參道の低き堤上に植ゑられ、樹種は彼岸櫻と枝垂櫻とにして花色の白きもの、淡紅のもの、稍紅色の濃きものあり。



徳佐の櫻の所在地
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

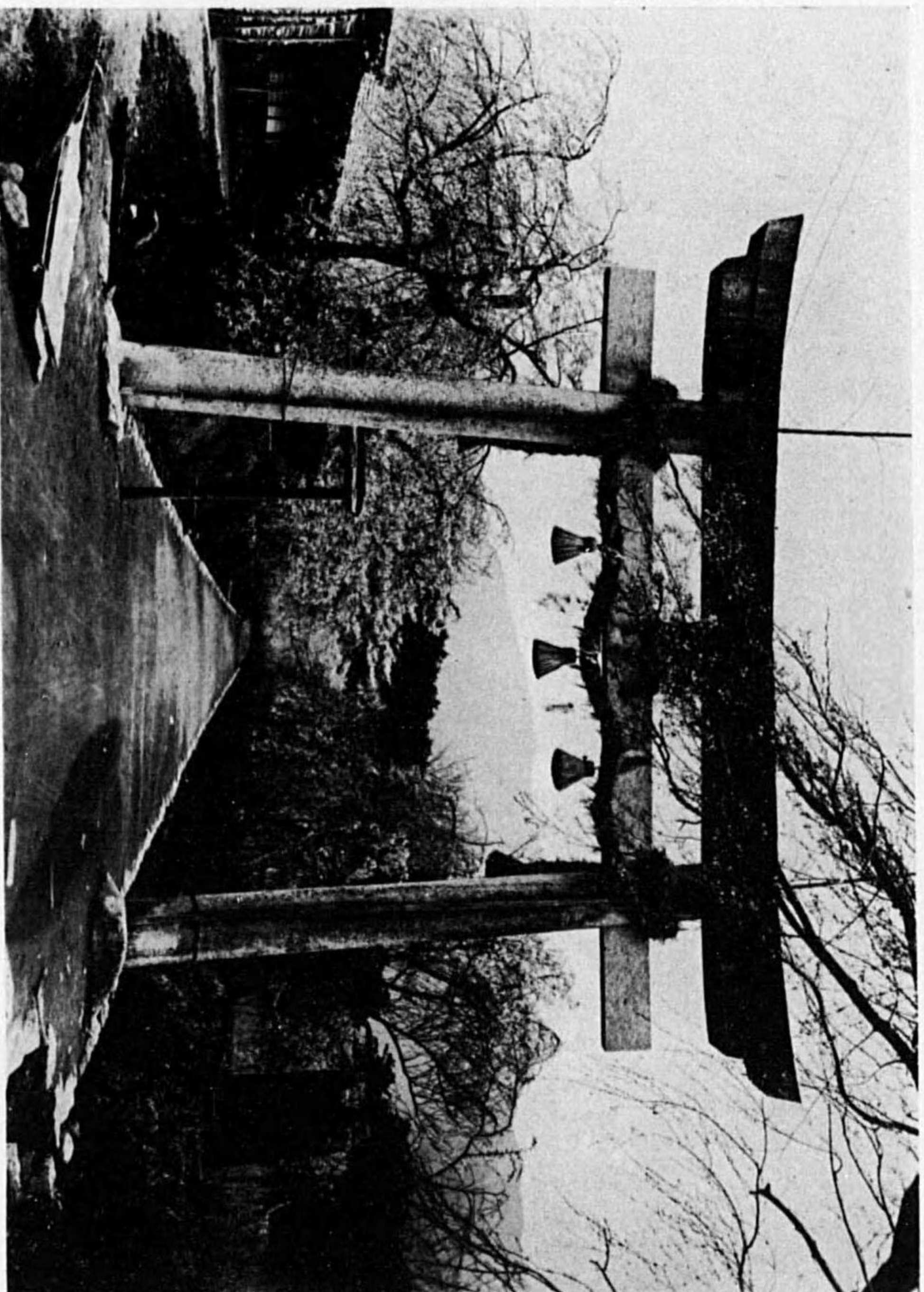
是等の櫻樹は文政八年此地の庄屋椿正直の發起により同志の寄進して栽植したるものにして、昭和八年八月十五日徳佐村役場の調査によれば、目通周圍四尺より七尺まで二十三本、一尺五寸より四尺まで八十五本、五寸より一尺五寸まで五十六本、總計百六十四本ありと云ふ。

櫻並木の中には古樹點々存在し幹の最大なるものは地上一五米の周圍約二・四米に達せり。是等の老樹は幹の損傷せるもの少からず、適當なる保護を要す。尙馬場の兩側の裏參道にも同様の櫻の植ゑられたるを見る。

彼岸櫻と枝垂櫻とを列植せる處は全國に多からず、故に徳佐の櫻は此點に於て地方的名勝として保存すべきものなり。

因に記す徳佐の櫻の由來を記せる子爵品川彌二郎氏の明治二十三年に作れる碑文あり。此碑

版圖九第



(一六) 櫻の徳佐
Cherry avenue at Tokusa.

版圖十第

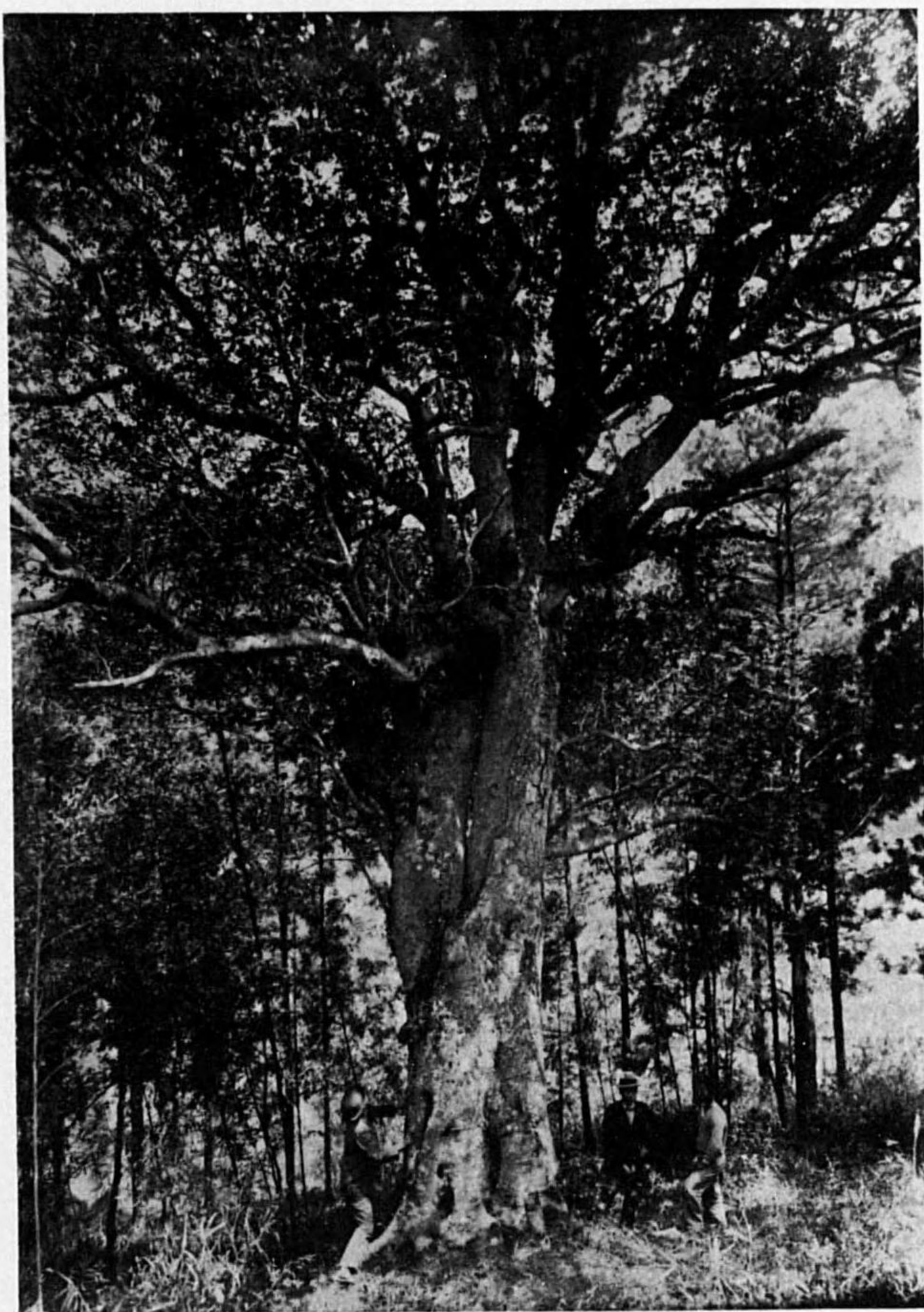


(二共) 櫻の佐徳
Cherry avenue at Tokusa. Another view.

版圖一十第



櫻山大の部吉東
A giant *Prunus mutabilis* Myos, at Higashi Yoshibe.



ももまや大の日春
A giant *Myrica rubra* S. et Z. at Kasuga.

は未建設せられず。

(昭和九年四月十五日調査)

後記 徳佐の(櫻)は昭和九年十二月二十八日第二類名勝として指定せられたり。

東吉部の大山櫻

所在 山口縣厚狹郡吉部村大字上ノ原(個人有)



山口縣 東吉部の大山櫻

地在所櫻山大の部吉東×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

山陽本線小郡驛より縣道を西北に進み眞長田村十文字にて西南方の縣道に入り厚東川に沿ふて下れば吉部村大字東吉部に達す。此距離約四里餘なり。それより東方の臺地に上り行くこと約一町半にして藤本綱一郎氏の墓地あり。地内にタブノキオガタマの立木の外に大なる白山櫻の一株を見る。

根元幹圍

それより地上一・五米の幹圍

地上一・五米にして主幹は三大枝に分る。

枝張(根元より)

東方

西方

南方

北方

樹高

約 二四
約 五七五
約 四二四

約 一二・一〇

約 一二・七三

約 一一・五〇

約 一一・五〇

約 一四・〇〇

本樹は淡茶芽、白花にして、花序は一―二花より成り、花梗長さ約一・二仙米、萼筒長さ約六密米、幅約三密米、萼齒長さ約六密米、幅約二密米、花徑約三仙米、花瓣長さ約一・五仙米、幅約一仙米、先端僅に二裂す。雄蕊約四五。

本樹は白山櫻の地方的巨樹にして生長尙盛なり。

因に記す。右の藤本家墓地の石碑には元文の年號を刻せるものあり。

(昭和九年四月十六日調査)

春日の大ヤマモモ

所在 山口縣美禰郡共和村大字青影字殿河内(個人有)

前頂調査記事中の眞長田村十文字より秋吉村を経て北方約四里、嘉萬市に到り、それより東折して縣道を行くこと半里にして殿河内に達す。縣道より西折して俚道に入り五町餘にして山麓に到れば東面せる山腹に一大樹の立つを見る。

是即春日の大ヤマモモ(楊梅)なり。

同樹は斜面に生じ、根元の東側は西側よりも約六〇仙米低し。高地面(西側)より約三米の高さに於て主幹は南北の兩支幹に分る。枝張大ならず。

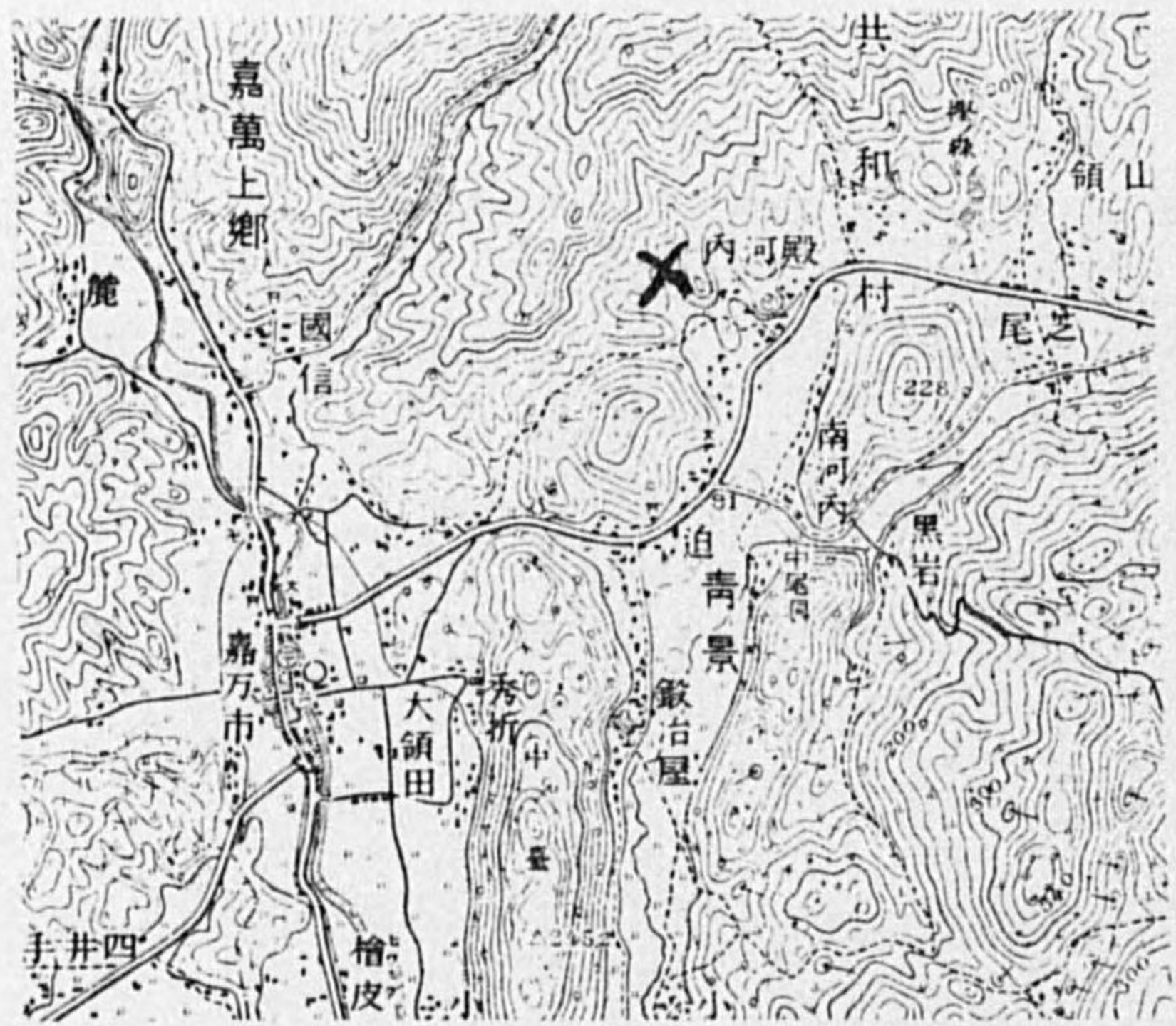
根元幹圍 約 六・二二

高地面の根元より一・五米上の幹圍 約 四・六〇

樹高 約 一八・〇〇

本樹の生ぜる附近の山中にはヤマモモの自生少からず。六月末に赤色の果實を結ぶと云ふ。本樹はヤマモモの巨樹として有數のものなり。

(昭和九年四月十六日調査)

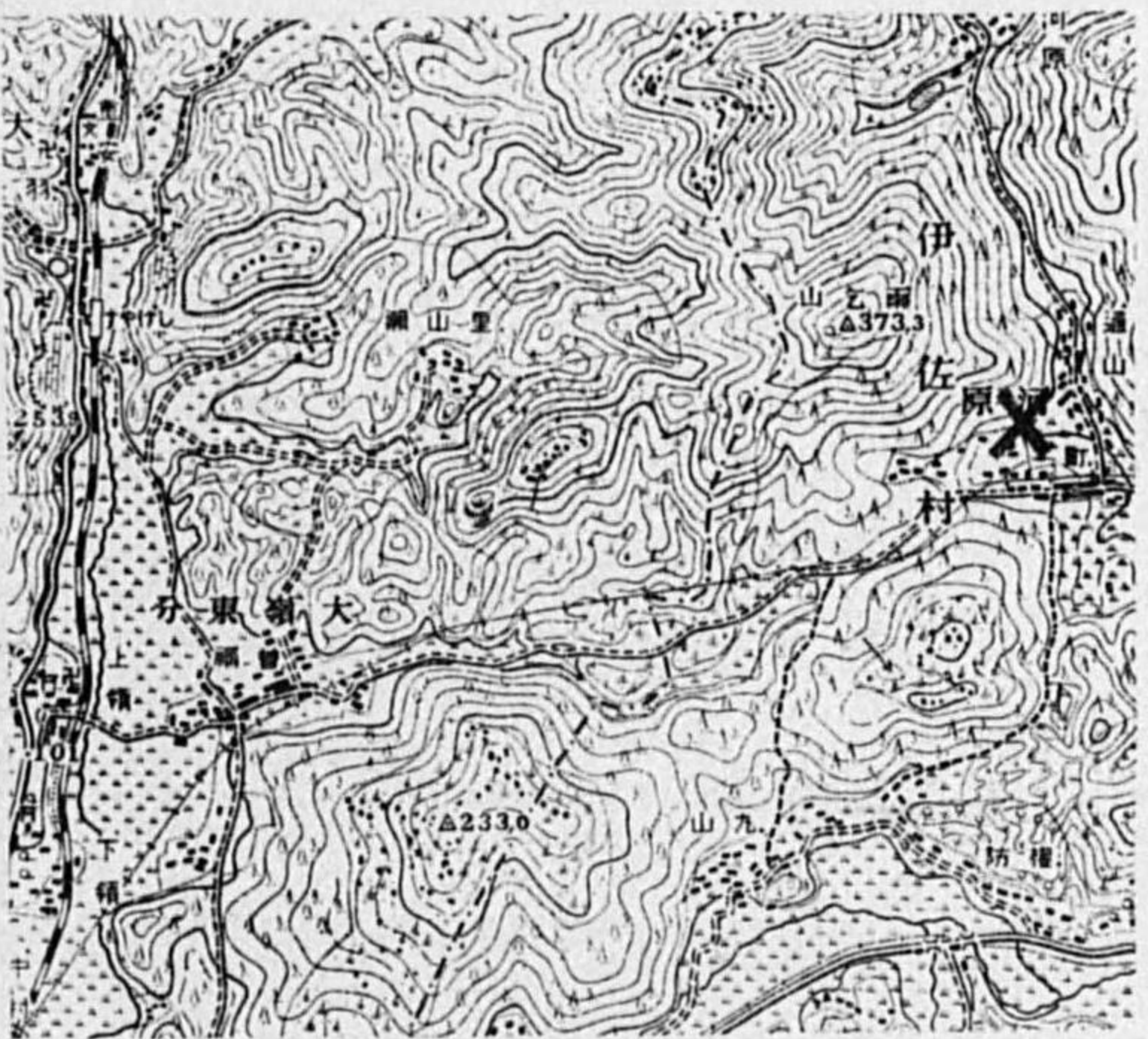


モモヤマ大の日春×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

後記 春日の大ヤマモモは昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

河原の大榎

所在 山口縣美禰郡伊佐町大字河原字中野山



河原の大榎の所在地
(陸地測量部五萬分一地圖に據る)

前項調査記事中の秋吉村より南方縣道約一里岩永村山露に達し、西折して村道に入り、十六町を過ぎ再び南折して俚道に入り、約三町を行けば大榎所在地に到る。或は又美禰線吉則驛より東方へ縣道を進むこと三里にして山露に達するの便あり。

大榎はシラカシの大樹にして山麓の緩傾斜地に立ち、地上約八・五米にして三大支幹に分る。

- 根元幹圍 約 一三・三*
- 地上一・五米の幹圍 約 四五〇
- 三大支幹の基部の周圍 約 三・六五*
- 東方のもの 約 三・八〇
- 南方のもの 約 三・四二
- 北方のもの

版圖三十第



河原の大榎
A giant *Quercus stenophylla* (Bl.) Mak. at Kawara.



天橋立の松樹叢

Pine grove at Amanohashidate, a sandy spit celebrated for its scenery.

枝張

東北方

西方西方の枝は舊時代
られたりと云ふ

南方

北方

本樹はシラカシの巨樹として有数のものなり。

約	二〇・六〇
約	一三・三〇
約	二〇・七九
約	一六・二一

(昭和九年四月十六日調査)

後記 河原の大樫は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

京都府

天橋立の松樹枯死に関する調査

昭和九年五月十八日天橋立に到り、同處の松樹枯死に關して調査せる所左の如し。
 大正十一年名勝として指定されたる天橋立は京都府與謝郡宮津町の北方に於て北より南々西
 に向て宮津灣に突出せる一大砂嘴にして延長二十八町に亘り、其大部分は幅狭く、最も狭き處は僅
 に十一間に過ぎざれども、南端に近き濃松ノリマツに於ては一町五十間に達せり。
 砂嘴の外側(東方)の海面を與謝海と云ひ、内側(西方)の海面を阿蘇海と云ふ。

京都府 天橋立の松樹枯死に関する調査

天橋立は現に南方の小天橋と北方一帯の長砂嘴を成せる大天橋とに分れ、兩方は橋により互に連絡す。大小兩天橋の中央に府道を通せり。



天橋立の松の主な枯死を区画する
(陸地測量部五萬分一地圖に據る)

天橋立の松は本来黒松なるべきも、舊時陸地より赤松侵入し來りて黒松中に點々混生せるが、殊に前記の濃松の如く砂嘴中の幅大なる處にては赤松のみ發生せるを見る。

天橋立の全地域に亘りて松の枯死せるものは主として小天橋の東北端にある黒松十一株と、大天橋の濃松を成せる赤松中二十六株なるが、此外に大天橋の南端に近

き府道の西側に赤松一株、又濃松に對する府道の東側に赤松七株枯れたり(京都府社寺課長報告參照)

此外小天橋の西南端陸地に近き料亭(松富樓)の附近に赤松の小樹の枯れたるものあり。

大天橋の主部を成せる一帯の長砂嘴にある松樹殆ど黒松には枯死せるものなし。

此の如く天橋立の松の枯死は局部的なるが、天橋立公園監視所にて聞く所によれば、昨年(昭和八年)九月五日暴風の際高潮來襲して前記枯松のある地域は潮水に浸され、殊に濃松の部分は地盤低きにより潮水の浸入甚しかりしと云ふ。(是部の高潮被害地の松樹は其後葉の先端部の赤變を呈せるが、本年に至り葉の全部赤褐色となり枯死せり)。

今枯死せる松樹の標本を検せるに、葉枝及び幹の下部(横断面)に於ても虫害又は菌害を認めず、又腐朽の形跡なし。

松は石炭の煤烟によりて枯死し易きものなるが、天橋立の指定区域内には天橋立驛及其附近の汽車線路より煤烟を蒙むることなし。故に前記の區域に於ける松樹枯死の原因が汽車の煤烟に關係なきは明なり。

本邦の海岸地方には九月頃颱風の爲に高潮を起し海水の浸潤する所となり、爲に沿岸一帯の草木の枯死せる實例に乏しからず。該枯死の原因は蓋し海水に含める食鹽其他の鹽類の有害作用によりて主として根の生活細胞を死せしめ、遂に全幹の枯死を起せるなり。

獨濃松にある赤松のみならず同地域にあるヤマモモの如き常綠闊葉樹にても葉の先端部赤褐色となり枯死に瀕せるものあるを見たり、是れ明に此部分の植物が高潮の影響を示すものに外ならず。

以上天橋立の松樹枯死に關する原因に就て述べたるが、茲に尙同指定地の松の保護に關する要點を記すへし。

- 一、前記の濃松其他の枯松の地域にして地盤の低き處は土砂を盛り潮水の浸入を防ぐを要す。且岸邊にして潮水の入り易き部分は適當なる護岸工事を施す必要あり。
- 一、天橋立の松は黒松を本體とすべきにより、從來赤松なりし部分は今後徐々に黒松に變更するを要す。何となれば黒松は海岸に適應せる樹種にして、赤松よりも斯かる地域に於ける生存上の抵抗性大なればなり。
- 一、天橋立の黒松存續の爲には同松の苗木を養成し順次補植すべし。殊に前記の枯松を取除ける跡には總べて黒松を栽植するを要す。
- 一、大天橋の東北端の與謝海に面し夏期水泳所となれる部分には、約一町に亘りて黒松の根の露出せるものあり。此儘放置するときは該部一帯の松樹は早晚枯死すべきにより、速に適當なる護岸工事を施し以て樹根を被ふを要す。
- 一、天橋立の風景は狭き長砂嘴に發生せる一帯の老松の間より兩方の海面を隔て、對岸の連山を眺望するにあり。此風景は夙に雪舟の畫ける圖面に現れたるが、江戸時代に於ては元祿延享頃に出版せる貝原益軒の日本三景圖の一として畫かれ、殊に嘉永安政頃の廣重の浮世繪には同所の風景は巧に表はされたり。斯かる白砂青松の砂嘴の風景は眺望を第一とするが故に、岸邊に松樹以外の喬木殊に常綠闊葉樹叢は不可なれども、唯丈低き樹木の散生するは妨げ

ず。殊に本邦北方より中部の海岸に分布するハマナスは天橋立地内にも點々發生し、初夏美麗なる紅花を開き芳香を放つものなれば、此小灌木は努めて保護し之が繁殖を圖るを良しとす。

一、其他天橋立指定地内には將來茶亭料亭は勿論眺望を遮ぎるべき建物は一切設けざるを要す。

瑠璃溪の森林に就て

瑠璃溪は昭和七年十月名勝として指定されたる所にして、京都府船井郡西本梅村にあり。本年五月十九日同地に到り視察せるに、溪流の兩岸を被へる森林には赤松普通なるが、其他アカシデ・ハシノキ(以上樺科)・クリ・ウラジロガシ・ツクバネガシ・ウバメガシ(以上殼斗科)・ヤマモミヂ・ウリカヘデ(以上無患樹科)・ツバキ・ヒサカキ(以上山茶科)・サハフタギ(灰木科)・タニウツギ・コバノガズミ・コックバネウツギ(以上忍冬科)・ミツバツツジ・モチツツジ・ヤマツツジ・アセビ・スノキ・ネデキ(以上石南科)・ソゴイヌツゲ(以上冬青科)・クロモジ(樟科)・シキミ(木蘭科)・カマツカシデ・ザクラ・ウラジロノキ(以上薔薇科)・バツコヤナギ・ネコヤナギ(以上楊柳科)・ツリバナ(衛矛科)等種々の落葉樹及常綠闊葉樹より成り、山上の高處にはモミ發生して遠望景色を呈す。

瑠璃溪は海拔高度大ならざるを以て固より高山性樹木なく、又深山性樹種に乏しきも、山城丹波地方の山地に普通なる森林植物を産し、種類の數少からず。然れども溪谷には殆ど巨樹老木を見



(一其) 觀景林森の溪璃瑠
View of the forest of Rurikei.

ず、林相美ならざる所多し。

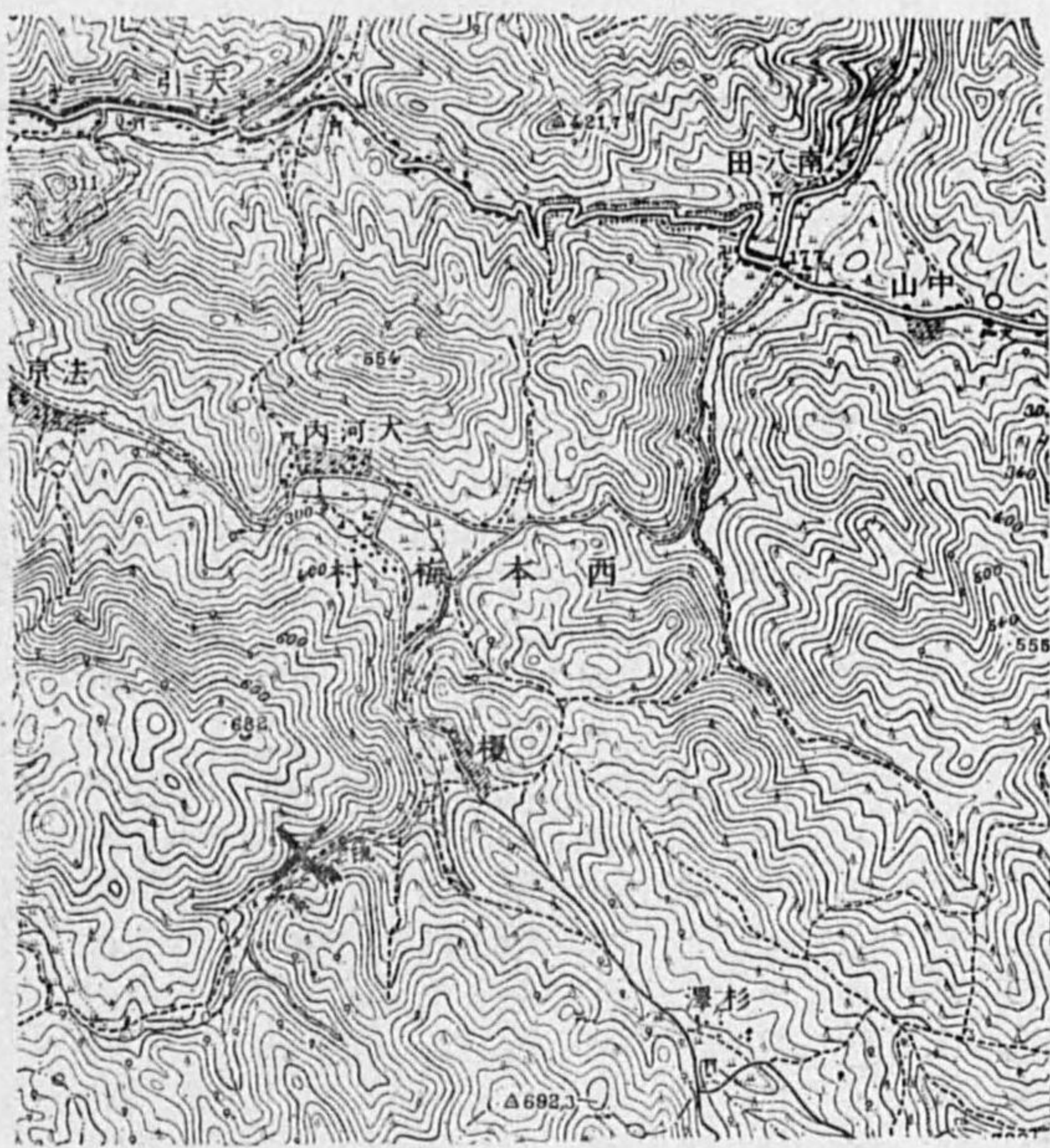
京都府 瑠璃溪の森林に就て

此の如く瑠璃溪が鬱蒼たる林相を呈せざるは、是れ從來頻りに伐木されたる結果に外ならず。

故に若し今後山中の森林植物を保護し其發生を遂げしむるときは、年を経ると共に樹幹は長大となり、枝葉繁茂し藤蘿纏繞し、溪流の兩側の山地は茂樹鬱林によりて被はるゝに至るや必然なり。

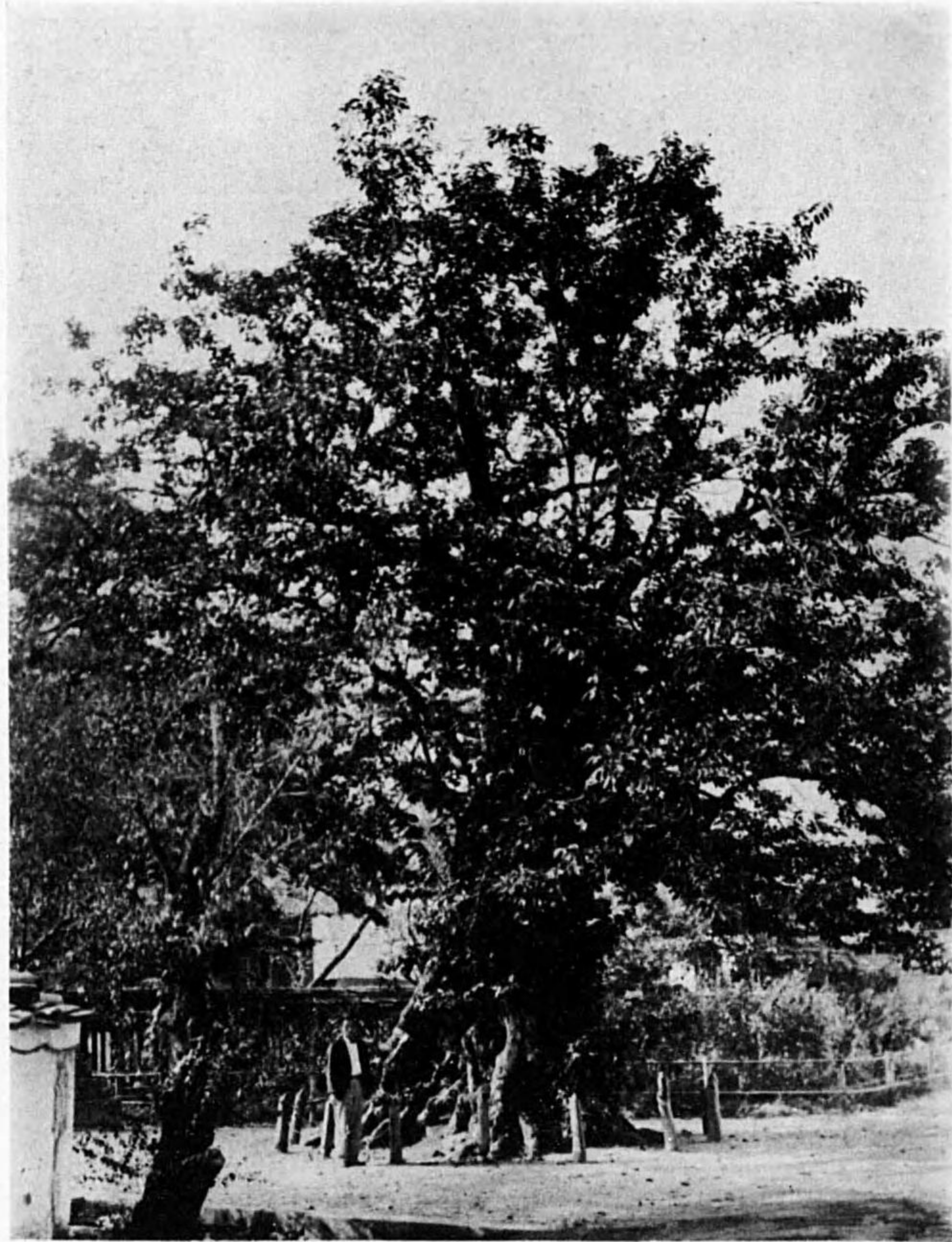
凡べて溪谷の風景は一は溪流岸邊の岩石の位置と構造とにより、一は天然に溪谷に發生する草木の群落によるものにして、此間何等人工を借らずして天然美は具はれり。

此見地よりするときは、縦令現在の林相佳ならざるにもせよ、濫りに植林

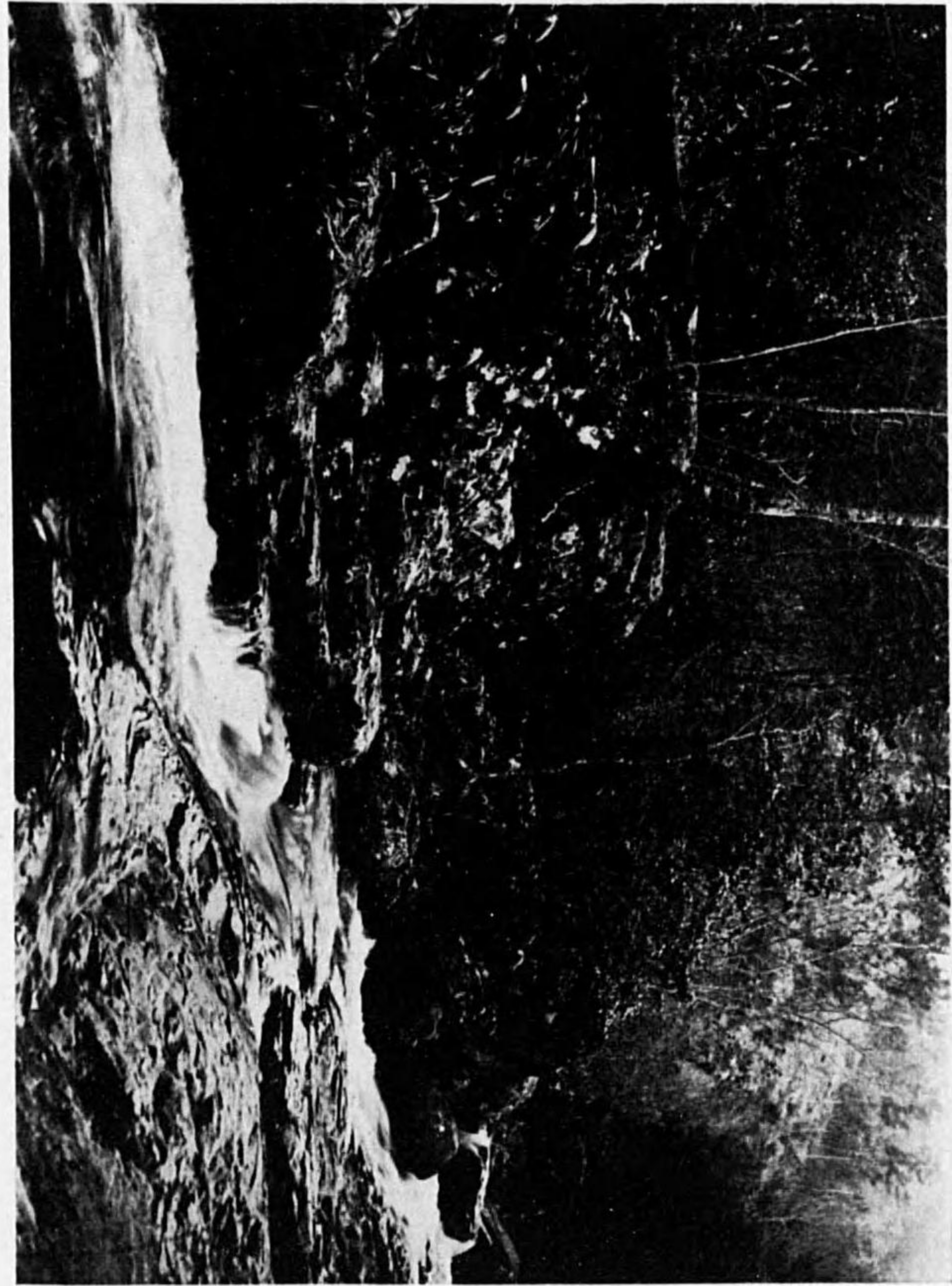


地在所溪璃瑠 ×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

を行ひ、溪谷の兩岸を杉の純林又は檜の純林の如きものに化せしむるの不自然なるは言はずして明なり。



キノヤシチハロヒの社神府宰太
A giant *Ehretia thyrsoflora* Nakai var. *latifolia* Nakai
in the precinct of the Dazaifu Shrine.



(二共) 觀景林森の溪琉璃
View of the forest of Rurikci. Another view.



森 家 隠
A giant *Cinnamomum Camphora* Nees et Eberm. at Esogjuku.

瑠璃溪の指定地内に上記の如き植林は不適當なれども、唯溪流の岸邊に適宜にヤマモミヂを散植し、又山腹の樹林中に山櫻を點々栽植し、且溪中に自生するツツジの種類の繁殖を圖るが如きは妨なきのみならず、自然の風景を一層美化せしむるの功あるべし。

瑠璃溪の入口には溪流を隔て、山腹に岩骨露出し、其間に赤松多く發生し、又初夏にはミツバツツジの類満開して美觀を呈す。斯かる地域にありては密林の被蔽は反つて不可なり。

瑠璃溪の水は古生層の平滑なる岩盤を樹間に隠現しながら流下し、以て幽邃なる風景を成せり。溪流の缺水は甚しく風致を損するも、満水も亦岩盤を没し、溪流固有の趣を失ふべし。故に成るべく一定の水量を保たしめんとせば、瑠璃溪の山奥に於て水源涵養林の存在を要すべし。聞く所によれば、斯かる保安林は已に存在せりと云ふ。

福岡縣

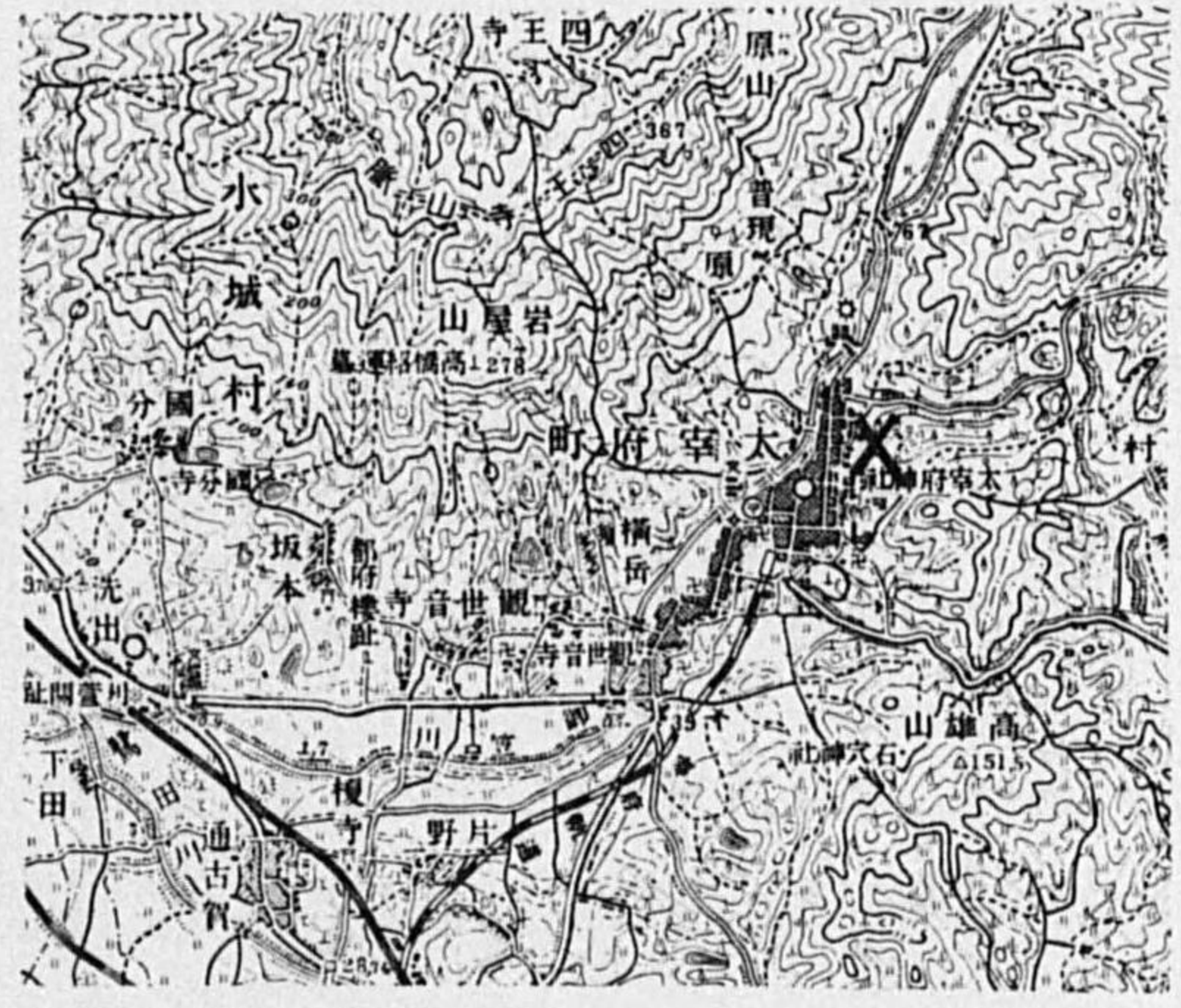
太宰府神社のヒロハチシヤノキ

所在 福岡縣筑紫郡太宰府町官幣中社太宰府神社境内

本樹は去る大正十五年調査せるものにして、天然紀念物及名勝調査報告植物之部第七輯第四〇頁參照、今回再調査を施せり。

本樹の幹の南側は缺損せる爲、幹の周圍は圓形を成さず。

福岡縣 太宰府神社のヒロハチシヤノキ



地在所キノヤシチハロヒ社神府宰太×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

根元周圍 約 九・七〇
地上一・五米の幹圍 約 六・五〇

本樹は現に樹勢旺盛、ヒロハチシヤノキ (*Elaeagnus japonica* Nakai var. *latifolia* Nakai) の巨樹として有数のものなり。
(昭和九年五月二十日調査)

隱家森

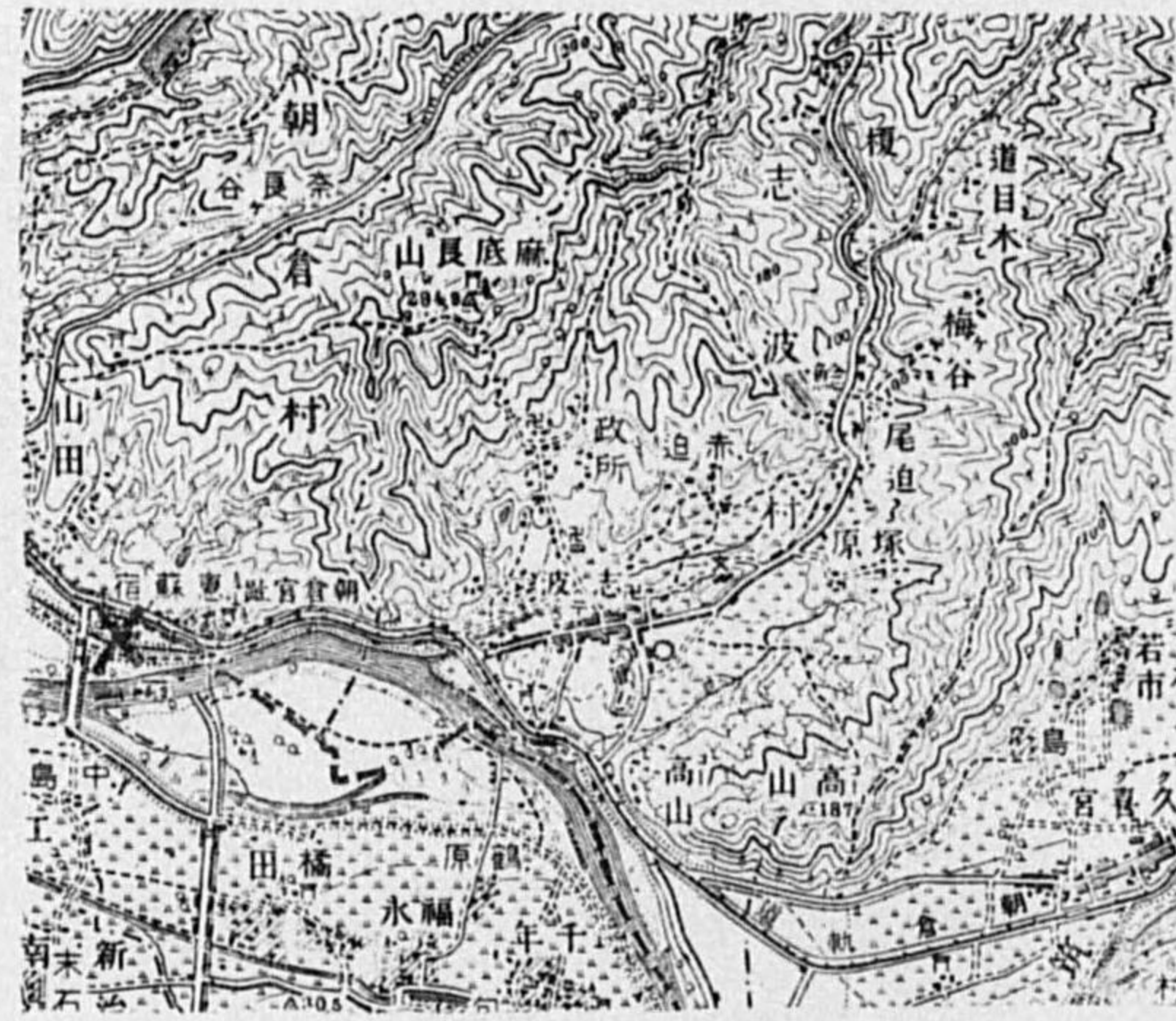
所在 福岡縣朝倉郡朝倉村大字山田字惠蘇宿
無格社牛天神境内
鹿兒島本線二日市驛より朝倉軌道線によるか
又は二日市町より大分街道を行くこと約七里にして隱家の森に達すべし。

約 三五・四五
約 一八・二〇
約 一五・八八

隱家は一株の巨大なる樟なり。
根元周圍
地上一・五米の幹圍
注連(地上一・八米)を繞らせる部分の幹圍



たり。該樹の地上一・五米の幹圍約三・二米なり。
り。
本樹は樟の巨樹として有数のものなり。



地在所森家隱×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

本樹は地上約三米の高さに於て五大支幹に分れ、枝張廣大なり。東方の太き枝の上部は折れたり。
り。

枝張(根元より)

東方	約 二〇・〇〇*
西方	約 二二・七三
南方	約 二〇・九一
北方	約 二〇・九一
樹高	約 二六・〇〇

幹の南側に一大孔を開けり、是れ太き枝の折れたる痕にして、幹の内部に通じ中空となれり。
本樹の幹の西側に沿ふて一株のムクノキ生え、尙此ムクノキに接して一株の小さきタブノキあり。

(昭和九年五月二十一日調査)

後記 隱家森は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

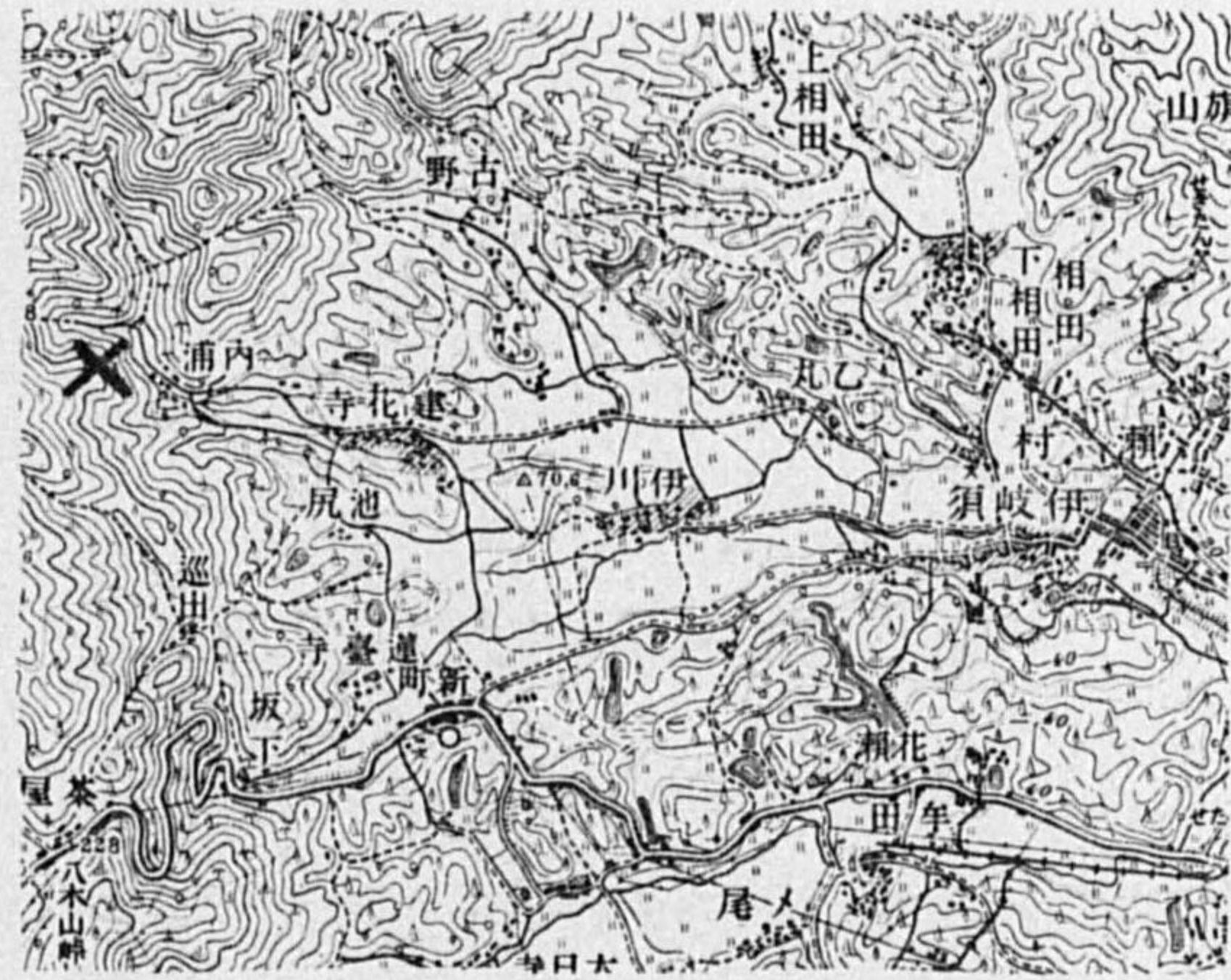


桂大の村西鎮
A giant *Cercidiphyllum japonicum* S. et Z. at Chinzeimura.

福岡縣 鎮西村の桂

鎮西村の桂

所在 福岡縣嘉穂郡鎮西村大字建花寺

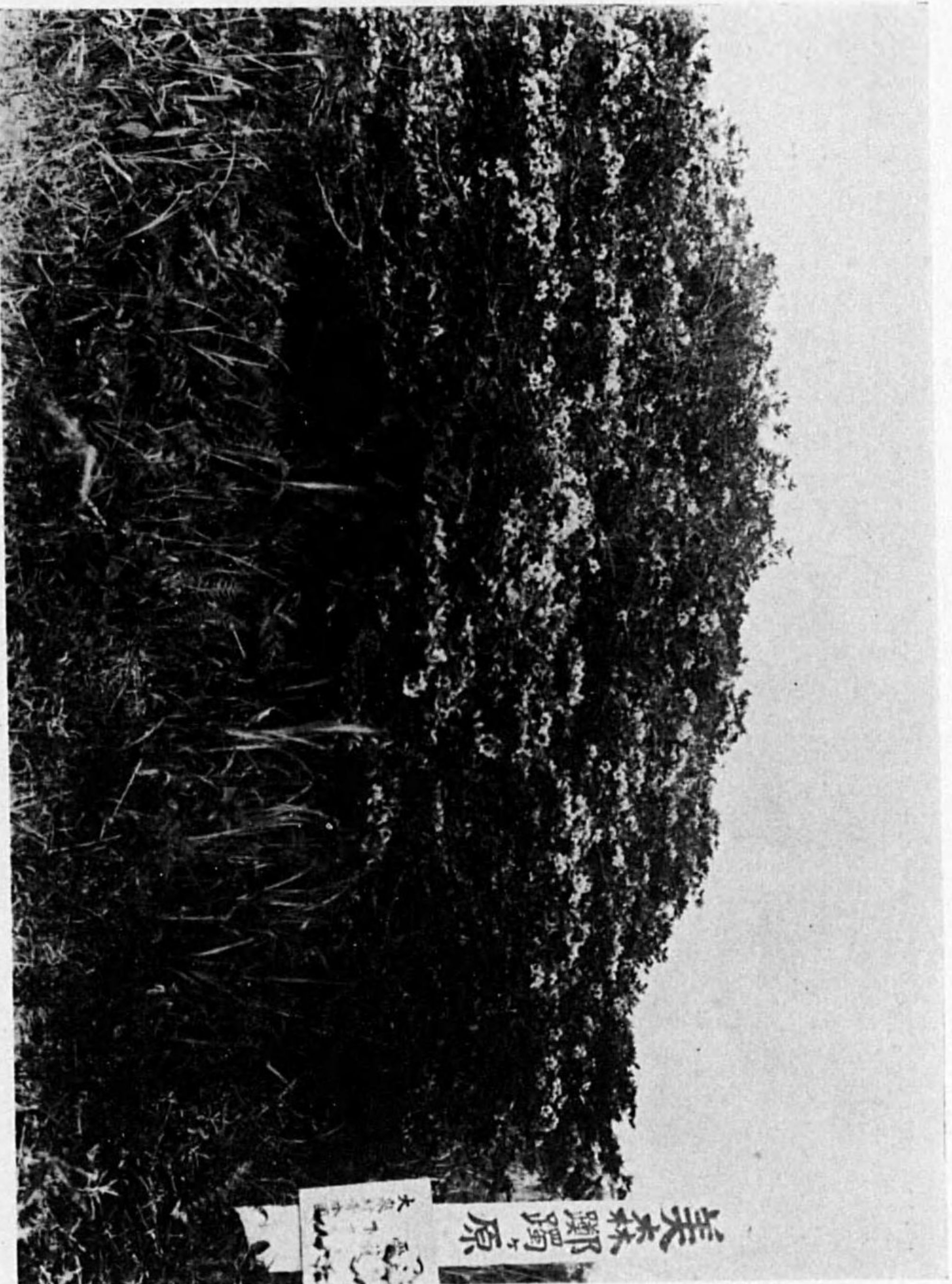


樹高

地在所桂の村西鎮×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

鹿兒島本線若松驛より乗車し新飯塚(芳雄)驛にて下車し、福岡街道を車行すること約二里、それより村道に轉し、約四町にして山路に入れば、約八町にして桂所在地に達す。
同樹はカツラの巨樹にして、谷間の急斜面に立ち山路の上方にあり。樹の正面は東に向ひ、枝梢高く同方面に伸びたり。根元の東側は西側よりも約二・七米低し。
本樹は樹齡古く、主幹を缺き、根元より多數の蘗生あり。其中基部の周圍九仙米以上のもの約十五本あり。

根元總周圍 約 三三・七^米〇
高地面より一・五米上の幹圍 約 一一・八二〇
約 二七・〇〇



シツツマヤ大の森美
A large *Rhododendron Kambyeri* Panch at T'sutsujigahara.

本樹は雄株にして、二月下旬開花すと云ふ。
幹の北側の高處にヤマモミヂ着生せり。
本樹はカッラの巨樹として有數のものなり。

(昭和九年五月二十一日調査)

後記 鎮西村の挂は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

生の松原

所在 福岡市

福岡市の西部海濱に沿へる一帯の松原にして、現に九州帝國大學農學部の演習林となれり。史蹟として指定せられたる元寇防壘の一部も亦此中にあり。

生の松原は主として黒松より成り、之に赤松を混せり。松樹は黒田長政の當時栽植されたるものと云ふ。

此松原の松は幹圍概ね細く、且林立して樹姿の美なるものなし。此點に於ては名勝として指定すべき價値あるを認めず。

(昭和九年十月二十九日調査)

長崎縣



地在所落群マシリキマヤミ原寶×
(る據に一分萬五部量測地陸)

池の原ミヤマキリシマ群落

所在 長崎縣南高米郡小濱村(温泉岳)

上記の群落は昭和二年の秋調査し、同三年三月天然記念物として指定せられ、又同同年三月雲仙國立公園として指定されたる地域内に包含せらる。

今回は恰もミヤマキリシマの花期に際したれば、前回見るを得ざりし開花の景觀を調査せり。

池の原の指定地にはミヤマキリシマの大なるもの多く、隨て花時の美觀は言を俟たず。同樹は葉短小キリシマの葉に於けるが如く、花は口徑約二五仙米、花瓣の長さ約二五仙米五雄蕊あり。花は淡牡丹色を呈し、ヤマツツジの花の赤色なるものと同じからず。尤も多數の個體中に

は紅紫色の稍濃きもの又淡きもの等ありて自ら色彩の差異あり。又他には著しく赤色を呈しヤマツツジとの雜種と想はるゝものあり。

雲仙公園の温泉地帯の南方約二十町を隔だたる寶原ホウゲンにも亦ミヤマキリシマの群落あり。此地域は西南方の眺望開豁にして、原野一面に同樹を以て被はる。池の原に於ける如く莖の高さ大ならざれども、株數甚多く、盛に開花し、且花色の變異に富み美觀を成す。聞く所によれば近時赤松林を伐拂へる後に發生したりと云ふ。

(昭和九年五月二十三日調査)

原生沼沼野植物群落

所在 長崎縣南高米郡小濱村(温泉岳)

本植物群落も亦去る昭和二年の秋調査したるが(前項記載調査報告參照)、今回は該群落中カキツバタの開花を検するを得たり。

カキツバタは指定地内濕地の一部に限られ、區域は廣からざれども、株數は頗る多く、開花期には著しき景觀を呈す。ミヅゴケ類(*Splachnum cymbifolium* Ehrh. 及 *S. fimbriatum* Wils.)の中に生じ、花色は濃紫のものと、白地の花蓋の下半部の中央に淡紫の斑入のものとあり。

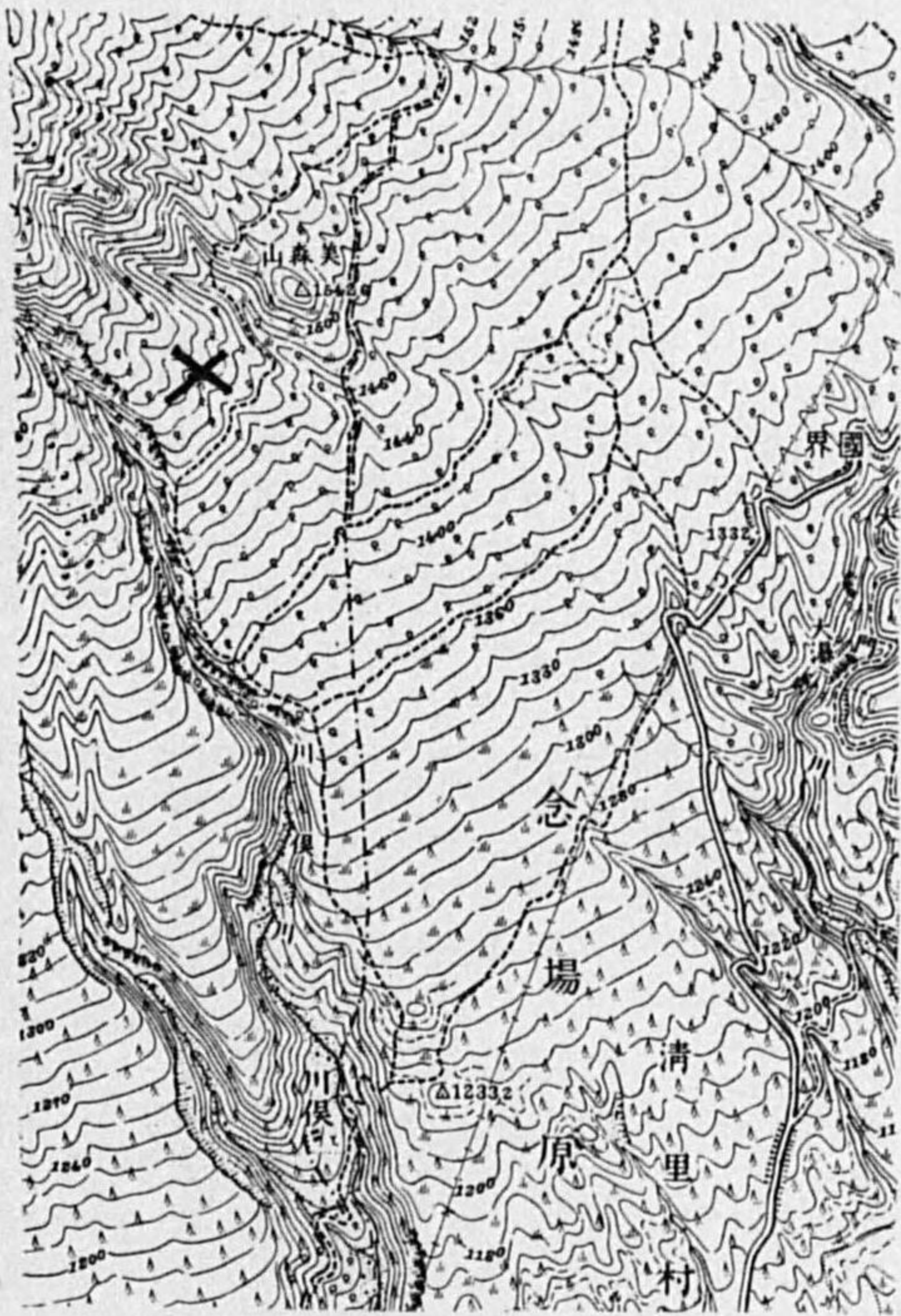
カキツバタの外にマウセンゴケ、ヤマドリゼンマイ其他濕原固有の植物あれども、他には外圍より侵入せる種類少からざること前回の報告に記せるが如し。即ち赤松を始め、イヌツゲ、ミヤマキ

リシマ・キレンゲツツジ・カバレンゲツツジ(アカレンゲツツジ)は見えず、ネチキ等なり。

(昭和九年五月二十三日調査)

山梨縣

美森の大ヤマツツジ



美森の大ヤマツツジ所在地
(陸地測量部五分一地圖に據る)

所在 山梨縣北巨摩郡大泉村大字石堂字殿上デンジヤウ
 中央線小淵澤驛より小海線に乗換へ、清里驛にて下車し、林道を北方に進むこと約一里にして美森山麓に達す。それより西南方の谷を下り、再び山腹を上り臺地に達す。此距離約七町なり。
 臺地にはヤマツツジ・レンゲツツジ・サラサドウダン・ト

ウゴクミツバツツジ等の石南科植物發生し、大なる株を成すものあり。又處々にミヅナラ其他の喬木散在し、ミヤマザクラの開花せるものあり。

此臺地に生ぜるヤマツツジ中株の大なるもの數株あり。其中の最大なるものは山梨縣調査の美森躑躅甲株にして、下記の乙株及丙株も皆同縣の調査せるものなり、今回調査せる所左の如し。

(甲株) 根元より多數の支幹に分る。其中、太きもの十三本、稍細きもの約五本あり。

根元全周囲 約 二・七^{*}〇

枝張(外側より)

東方 約 三・六^{*}五

西方 約 二・五^{*}五

南方 約 三・一^{*}五

北方 約 二・五^{*}〇

樹高 約 二・五^{*}〇

右調査の結果は山梨縣の調査と大差なし。調査當時は全株殆皆蕾のみなり。

(乙株) 甲株より西南方約五町にして乙株あり。根元より多くの支幹に分る。其中太きもの約十本、稍小なるもの約四本あり。

根元全周囲 約 二・〇^{*}五

枝張

山梨縣 美森の大ヤマツツジ

東方	約	二・五*
西方	約	一・九〇
南方	約	一・九〇
北方	約	二・一〇
樹高	約	二・〇五

乙株は甲株よりも小なり。尙乙株の西方約半町を隔て、丙株あり。其太さは乙株に及ばず。以上三株のヤマツツジの在る地域には多數の躑躅類發生せるが、乙株より丙株に到る間にはシロバナミツバツツジの高き株あり、又ベニサラサドウダンとヤマツツジとの株の合着せるものあり。

此臺地とは別に前記の美森山には山腹一帯に多數のレンゲツツジ・サラサドウダン・ベニサラサドウダン・トウゴクミツバツツジ發生し群落を形づくれるが、先年野火の爲に焼失せるもの少からず。野火は殿上方面にも及べるが、美森山腹に於ける如く樹木の損害甚しからず。

美森山頂(海拔一五四・六米)にはサラサドウダンの大なるもの一株あり。其大きさは左の如し。
根元幹圍 約 一・八五*

地上約二五仙米の高さに於て東北側に一支幹を出し更に約一五仙米の高處に於て南側と西北側とに各一の支幹を分つ。
支幹發出部の周圍

東北側のもの	約	〇・六五*
南側のもの	約	〇・八五
北西側のもの	約	〇・九五
枝張(根元より)		
東方	約	三・七〇*
西方	約	三・五〇
南方	約	三・〇〇
北方	約	四・二五
樹高	約	四・七〇

今回調査せるヤマツツジ中前記の甲株は株の大なる點に於て有數のものなり。

(昭和九年六月十三日調査)

岩手縣

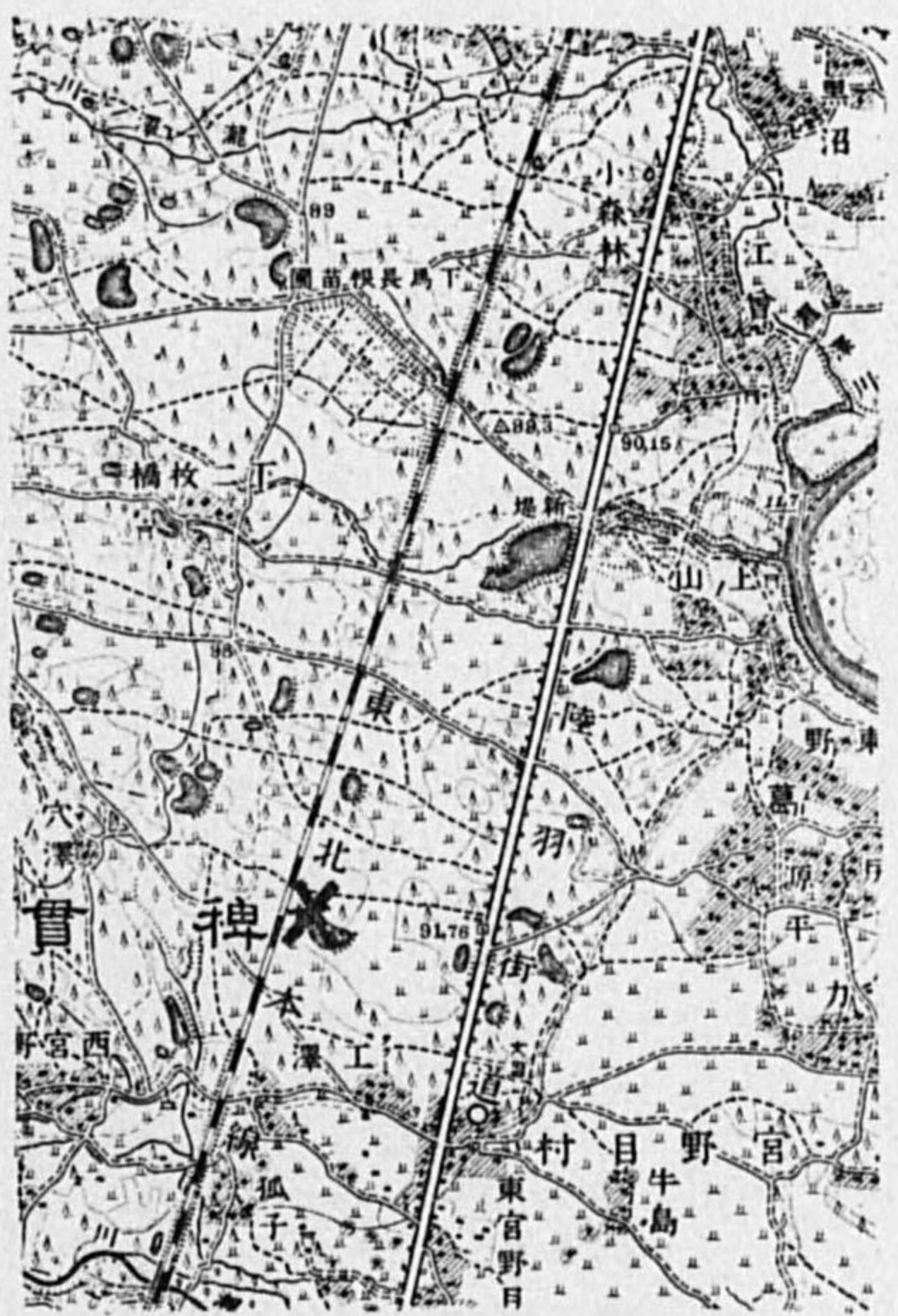
花輪堤花菖蒲群落

所在 岩手縣稗貫郡宮野目村大字西宮野目花輪堤

東北本線二枚橋驛より南方約十町汽車線路の東方に沿つて一の池沼あり灌漑用水たり。池の
岩手縣 花輪堤花菖蒲群落 四三

西岸一帯は湿地にしてアリノタノ全面に發生し、其間にミヅギバウシ・ヌマトラノヲテンツキ等の
濕原植物に混じて花菖蒲の密生するを見る。

花菖蒲は池邊のみならず池中にも夥しく發生し、池面の西部は殆ど之によりて被はれたり。

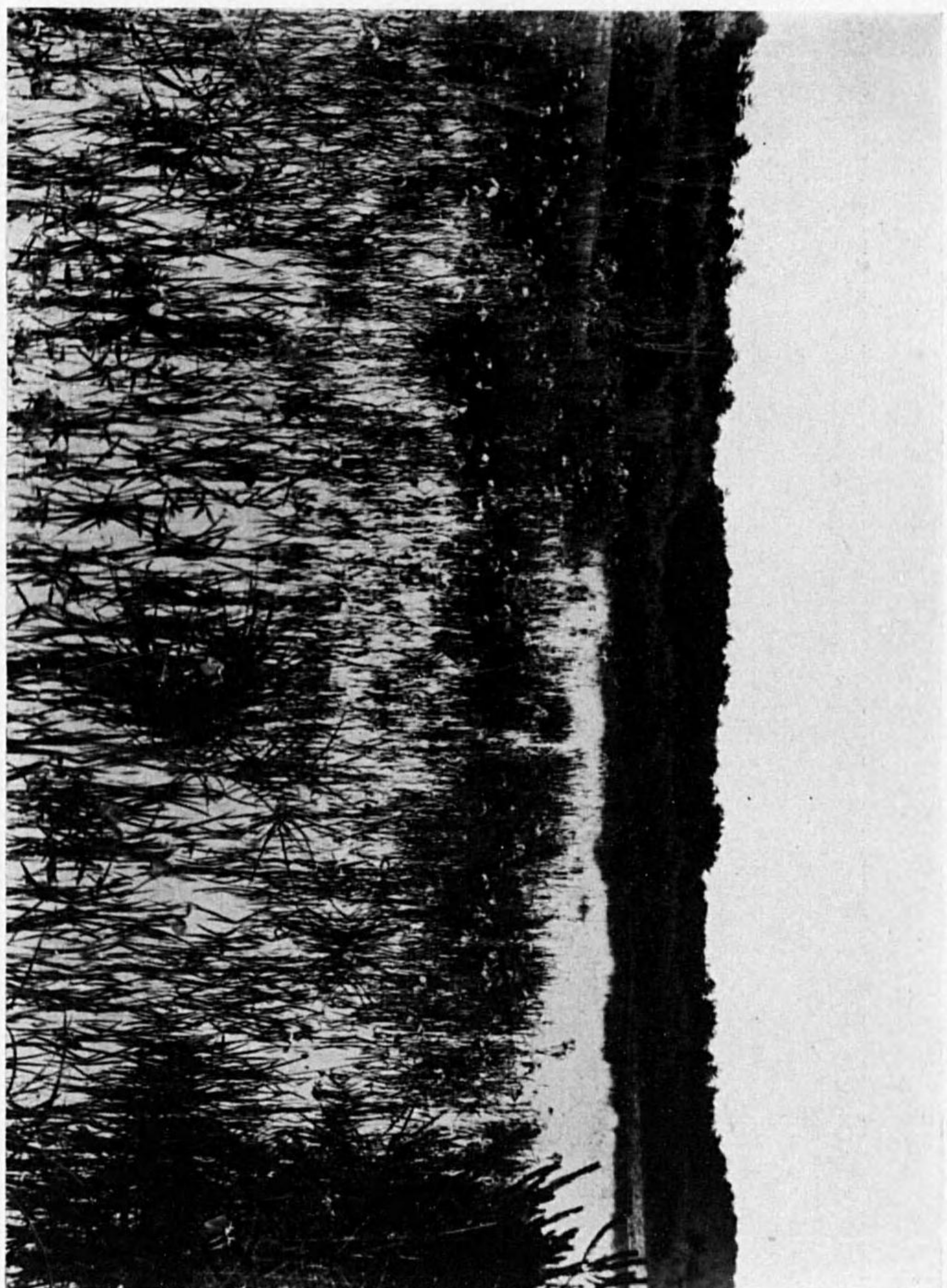


× 花輪堤花菖蒲群落所在地
(陸地測量部五萬分一地圖に據る)

池邊及池中の花菖蒲は花色の種々なるによりて著し。即ち淡紫色(藤色)より濃紫色、瑠璃紫色に至る紫色群に屬するものと、濃赤紫色、蝦尾紫、濃小豆色より淡赤紫色、淡小豆色に至る赤色群に屬するものとあり。此中最も多きは紫色花にして、往々色彩の濃艶なるものあり。一方亦赤紫色花も少からざれども、而かも群落全體より見れば紫色花主位を

占むるが如し。(三好學野生花菖蒲ノ變異ニ就テ帝國學士院記事第十卷第六七二頁昭和九年)。
本日同行の鳥羽源藏氏(岩手縣天然紀念物調査委員)より聞く所によれば、同氏は花菖蒲の白花のもの
を此附近の野地に於て發見せりと云ふ。
上述の異色花は各自群叢を成すことなく、互に混生せるにより全群落は色彩の變化を呈し、一大

版圖一十一第



花輪堤花菖蒲群落
Association of *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* S.) at Hanawadatsunimi.



落 群 蒲 菖 花 矢 金
Association of *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* S.) at Kanaya.

美觀を呈す。

日光赤沼原信州淺間の高原其他福島縣の山中原野等に於て從來調査せる花菖蒲群落は何れも皆赤紫色を開き、又昨年天然紀念物として指定せられたる箱根仙石原濕原植物群落中の花菖蒲は紫花のみを開くによりて知られたるが、今回調査したる前記の花菖蒲群落は野生の状態に於て既に花色の種々の變異を呈せるは著しき現象と云ふべし。

茲に尙特記すべきは該群落に於ける畸態の出現なり。是れ今回沼池の岸邊に生ぜる二株の花菖蒲に於て發見せる所にして、二株の中一株は濃紫色花、他株は淡紫色花を開けるが、何れも三枚の外花蓋片の外に一枚の副外花蓋片を着けたり。但し内花蓋片と雄蕊及雌蕊とは通常の如く三の數より成るにより、該副外花蓋片は正さに二箇の雌蕊の間に介在せり。斯く外花蓋片の四枚となれるは彼の培養花菖蒲の品種たる「十二一重」(花部の數の四又は五となれるもの)の發生史の一端を示すものとして見るべし。

前記の群落に就て更に注目すれば、岸邊の濕地に發生せる花菖蒲と池中に立てる花菖蒲とは莖の高さ互に差異あり。即ち前者にては約六仙米乃至一米に達すれども、池中にあるものは僅に五〇仙米に過ぎず、是れ所生の状態に由るものなるべし。花菖蒲は濕原固有の植物にして、十分水濕を含める土壤にありては發生旺盛なれども、元來外圍適應性大なる爲本群落に於けるが如く直ちに水中にも繁殖し、又比較的乾燥せる普通の土壤にも生長するを得べし。

要するに前記の花菖蒲群落は本州北部に於ける此花草の代表的密生地にして、花色の變異に富

めると崎態の出現するとは共に學術上有益なるものなり。依て該群落の所在地たる池沼並に西方岸邊一帶の湿地を天然紀念物として指定されんことを望む。

(**保在要件**)該群落を保存するには池沼の干拓は勿論岸邊の湿地一帶に亘り現状の變更を爲すことなく、又他所より此地域内に濫りに植物を移植せざるを要す。

本群落の西部に接してヒメヂョウソウの密生せる處あり。該草は往年北米より渡來せる歸化植物にして繁殖力極めて強く、我邦在來の植物を壓倒するにより、前記の群落所在地へ該草の侵入せざるを要す。

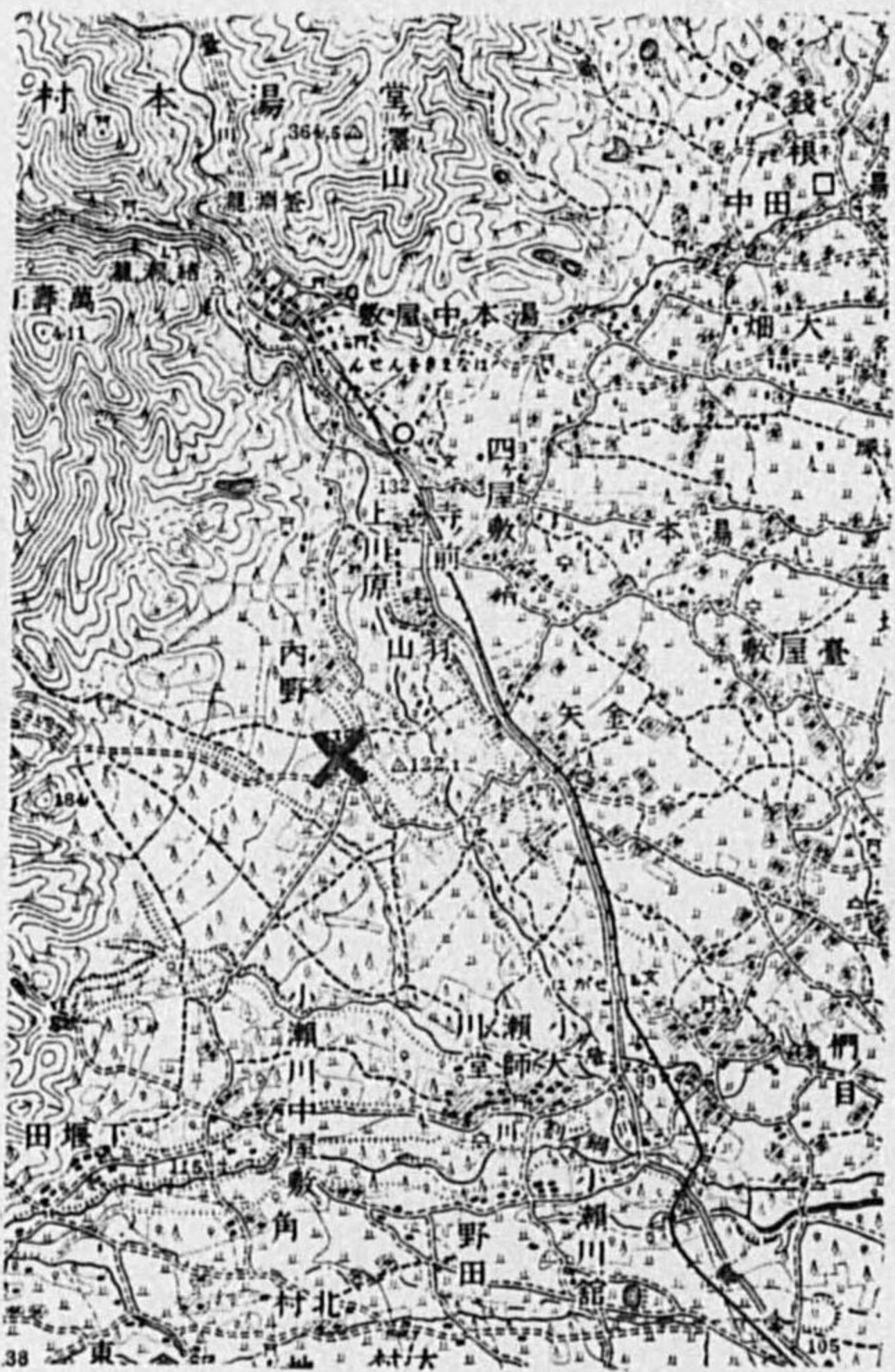
(昭和九年七月十三日調査)

金矢花菖蒲群落

所在 岩手縣稗貫郡湯本村大字金矢(個人有)

花卷温泉電氣鐵道北瀬川驛にて下車し、西方約十町にして赤松其他の疎林にて包まれたる面積約四町歩に亘る濕原あり。是れ金矢花菖蒲群落の所在地にして、地面にはアリノタフ密生し、又ミヅギクの群叢あり。其他イソノキの如き沼野植物の外イヌツゲ・ノリウツギ・アヲノカモメヅル等發生す。

花菖蒲は濕原の全面に發生し、花色は紫赤紫等の濃淡種々の變異を呈せること前記の群落に於けるが如し。舊時は此地方一帶は廣き濕原にして、處々にミヅゴケ發生し、其間各種の濕原植物殊



× 金矢花菖蒲群落所在地
(陸地測量部五分一地圖に據る)

に花菖蒲を産せるが、近時花卷温泉の開発其他に伴ひ土地の状態の變化を招き固有の濕原も次第に消滅するに至れり。

金矢花菖蒲群落は斯かる土地の變遷せる間に僅に残れるものにして、市街地に遠からざる所に今日尙能く舊態を保存せるものなれば、前記の西宮野目池沼に於ける花菖蒲群落の場合と同じく

天然紀念物として指定せられんことを望む。

(**保在要件**)本群落の保存上排水工事其他濕原の天然状態の變更を起すべき行爲は許可せざるを要す。

前項並に本項記載の調査の際には鳥羽源藏氏並に杉村松之助氏同行されたり。

(昭和九年七月十三日調査)

群馬縣

前橋城址の枝寄り松

所在 前橋市曲輪町六十六番地(群馬縣廳構内)

枝寄り松は廳舎と衛生試験所との間にあり。一株の黒松にして根元に少しく盛土を施せり。根元の周圍約三六米、地上一五米の幹圍約二米、樹高約二二米、直幹屹立し上方に枝群蓋の如く擴れり。

此松の幹の下方南側地上約四五米の高處に一大枝寄着し、葉密生して異様の觀を呈せり。枝は西北方より斜に東南方に下り、下端は地上約一五米、上端は約六六米に達す。

寄着枝の上半寄着部より上端までの部分を云ふは鈎狀に彎曲し、先端は切斷せられ、切口現存せり。上半の全長約三米なり。又下半寄着部より下端までの部分を云ふは長さ約四五米なり。

寄着枝は直接に幹に着けるには非ずして、幹より出でたる一の枝と連合せり。此枝の基部の周圍約一二米なり。

普通の連理の松にては、一株の松の枝が附近に立てる他株の松の枝と多少水平に接着しH字形を成せども、本樹にては附近の松樹より斜に下方に伸びたる枝が本樹の一の短き枝と癒着し、更に下方に屈曲して生長せるものにして、其實一種の連理に外ならず。但し今日にては一方の松樹の

版圖三十二第



(一其) 松寄枝の陸城橋前
The Edayorimatsu in Maebashi, a black pine,
Pinus Thunbergii Parl. growing together
with a branch of another black pine
which stood once near by.



(二共) 松寄枝の趾城橋前
The Edayoinatsu. Nearer view showing the attached branch more clearly.

存在せざる爲連理状を呈せず。

茲に著しきは寄着枝の本幹に連接せんとする部分の直下の幹圍が約一七五米なるに對し直上の幹圍は約一五米なり。是れ該寄着部の下方及上方に於ける幹の第二期肥大生長の強弱によるものにして、畢竟一大枝の寄着の影響による榮養生理の變調に外ならず。蓋し寄着枝は其本幹に連なる部分の狭少なるに拘らず生長旺盛にして多く毬果を着けたるは、本幹より十分の榮養を攝取するが故にして、之が爲寄着枝の連接する幹の直上部の肥大生長に著しき影響を蒙らしめたるものと考ふべし。

前述の如く本樹は特殊の連理の結果により榮養上變調を示せる點に於て學術上有益なるものなれば、天然紀念物として指定せられんことを望む。

(昭和九年七月二十日調査)

後記 前橋城趾の枝寄松は昭和九年十二月二十八日天然紀念物として指定せられたり。

福島縣

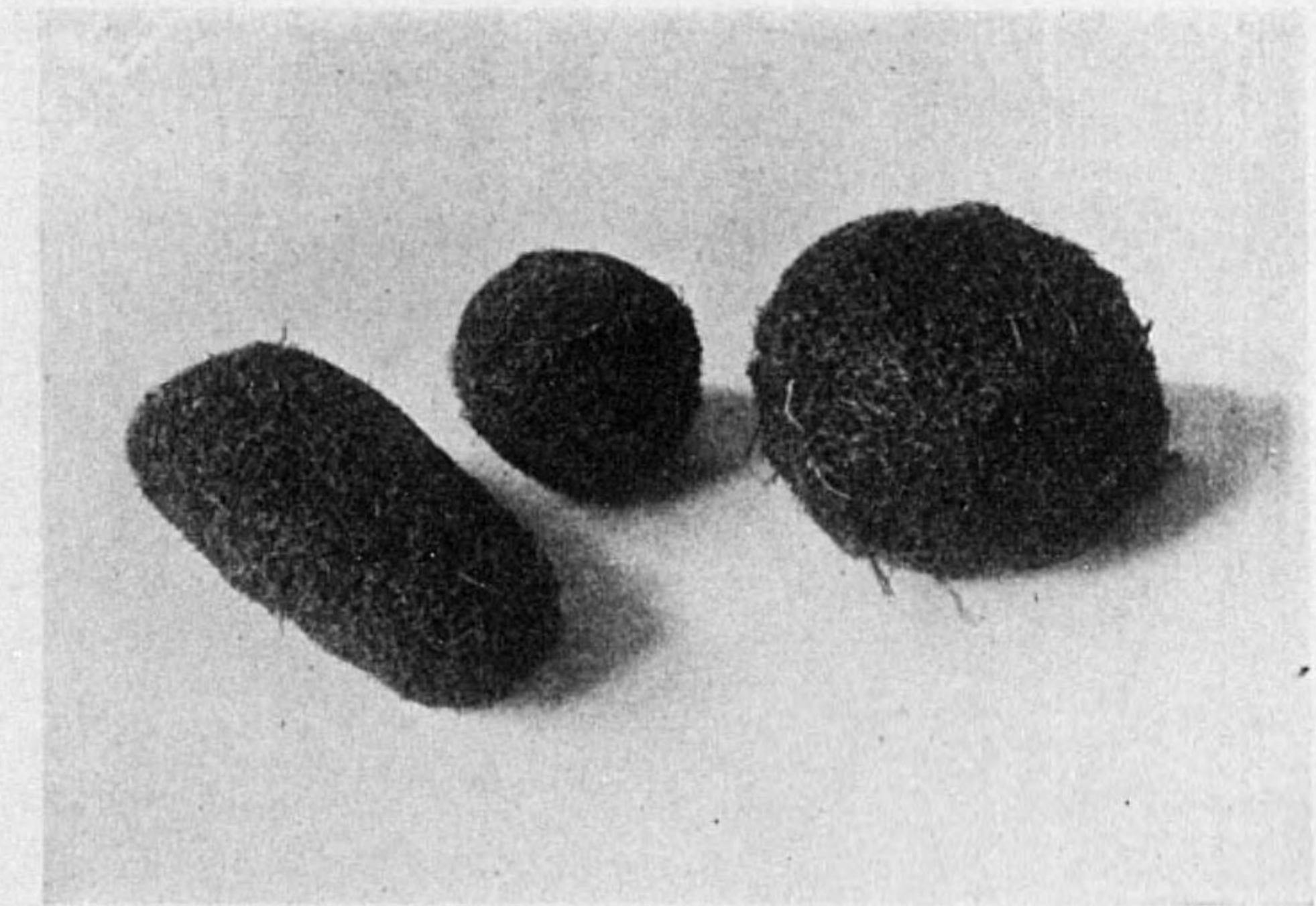
猪苗代湖の毬蘚產地

所在 福島縣耶麻郡月輪村大字中小町字小平瀨

福島縣 猪苗代湖の毬蘚產地

昭和八年の秋福島縣史蹟名勝天然紀念物調査會委員齋藤知賢氏より予に一の暗黒色小橢圓體

(長徑約四仙米、短徑約三仙米)を送られたり。是れ同縣長尾景巖氏が猪苗代湖に於て採集したるものと云ふ。一見するに全體一種の蘚より成り、細莖錯綜して纖維狀を呈せり。外形稍、毬藻に類せるも、色觀の暗黒なると絲條の太くして硬きとによりて直ちに區別すべし。依て該體を毬蘚(第二圖)と云ふ。



第二圖 猪苗代湖の毬蘚

今回調査せる毬蘚の産地は猪苗代湖の東北岸邊十數町里に亘れる部分なり。磐越西線關都驛にて下車すれば西南方約二十餘町にして小平瀨の郷社八幡宮に達すべし。是れより岸邊一帶の波打際は毬蘚の産地にして、砂上には大小種々の該蘚體散在し、天日に晒され乾燥せるもの、尙水分を含み濕潤なるもの、水中に浮み波によりて動搖するもの等あり。又砂濱の一部には毬蘚夥しく堆積せる所あり、是れ波浪によりて打上げられたるものなるべし。

毬蘚は稍、扁平なる橢圓形を呈するもの多く、眞の毬形をなすもの少し。當日採集せる多數の標

本に就て檢する所によれば、長約七仙米、幅約五五仙米、厚約四仙米のもの普通なるが、最大なるものは長一〇仙米、幅八五仙米、厚四五仙米、最小なるものは長三仙米、幅二仙米、厚一五仙米なり。毬形のものは直徑約二仙米より七仙米に及べり。又特に扁平橢圓體を成し、長徑一八仙米、幅一四仙米、厚五仙米に達せるものあり。

毬蘚の外部は緻密なる構造を呈すれども、内部は粗理にして、其中に水生植物の葉、根等の部分並に芽生を含めるもの少からず。蘚葉は黒褐色を呈し、又消失し、蘚體の枯死せるもの多きも、他には亦生活毬蘚なきにあらず。是れ前記の小平瀨より遙に西方の波靜なる湖岸に於て見たる所に於て、水際の潤へる砂上に綠色の幼蘚によりて被れたる毬蘚點々横はれるものあり。

是等の毬蘚は全體枯死せることなく、其中より新芽の發生したるものにして、之によりて見れば該蘚體は適當なる状態にありて、分布の用をなすものと云ふべし。

毬蘚の生成が水波の廻轉運動によるや疑なし。該運動にして何れの方向にも一樣に起るときは眞の毬體を生ずれども、然らずして専ら一の軸の周圍に沿ふて起るときは橢圓體又は長橢圓體となるべし。後者の實例は調査當日岸邊の淺き水中に浮める橢圓體の毬蘚に於て目撃せる所に於て、該體は波動により長軸に沿ふて水底を廻轉しながら一進一退し、其際水底に存在せる水生植物の幼芽、及根の部分、砂粒等も共に附着して毬蘚の容積を増すに至れり。

湖岸及湖岸に近き水中に多數の毬蘚の存在により湖底の或部分に該蘚の一大群落あるを想ふべし。然れども當日の調査にては特に水底に就て檢する裝置を缺きたれば未該群落を發見する

告と共に粘土塊に發生せる沈水蘚を送られたれば、直ちに鏡檢し、毬蘚の原體たるを確めたり。

次で九月十六日予は同地に趣き齋藤長尾兩氏並に八代義定氏(福島縣史蹟名勝天然紀念物調査囑託)秋山義次氏(福島縣縣會議員)と共に前記の沈水蘚群落の所在を調査せり。仁藏附近一帯の湖岸は遠淺にして、ヨシ其他多數の水生植物繁殖せるも、次第に岸邊より遠ざかり、深度の増すに従ひ、水草は減少せり。湖岸を距る約二〇〇米、水深約二—三仙米の湖底に於ては「ドレヂ」により明に沈水蘚群落あるを認めたり。當日雨天にして湖水稍濁り、覗水器によるも湖底の該群落を目撃するを得ざりしが、予等の舟行せる湖面の下底には右の群落の存在するや疑なし。

沈水蘚は褐黒色にして密束狀に立ち、莖の長さ約六仙米に達す。葉は狭小、表面凹入し、稍淡綠色を呈す。後に長尾氏の報知されたる所によれば、該蘚は湖底の階段狀を成せる粘土層に發生し、砂土には發生せず。是れ砂粒の水によりて移動し蘚の着生を妨ぐるに由るなり。

沈水蘚群落を成せるチクラネラ、スクローサ、フルマ、スブメルサ (*Dicranella squarrosa* Schimp. f. *submersa* Dixon) は外國産の同蘚の本種例へばコブシ氏の「サクセン蘚類集」(Kopsch, A., Bryophyta Saxonica, Cent. I, No. 18, 1919)の標本と比較するに、形態概ね一致せるも、唯猪苗代湖産のものは頗る深處に生ず。依つてチキンソン氏は特に之を一の變形と認めたり。該蘚が斯かる深處に發生するは其炭素同化作用上日光の一定の強度に適應するものなるべし。尤も湖岸に近き淺水にある毬蘚より新芽の發生するものあるを見れば、該適應は絶對的ならざるが如し。何れにもせよ該蘚が一般水生植物の發生せざる深處に於て殆純群落を形づくれるは生存上の意義あるものと考ふべし。

沈水蘚群落中には前記の如くミヅニラの幼植物の往々存在するを見るも、他には微小なる蘚類及苔類の往々含まるゝものあり。前者はチキンソン氏によりトサカホウワウゴケ (*Frissidens cristatus* Willd.) 後者はフルートルン氏によりコツブゴケ [*Chiloscyphus polyanthus* (L.) Corda, sp. modif.] なるを知れり。茲に兩氏檢定の好意を謝す。

上述の如く猪苗代湖の沈水蘚は毬狀を成さず、恰もスギゴケの如く直立密生するにより茲にミヅスギゴケと呼ばんとす。ミヅスギゴケ群落より如何にして毬蘚の形成せらるゝや未實地の調査を缺けども、蓋し湖底に於ける水の運動により、ミヅスギゴケの莖は絶えず該群落より引抜かれ又は切斷せられ、同處に發生せるミヅニラの幼植物又は前記の蘚類苔類と共に淺處に齎らさるゝに至るべし。此に於て種々の水草(ヒルムシロ類其他)の斷片又は水中にある葉片の如きものと混じ、水の回轉運動に伴ひ、次第に球形又は橢圓形を成し、偶、波動により湖岸に打上げらるれば往々一處に堆積して著しき觀を呈するに至る。

前報告に記せる如く毬蘚は多く猪苗代湖の東北岸に之を見れども、而かも其生成の場所は齋藤氏の考察せる如く遙に西部にして、上記の群落の所在地に遠からざるべし。形成されたる毬蘚は西風による湖水の運動に伴ひ東方へ遣られ、主に天神社附近の湖岸に打上られ、之に反し原位置には多く留殘することなし。尤も齋藤氏は蟹澤附近の湖岸より約五米を隔つる湖底の水深約一五米の處に無數の毬蘚を認めたるが是れ果して形成の場所なりしか又は他より齎らしたるものか、分明ならずとせり。

猪苗代湖中に於ては水動により絶えず毬蘚の形成を起すも、唯該蘚體の多く湖岸に打上げらるゝは一に風勢の然らしむる所なりとせば、季節により殆ど毬蘚を見ざるの理も亦自明なるべし。北海道阿寒湖の毬藻の球體が河口に於ける水の特殊の運動によりて形成せらるゝことは最近菅野利助氏の證明せる所なるが〔同氏論文、日本産マリモの研究、主として其球形集團に就て〕（日本水産學會誌第二卷第五號昭和九年一月）參照、猪苗代湖の毬蘚の場合に於ても亦同様の作用なしと云ふべからず。然れども齋藤氏の調査によれば、湖岸の東北方の長瀬川は上流より硫黄採取による廢物を下す爲其河口には固よりミズスキゴケの發生せざるは勿論なり、又同河より西方にある小黒川と西久保川の兩河口には水生植物密生し未毬蘚形成の現象を認むるに至らず。故に此點に關しては尙將來の調査を要すべし。

予は曩にチキンソン氏に毬蘚の乾燥標本を送れるに、同氏よりの返書に未嘗て斯かる物體を見聞せることなく、恐らく稀有のものならんと記せり。

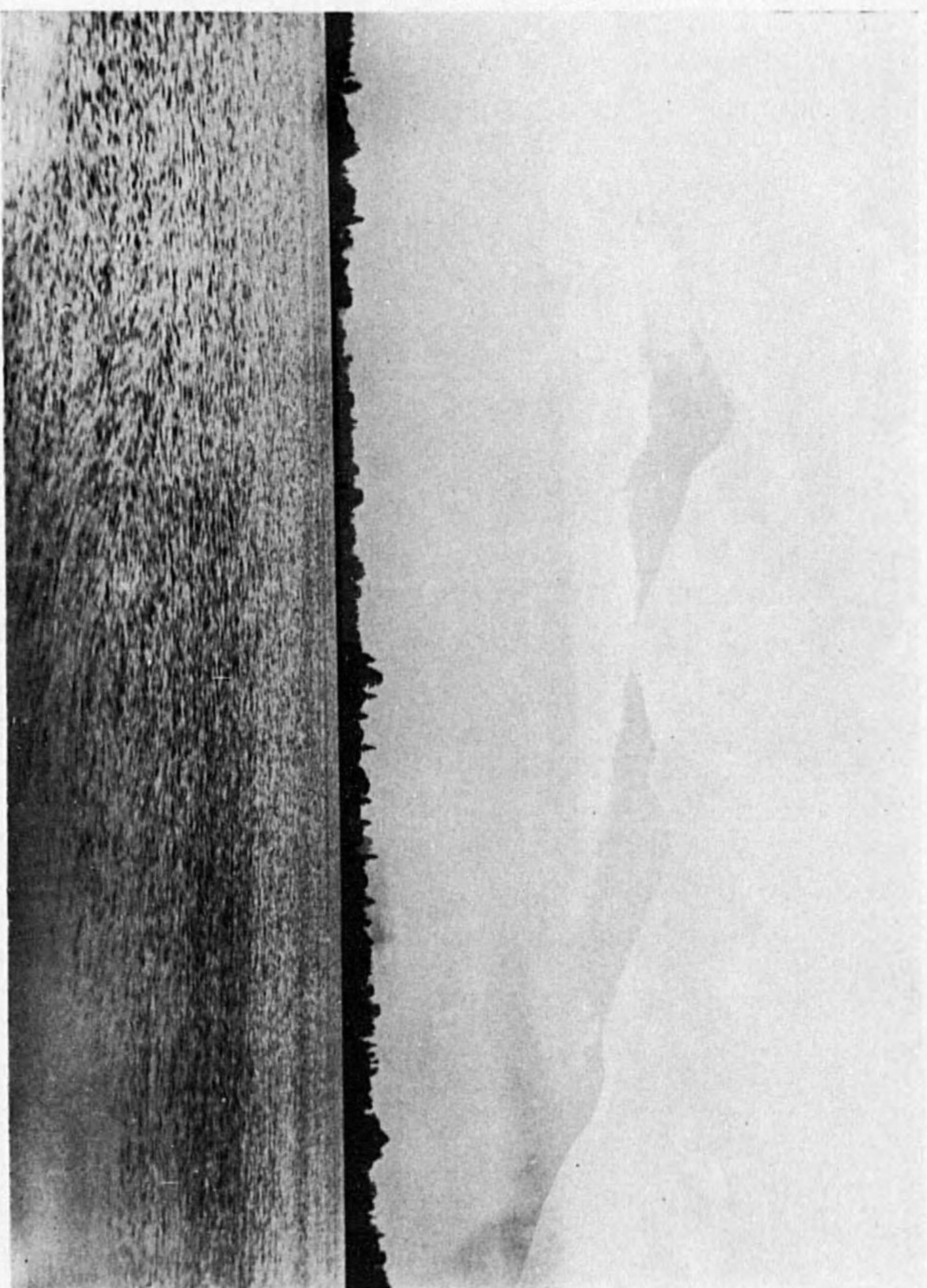
天然紀念物見地よりすれば猪苗代湖のミズスキゴケ群落と之より生ずる毬蘚とは學術上珍稀なるものなれば、隨て該群落は保存を要するものと思考す。

（昭和九年九月十六日調査）

因に記す、猪苗代湖のミズスキゴケ群落の在る所の水素、イオン濃度は理學士津田道夫氏の檢定によれば7.2 pIなり。

（昭和九年九月十六日調査）

版圖五十二第



近附地在所落群ケオギヌズミの湖代苗猪
View of Lake Inawashiro with Mt. Bandai. In this lake a submerged
vegetation of *Dicanella squarrosa* Schimp. f. *submersa* Dixon
has been found quite recently.

版圖七十二第



(樹號一第) 杏銀附葉御の社神森杉
Ginkgo biloba L. with seed bearing leaves in
the ground of the Sugimori Shrine.

版圖六十二第



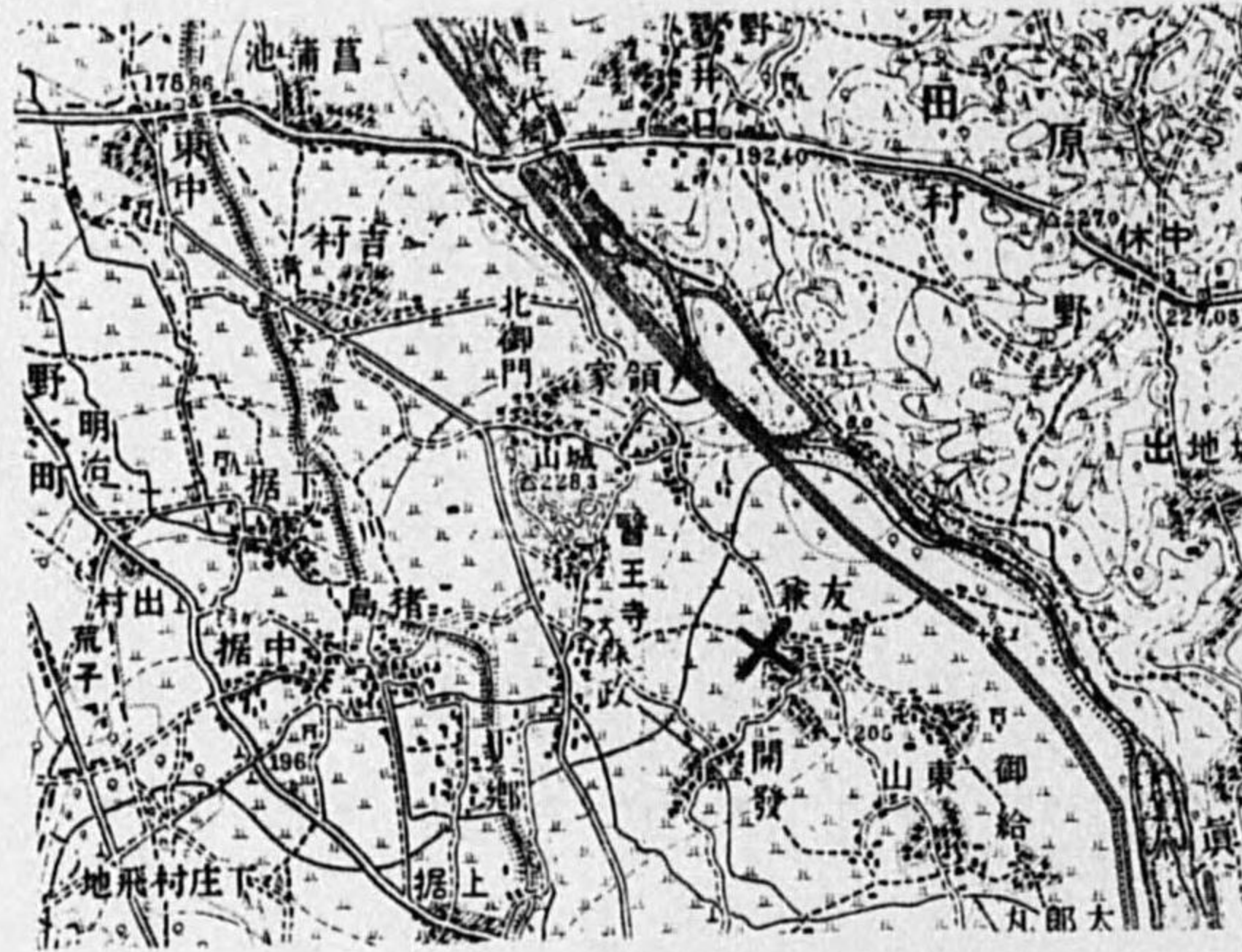
櫟大の寺福専
A giant *Zelkova serrata* Mak. in the precinct
of the Senpukuji Temple.



(樹號二第) 杏銀附葉御の社神森杉
Ginkgo biloba L. with seed bearing leaves in the
precinct of the Sugimori Shrine. Another tree.

福井縣

專福寺の櫨



福井縣 專福寺の櫨

地在所櫨大の寺福專 ×
(る據に圖地一分萬五部量測地陸)

所在 福井縣大野郡上庄村大字友兼專福寺境内
越前電氣鐵道終點大野三番驛より東南方一里餘
にして專福寺に達す。櫨は寺門内の東側に立ち、南
側は殆ど土塀に密接す。根元の北側は南側よりも
約九〇仙米低し。
根元周圍(高地面に沿ふて測る) 約 一五・二〇
それより一五米上の幹圍 同 一〇・五二
高地面より約三米の高さに於て幹の表面瘤起せ
る爲此部分は却て直下の部分よりも太くなれり。
樹幹の上方の木質缺裂せる爲針金にて縛れり。
本樹は一大老樹にして太き枝條の折損せるによ
り枝張大ならざれども、櫨の巨樹としては有數のも
のなり、天然紀念物として指定せらるべきものと思

考す。

福井縣 杉森神社の御葉附銀杏

五八

(昭和九年十月二十六日調査)

杉森神社の御葉附銀杏

所在 福井縣大飯郡青郷村六路谷村杉森神社境内及境外

小濱線若狹高濱驛より國道を西行すること約二里にして杉森神社に達す。若し松尾寺驛より國道を東行するときは神社まで僅々二十餘町に過ぎず。

杉森神社は國道に南面し、後方は山を負ふ。御葉附銀杏は二株あり。其中の一株(一號樹)は社殿の東側山腹(境外地)の斜面に立ち、周圍にヒノキの疎林あり。

根元の周圍 約 四五*

地上一・五米の幹曲 約 三〇〇

他の一株(二號樹)は社殿前の西側(境内地)に立

根元周圍



×杉森神社御葉附銀杏所在
(陸地測量部十二分一地圖に據る)

約 三九〇*

地上一・五米の幹圍

約 二八〇

調査當時正に結實せり。結實葉は他所の御葉附銀杏に於けるものに比して葉面概ね狭小なり。聞く所によれば兩株とも葉上結實は普通結實の約三割に當ると云ふ。

兩株の御葉附銀杏の來歴は明ならざるも、兩株とも殆同様の大きさなれば同時に栽植されたるものなるべし。兩樹に於ける葉上結實の現象は從來注意を惹かざりしが、昭和五年舞鶴小學校訓導三宅氏此樹下に於て御葉附となれる標本を採集し、始めて其珍樹なるを認めたりと云ふ。

福井縣天然紀念物調査委員故安藤伊作氏は曩に右兩樹の調査を施せり。

杉森神社の御葉附銀杏二株は學術上有益なるものにして天然紀念物として指定せらるべきものと思考す。

(昭和九年十月二十七日調査)

因に記す社殿の西側に接近してタブノキの大なるもの一株あり。根元の周圍約七・四〇米、それより一・五米上の幹圍約五・一五米なり。幹の周圍にはツヅラフデ卷着けり。蔓莖の基部の周圍約二七仙米なり。

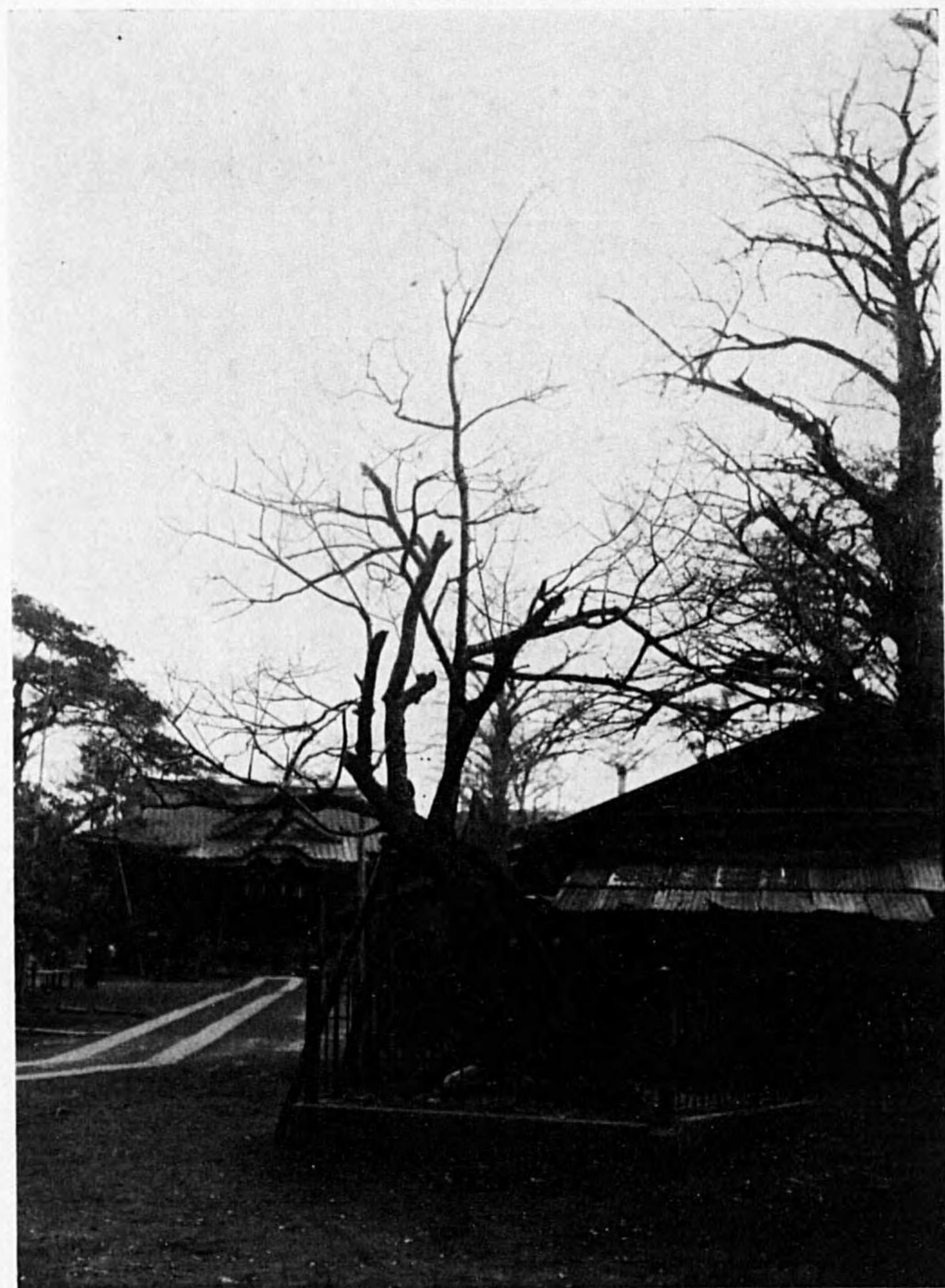
敦賀及東浦村海岸のオモト自生地

所在 福井縣敦賀郡大字泉字白岩及東浦村大字田結

敦賀より福井に通ずる國道の海岸に面せる上方の山林中にオモトの自生地あり。オモトは特

福井縣 敦賀及東浦村海岸のオモト自生地

五九



櫻旗山白の社神山白
The Hakusan-Hatazakura *Prunus serrulata* Miyos. f. *vexillifera* Miyos.
in the precinct of the Hakusan Shrine.

東京府 白山旗櫻

六〇

に群落を成さざるも、樹下の草叢中に點々發生し、葉の長さ約五〇仙米、幅約五五仙米に達す。
紀州・四國・九州等暖地の海岸にはオモトの野生するものもあるも、北陸地方の比較的寒地に於て同
植物の自生あるは著し。尙敦賀以北の地方(富山縣・石川縣等に亘る海岸地帯)に就て此點に關し調
査を要す。

(昭和九年十月二十七日調査)

東京府

白山旗櫻

所在 東京府小石川區郷社白山神社境内

白山旗櫻は社殿前の廣場の一部にあり。現存の株に接して根元より出でたる枯幹なり。

根元總周圍

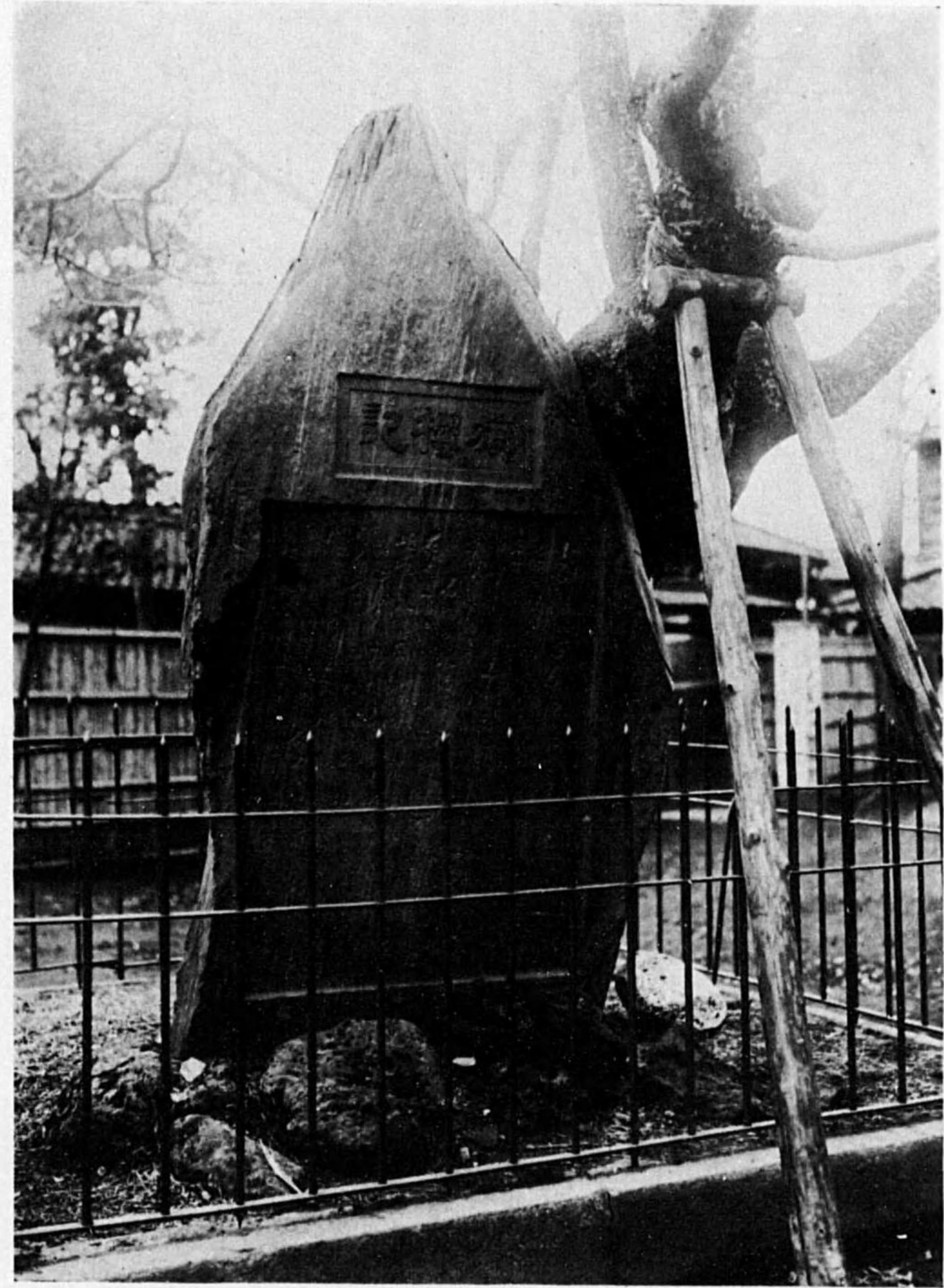
約 一七八

地上一・五米の幹圍

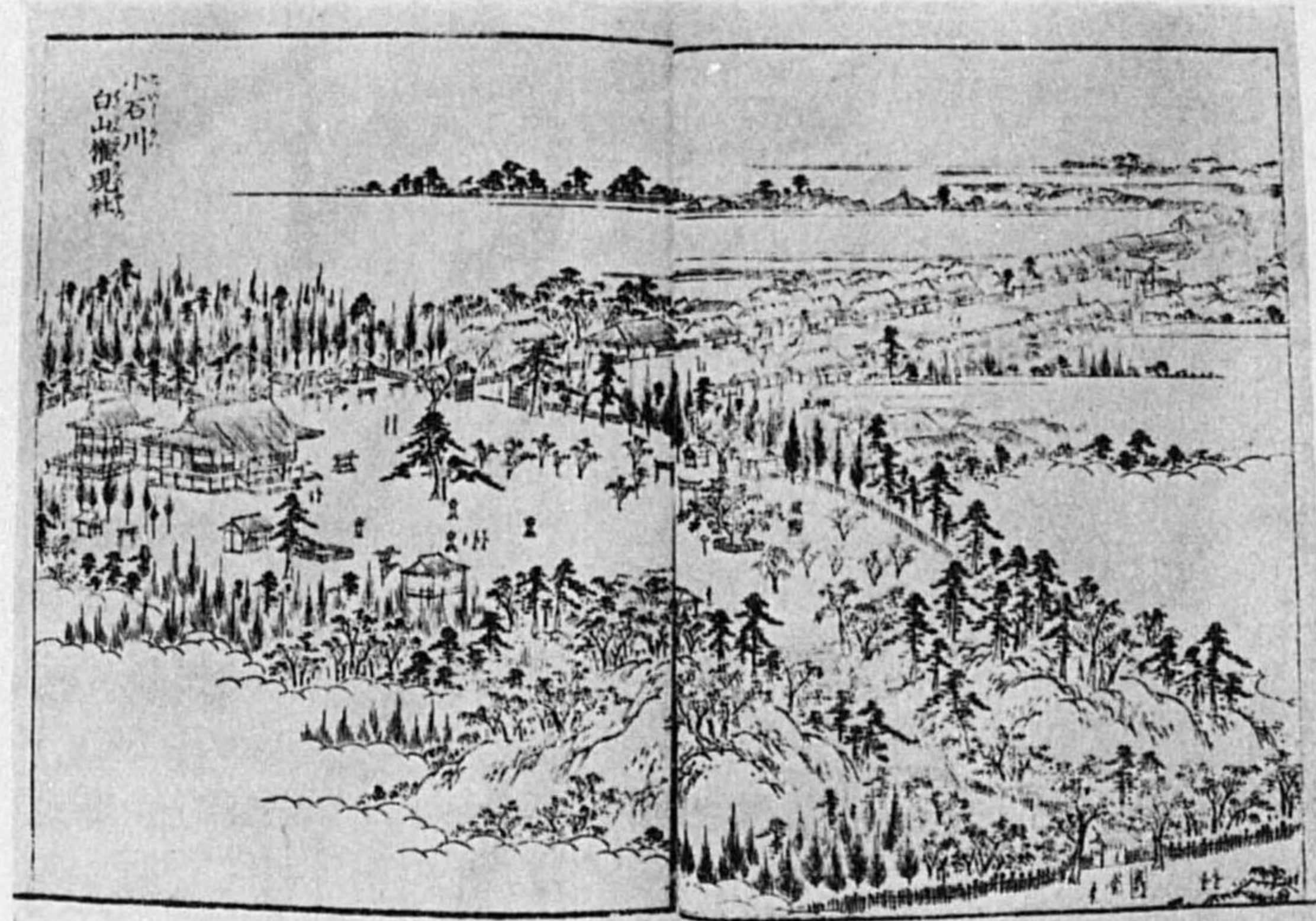
約 一五二

幹の兩側は扁平となり、枝の枯損せるもの少からず。

樹圍には高さ〇九八米の方形の鐵柵を繞らせり。柵の一方の幅二・八三米、礎石の高さ約〇・二米
なり。樹に接して明治二十九年守田寶丹の寄進せる石碑あり、上部に「皇國萬歲祝勝紀念」の文字を
刻し、碑面に此櫻の由來を記せり。



白旗山の櫻の碑
A stone monument commemorating the Hakusan-Hatazakura
as shown in the preceding plate.



東京府
白山旗櫻

江戸名所圖會に載せたる白山旗櫻の所在 第三圖

白山旗櫻 (*Prunus serrulata* Lindl. f. *vevillifera* Miyos) は里櫻の一品種にして、淡茶芽、成葉長さ約九仙米、幅約五仙米、葉柄約二仙米、二―四花の繖房花序、總長約三仙米、花梗約一四仙米、萼筒長さ約八密米、幅約四密米、萼齒約七密米、幅約三密米、花は白色、花徑約三七仙米、花瓣殆圓形、長さ約一八仙米、幅約一七仙米、五瓣の外數枚の旗瓣あるものあり。雄蕊約四五。

白山旗櫻は江戸名所圖會十三(第三圖)「江戸花曆春、寛政癸丑之花曆及當時以降逐年出版の「花曆等に載せられ、「花曆には旗櫻 老木帆タテサクラナリ 白山」とあり。

江戸時代の櫻譜にも此櫻を畫かれたるが、殊に著るしきは坂本浩然の筆に成れる、長者丸櫻譜(天保十三年)に「白山旗櫻」として載せられたるものにして、淡茶芽、大輪の白花、花徑約四仙米、花瓣長約一七仙米、旗瓣少しあり。亦



第四圖 長者丸櫻譜に載せたる坂本浩然筆
白山旗櫻の圖(天保三十年)

六二

以て此櫻の分木が久保櫻嶺の櫻園に培養されたるを知るべし。

現存の白山旗櫻が右の「長者丸櫻譜」中の「白山旗櫻」第四圖と特徴の概ね一致するによりて考ふれば、該樹は舊時の白山旗櫻の分木又は葉生によりて遺存せるものなるべし。

江戸時代の名櫻の残なれもの殆くなきの今日に於ては此櫻の保存を要すべし。

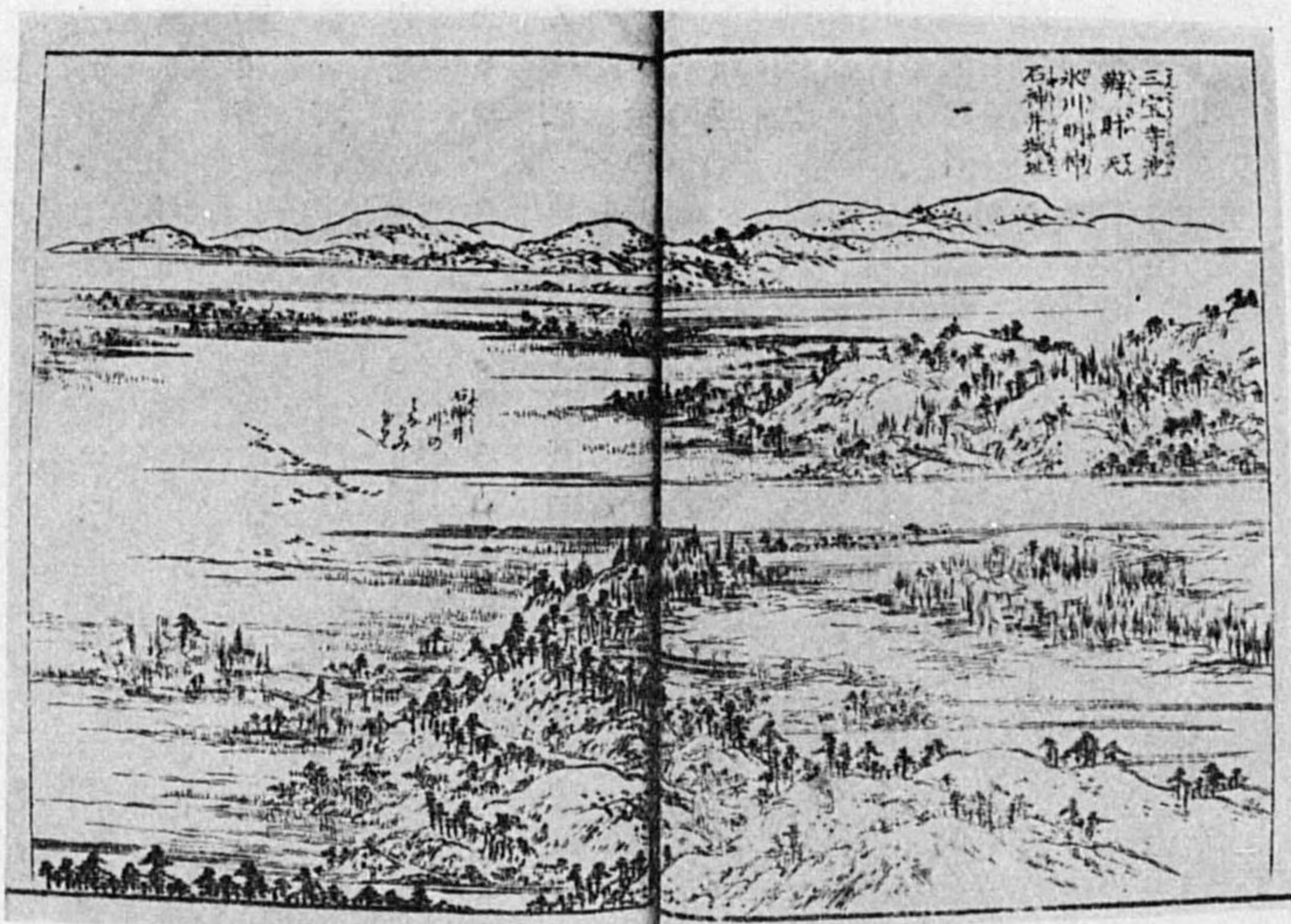
(昭和八年九月四日並同九年四月二十日調査)

三寶寺池の沼澤植物群落

所在 東京府板橋區上石神井二丁目

三寶寺池へ行くには武藏野鐵道線石神井公園驛にて下車するを便なりとす。又は中央線中野驛より定期「バス」あり。

三寶寺池は江戸時代に於ける郊外の名所として知られ、「江戸名所圖會」十三に此池と其附近の



第五圖 江戸名所圖會に載せたる三寶寺池の圖

石神井城址、氷川明神等の所在を示せる風景圖(第五圖)を載せ、池の「回帶」凡五百三十餘歩中に一小嶼あり、則池靈辨財天の祠を建つ。此池の水冬温に夏冷なり、洪水に溢れず、早魃に涸ず、湯々汗々として數十村の耕田を浸漑し、下流は板橋王子の邊を廻り荒川に落會へり」と記せり。又池の南方丘上の石神井城址に就ては、「其地北に池水を帯びたり、大手と稱する邊は水田にして左右に空塹の形の今猶存せり、文明中豊島氏此城に住といへり」とあり。今日にては石神井城址は其趣を變へ、又三寶寺池も自然の景觀を失ひ、又昔池邊にありしと思はるゝ濕原は見るを得ざれども、而かも此一帶の地形は尙舊時の面影を偲ぶべし。蓋し三寶寺池は武藏野の丘陵間に於ける小溪谷に湧出する水の溜れる所にして、石神井川の水源を成すものなるが斯かる湧水と之

六三

より流出する小河とは古來武藏野の諸他の部分にも存在せる所なり。

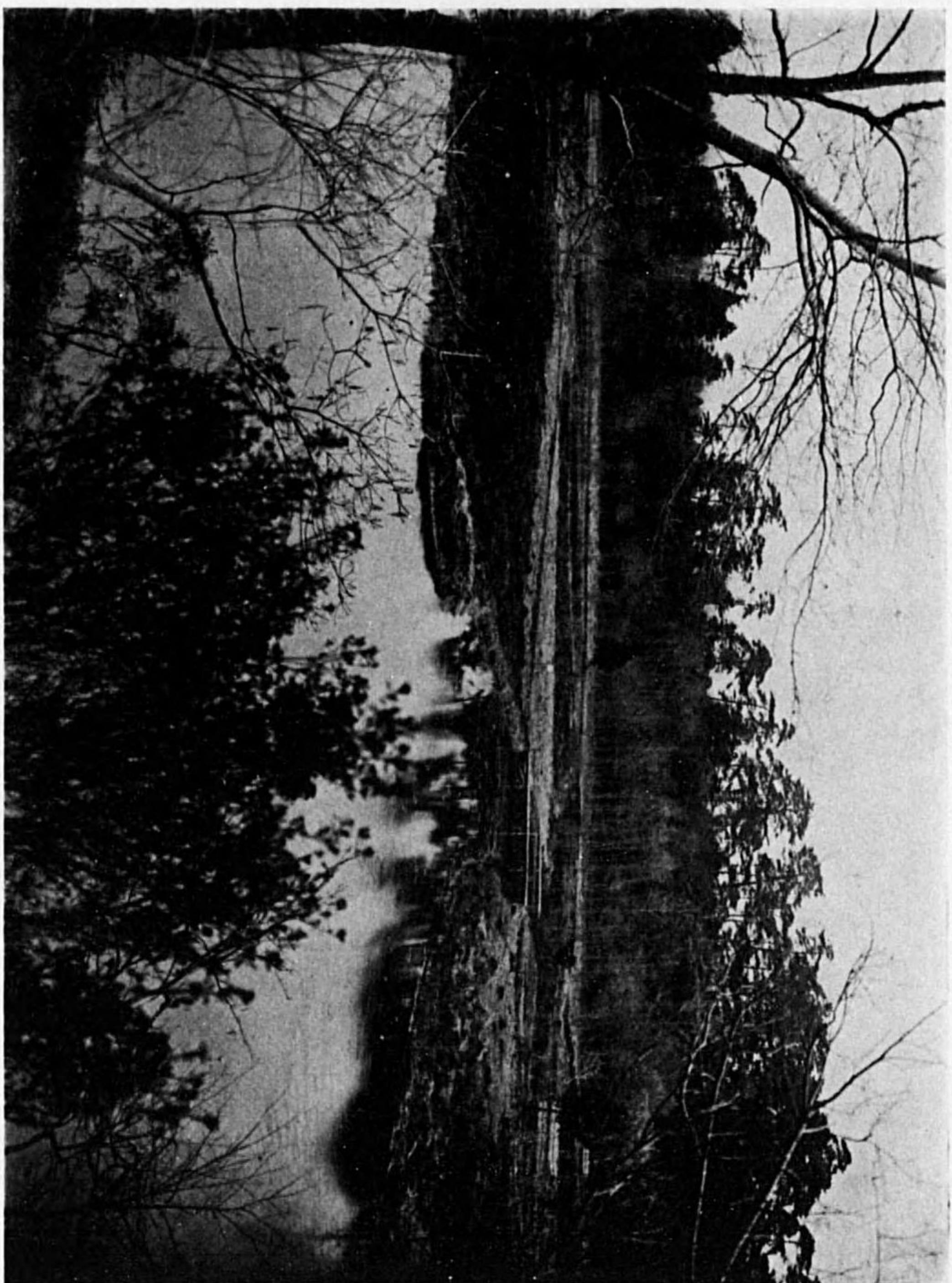
三寶寺池にはミヅガシハ・ヒツジグサ・ヒルムシロ・ミクリ・ヨシ其他種々の水生植物より成れる群落あり。池中現に島状を成せる部分には一群の濕草發生せるが、殊に著しきは、カキツバタにして、一面に繁殖し、五月下旬には一齊に開花す。花色は濃紫色のもの普通にして、多少淡色のものなきにあらざれども、白花又は紋りのものあるを見ず。花の直径は約一七仙米、外花蓋全長約九五仙米、幅約五仙米、内花蓋長さ約七仙米、幅約一三仙米なり。

カキツバタの發生せる地域は狭小なれども濕原状を呈し、其下底には泥炭の形成されたるものあるべし。此の如き濕原は舊時には武藏及下總の原野に存在し、カキツバタ花菖蒲又はマウセングケ類の濕原植物を産せるが、現時には開墾によりて土地の状態一變せり。此點より見るも三寶寺池の水生植物群落特に前記の池中のカキツバタ群叢は同處に存在する他の濕地植物と共に保存するの必要あり。

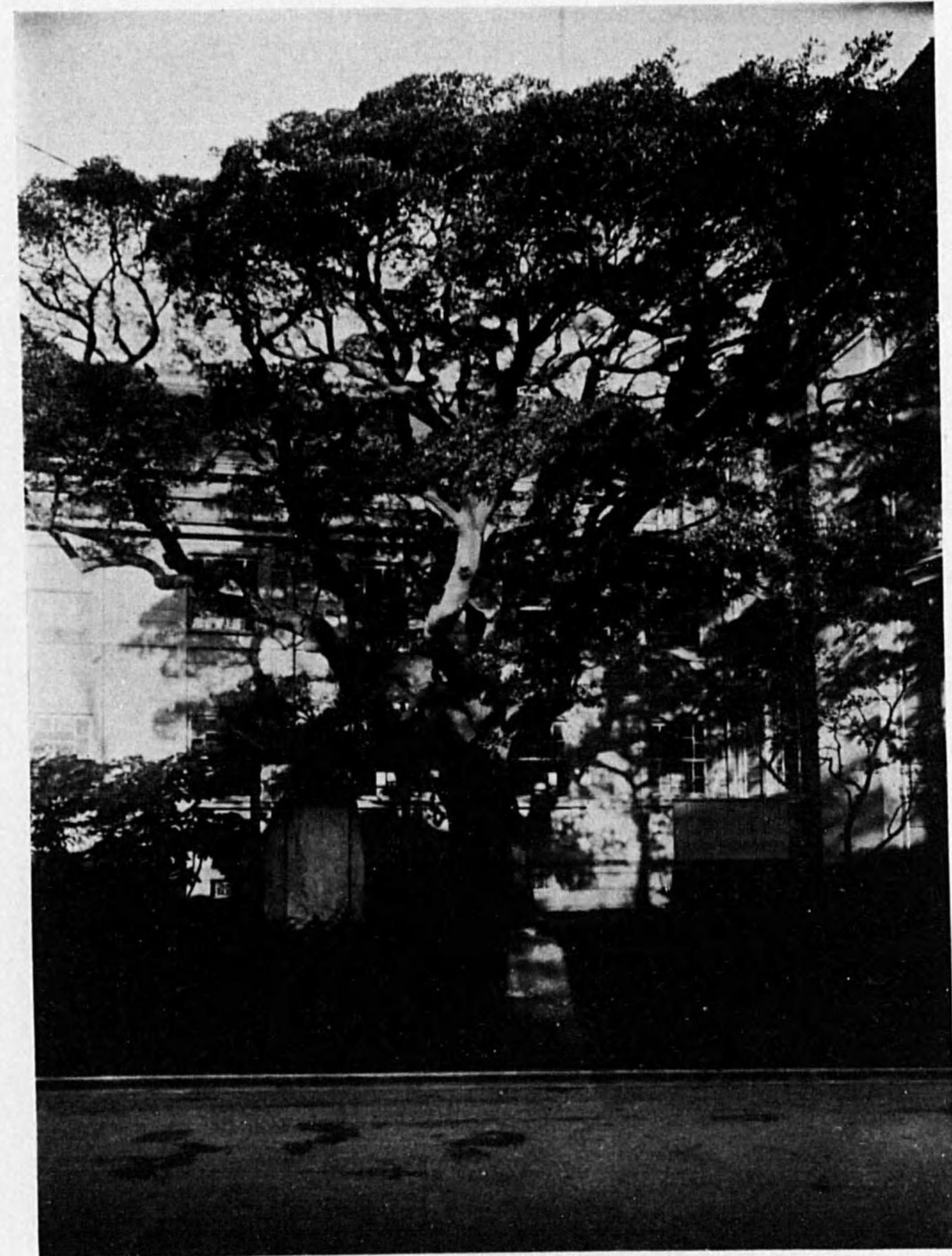
現に三寶寺池の一部には歐洲産のキシヤウブ (*Tris Pseudocorus L.*) を植ゑたる所あり。該植物は獨逸其他に見る雜草にして、往々池邊に栽植せらるゝも、固より本邦池沼自然の植物景觀を成すべきものに非ざるのみならず、繁殖力盛にして他の自生植物を壓倒するにより、斯かる舶來種は濫りに植うべきものにあらず。

(昭和九年五月二十九日調査)

版圖一十三第



落群植物植澤沼の池寺寶三
Hygrophilous plant association at Sanboji-ike.



クコクモの内邸藩頭學大平松舊
Ternstroemia japonica Thunb. in the ground of
the Tokyo University of Literature and Science.

舊松平大學頭藩邸内のモクコク

所在 東京市小石川區大塚窪町東京文理科大学構内

モクコクは正門内右側建物裏の一角に立つ。樹圍に石柱を繞らし、鐵鎖を張れり。

根元周圍

それより一五米上の幹圍

約 三三^{*}
約 二五五

地上約二・三米にして主幹は東北方及南方の二枝に分る。兩枝の基部の周圍は東北方の枝にては約一・九七米、南方の枝にては約一・四八米なり。東北方の枝は更に南北の兩小枝に分る。

枝張(根元より)

東方

約 四・五^{*}四

西方

約 六・〇七

南方

約 六・三七

西南方

約 五・一五

北方

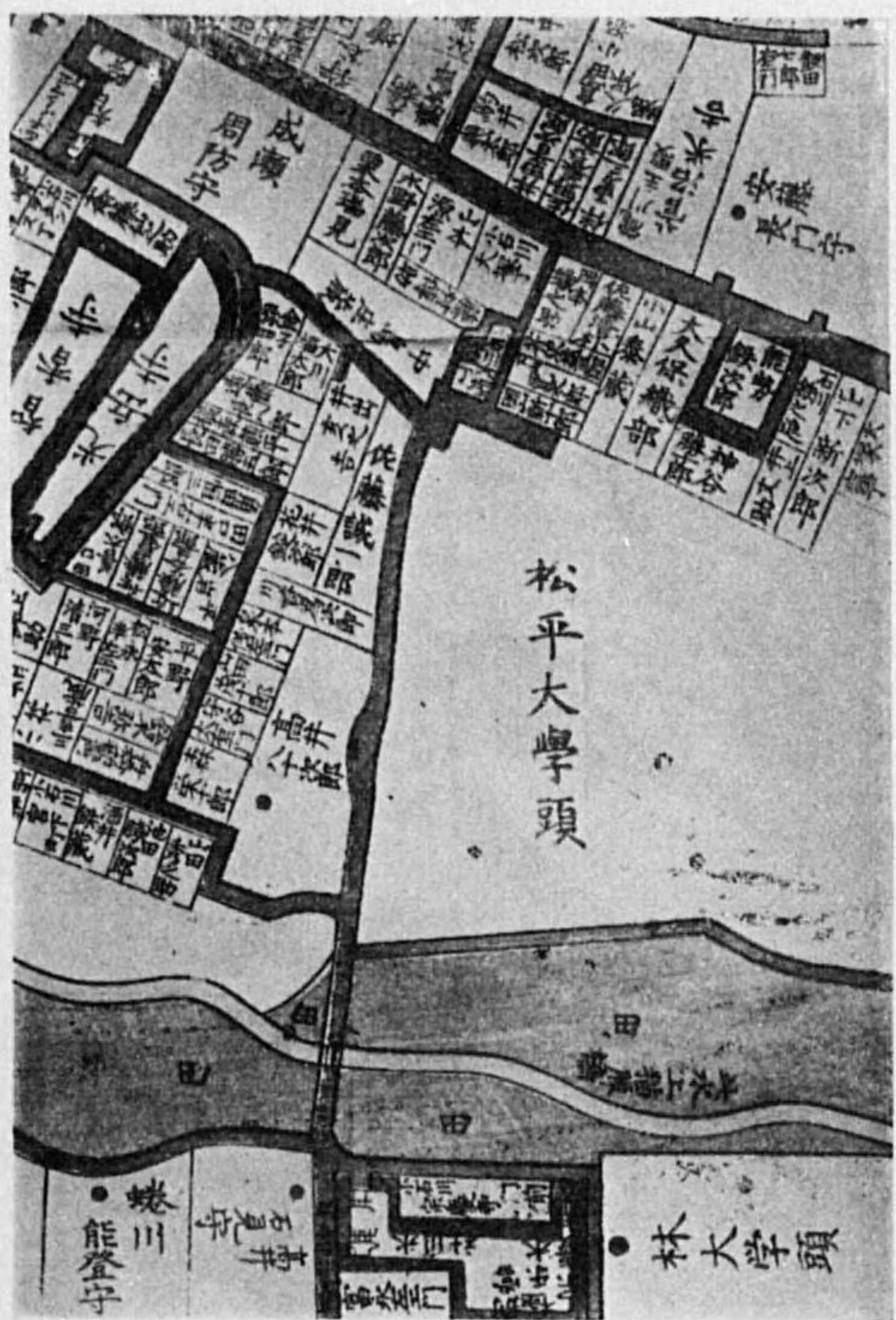
約 六・五八

樹高

約 九・一〇

本樹の東北側と東南側とは共に建物に近く、何れも約五・五米を隔つ。西北側は廊下までの距離約七・四米、西南側には建物なく、道路までの距離約六米なり。

現に本樹の立てる地域は江戸時代は松平大學頭の藩邸にして、江戸切圖(嘉永七年版)の「小石川繪圖(第六圖)に載せたり。(松平大學頭は守山藩にして、寛永中水戸藩徳川頼元の子頼貞の封ぜられた



第六圖 江戸切圖に載せたる松平大學頭藩邸の位置

る所なり。故子爵松平頼平氏の祖なり。同邸は明治五年芳野世經氏の所有に歸し、次で同三十一年東京高等師範學校の敷地となり現時に至れり。蓋し該モッコクは松平氏藩邸設置の當時よりの遺木なるべし。傳説によれば三代將軍家光此樹を賞し、之を吹上庭内に移さんことを望めるが、之が爲枯死の虞ありとして止めたりと云

(昭和九年十一月八日調査)

渡部董之介氏(稻水と號す、文學士、元文部省圖書局長、元第七高等學校造士館長)の本樹を詠ぜる厚皮香歌あり、左に之を録す。(此歌は「史蹟名勝天然紀念物」第九卷第一號、第六五頁に載せられ、又之を木碑に書して樹下に建てたり)。

厚皮香歌並序

稻水 渡部 董

昭和癸酉初春、東京文理科大學校庭、觀巨樹厚皮香、此地係舊守山藩邸址、藩祖松平頼貞爲徳川光圀姪、後年平野金華仕藩爲儒員云、

靈樹大蔽牛	偃蹇倚高岡	春淺寒凜冽	秀色鬱蒼蒼	一友導吾觀	道是厚皮香
產于武藏野	已閱九百霜	此樹應目擊	平安朝隆昌	須臾武門起	群雄梟耶狼
關左八州地	化爲鞞鼓場	東照公家康	撥亂茲龍驤	江都開丕基	闔闔交康莊
守山水藩族	好學而修德	起第大塚里	愛汝日眺矚	爾來賢達士	對汝應歎服
緬想源義公	來玩其淵穆	風流平金華	彩毫雅懷足	勾引護門徒	樹下高談熱
王政維新後	六十六年積	幸然免剪伐	儼存辟雍側	偶爾我今尋	俯仰懷古今
深喜資質美	堅如百鍊金	絕無衰朽色	焉容蝨蠹侵	蟠根如虯龍	樹容永堪欽
端莊示典型	晨夕接青衿	何以順典型	當鍊至剛心	放眼看世局	紛紛競荒淫
青衿被蠹蝕	慷慨汝能禁	我曾參文政	樹陰感喟深	枝幹入夢頻	似待吾一吟

海軍大學校正門前の椎

所在 東京市上大崎長者丸
海軍大學校正門前の小丘上に五株のシヒ(スダジヒ)あり。其中東方の丘上にある四株を南端より始め第一號第二號第三號第四號とし、又西方丘陵の斜面にある一株を第五號として左に記載すべし。

第一號

根元幹圍

約 五^{*}・五

それより一・五米上の幹圍

約 三^{*}・一五

第二號

根元幹圍

約 六^{*}・四五

それより一・五米上の幹圍

約 三^{*}・四二

第三號

根元幹圍

約 四^{*}・七九

それより一・五米上の幹圍

約 二^{*}・六三

第四號

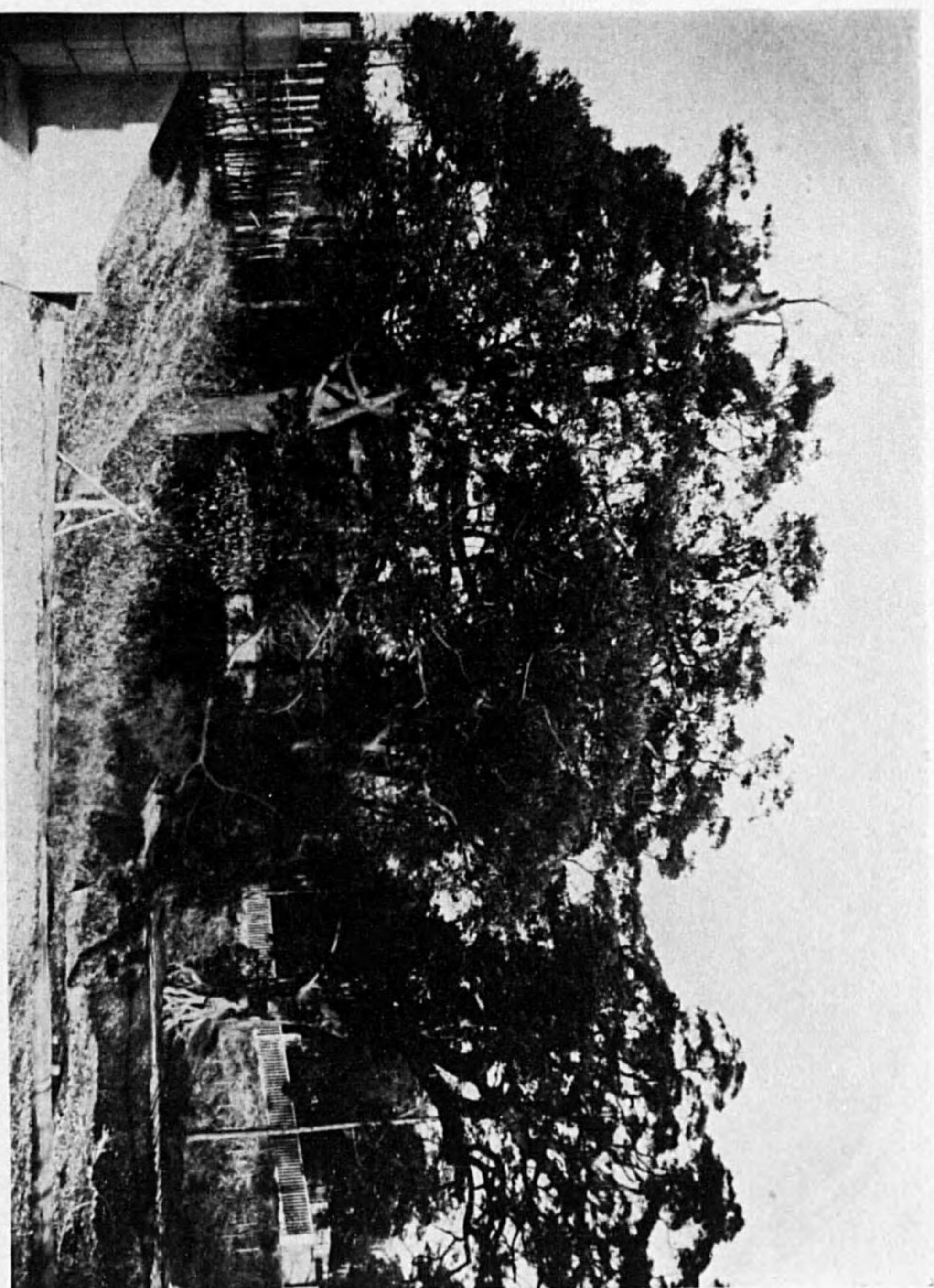
根元幹圍

約 五^{*}・四五

版圖三十三第



(一其) 椎の前門正學大軍海
Group of *Shiia Sieboldi* Mak. in front of
the gate of the Naval Staff College.



(二共) 椎の前門正校學大軍海
Group of *Shiba Sissooidi* Mak. in front of the gate of
the Naval Staff College. Another view.

それより一五米上の幹圍

約 二・六〇

第五號

根元幹圍

約 三・二四

それより一五米上の幹圍

約 二・五七

第三號及第四號は幹の上方に伐られたる所あり。

上記のシヒ中第一號及第二號樹はシヒの地方的巨樹殊に東京市内にある巨樹として有數のものなり。

(昭和九年十二月三日調査)

補記

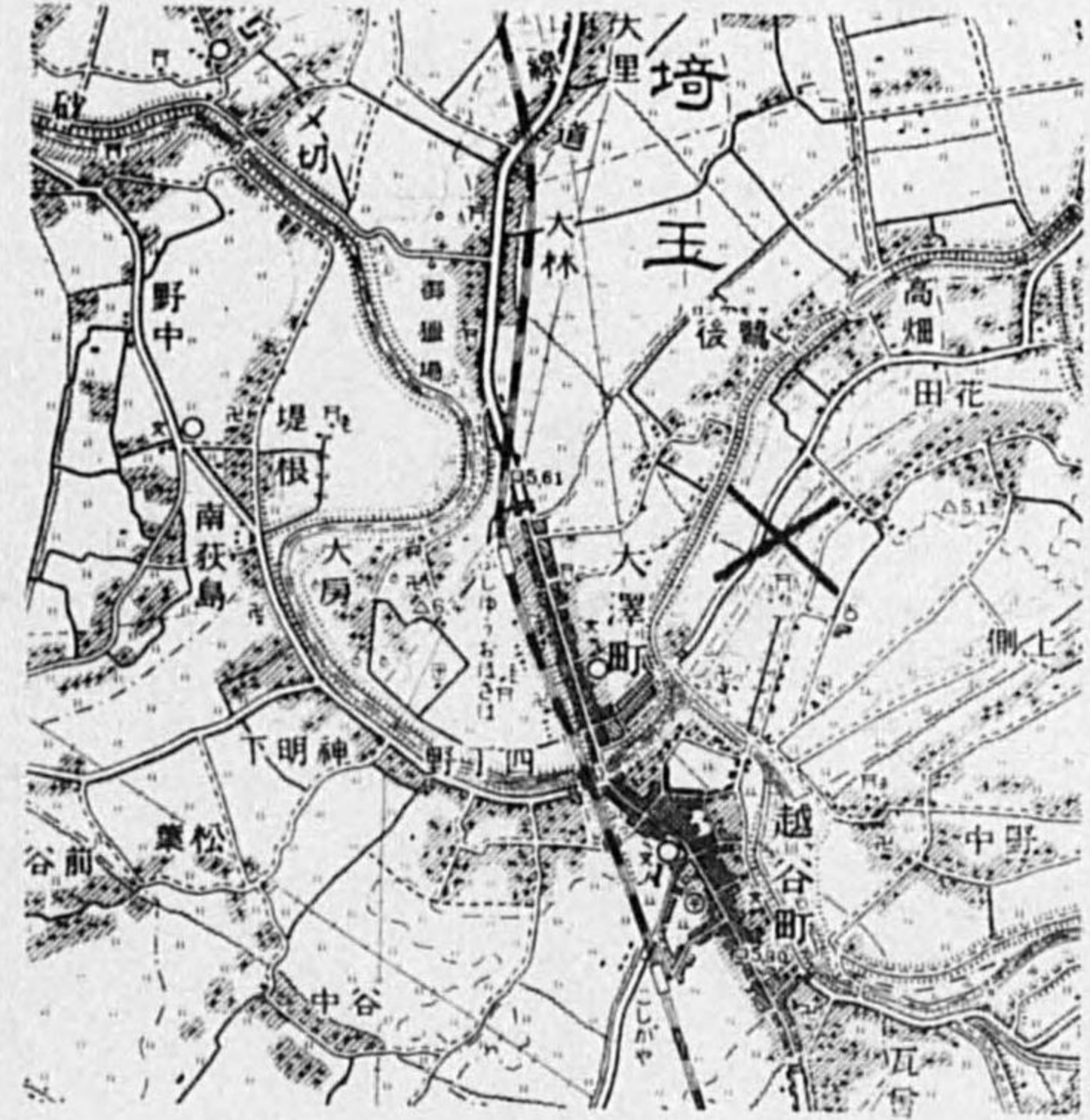
埼玉縣

越谷の藤

所在 埼玉縣南埼玉郡越谷町郷社久伊豆神社境内

越谷の藤はムラサキフデ (*Wickaria floribunda* DC.) の大なるものにして花序の長さにより五尺藤とも云ふ。社殿の南方池邊にあり。根元は外観上南北兩株に分れ、北株にては根廻約一三米、南株に

埼玉縣 越谷の藤



越谷の藤の所在地
(陸地測量部五分一萬地圖に據る)

七〇
ては五二米なるが、其實南株は二幹(根元の總
周圍約二・九米)と四幹(根元の總周圍約三・五米)
の併合せるものに外ならず。

藤棚は一七四坪の面積を被ひ、東西の長さ
約一四米、南北の長さ約三〇米に及ぶ。花序
は甚長く、調査當日測れるものは一・五米あり。
聞く所によれば一九米に達すと云ふ。

本樹は紫藤の巨樹として有数のものなり。
因に記す。本神社の參道約五町に互りて
赤松の並木あり。地上一・五米の幹圍約二
米に達するものあり。

(昭和七年五月十三日調査)

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十日發行

文 部 省

(凸版印刷株式會社印刷)

終